幸福の科学の会員よ聞きなさい！

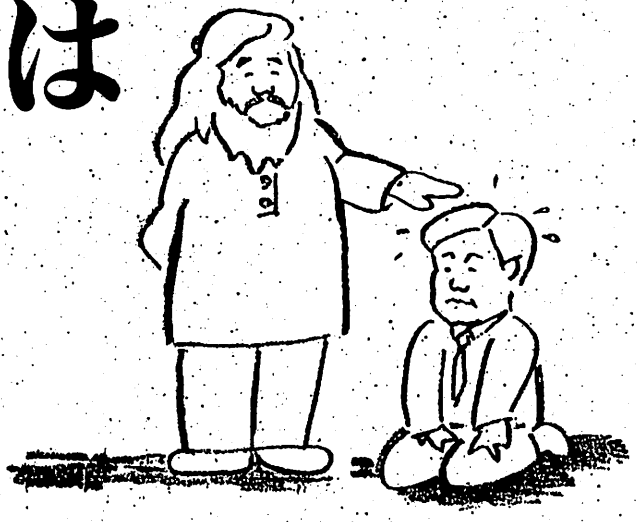
真実の仏陀の教えはこうだ！

麻原彰晃

幸福の科学
の会員よ
聞きなさい！

真実の仏陀の教えはこうだ！

麻原彰晃



まえがき

わたしは、日本人としてこのような書籍を出版しなければならなくなった自分のカルマを、大変残念に思う。しかし、書かねばならない。

幸福の科学、あるいは大川隆法という名については、わたし自身、書店によく本が並んでいる人であるとか、あるいは現世的な本を執筆している著者であるという印象しか持ち合わせていなかった。

しかし、オウム真理教バッシングのこの二年間に急成長した幸福の科学なる教団の実態を知った以上、ここでペンを執らざるを得ないのである。それは、幸福の科学を今実践している人たちの来世が地獄であるということを確信したからである。

ではなぜ、幸福の科学を実践している人たちが地獄への道を歩いていると言いきれるのだろうか。それは次に引用する密教経典『虹の階梯(かいてい)』(ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一共著・平河出版)の一文と、原始仏典である『南伝大蔵経・スシーマ』の内容を見ていただいたら、よくご理解いただけるはずである(『スシーマ』の全文については、巻末を参照のこと)。

すぐれた密教行者リンジェレパがその湖のほとりに立って泣いているのを見て、人々は、彼に涙のわけをたずねた。行者は答える。この湖には、前生で人をだまして大儲けした一人のラマが孤地獄に苦しんでいるのが見える、と。人々が彼にそのラマを見せてくださいと頼むと、行者は念力で湖の水を干上げてみせた。すると、湖の底には巨大な怪魚がうごめいていて、その身体にはいろいろな動物たちが食らいつき、怪魚は苦しみにのたうちまわっているではないか。この怪魚こそ貪欲なラマの変わりはてた姿であり、その肉に食らいついているのは、前生で彼にだまされた者たちであったのだ。このラマは、「死者のポワ」という人の死に際してその意識を浄土に送りこむヨーガをただ金儲けのためにやって、死者の意識をとんでもない所に送りこむなどして人をだまし不幸におとしいれていたため、このような孤地獄に生まれることになったのである。

（『虹の階梯』より）

五九「スシーマよ、確かに、愚者のように、宗教的に罪深い者のように、不善者のように、違反があなたを圧倒した。あなたは、このようによく言明された法則と律において、法則の泥棒である出家者であった。

六〇　スシーマよ、たとえるならば、無法者で悪事を働く者を捕らえて、国王に会わせたとしよう。『王よ、この者はあなたにとって無法者で悪事を働く者です。この者にあなたのお望みの処罰を命じ

てください」と。

国王はこの者にこのように断言する。

「友よ、行きなさい。その男をしっかりしたロープで手を後ろにして強く縛り、かみそりで頭の毛を短く刈り込み、激しい小太鼓によって、車道から車道へ、四つ角から四つ角へと連行し、南門から出て、市の南で彼の頭をたたき割りなさい」と。

そこで、その男をしっかりしたロープで手を後ろにして強く縛り、かみそりで頭の毛を短く刈り込み、激しい小太鼓によって、車道から車道へ、四つ角から四つ角へと連行し、南門から出て、市の南で彼の頭をたたき割る。

六一　スシーマよ、これについてどう思うか。その男は、これによって苦しみや激痛を経験するであろうか。」

「そのとおりです、尊師よ。」

六二「スシーマよ、その男はこれによって苦しみや激痛を経験するのだ。それゆえに、このようによく言明された法則と律において、法則の泥棒である出家は、より苦しむ結果となり、より苛酷である結果となり、またさらに破滅に至らしめるのである。

（『発端相応』七〇「スシーマ」より）

この『虹の階梯』や、あるいは『スシーマ』に見られる内容をわかりやすく説明すると、仏典の教えを盗んだり、あるいは仏典の内容をねじ曲げて伝えた者は、地獄へ至るということなのである。そして、まさしく大川隆法氏はその地獄へと至る大悪業を積み続けているのだ。

これからわたしは、大川隆法氏の書いた本の中の誤った見解、つまり、真理ではない教えについて、一つ一つ仏教修行者の立場から、それを正していきたいと考えている。

わたしは、今行なわれている幸福の科学対講談社の闘いなどについては、全く興味を持ち合わせていない。それは世事のことであって、俗事のことであって、宗教世界のことではないからである。

しかし、未来においてマイトレーヤとして降誕するはずのわたしが、この日本に存在している以上、今から二千五百年前に釈迦牟尼（サキャ神賢）が説き明かされた真理の教えがねじ曲げられていることを知って、それを放置しておくわけにはいかないのである。

もちろん、この釈迦牟尼とて真理を説き明かしたのであって、真理をそこで創造したわけではない。それは釈迦牟尼以前の多くの如来（真理勝者）方がそうであったように、

そこへ到達した者がそれを知った上で説き明かすのであり、そこでは一切創造は行なわれていないのである。

よって、〝麻原彰晃の真理の法〟というものも存在していないし、〝大川隆法の真理の法〟というものも存在しないのである。真理の法は真理の法のみで存在しているのだ。

ところが、彼はとんでもない暴挙に出たわけだ。その背景は、彼の宗教体験の貧しさにあると、わたしは考えている。

彼の行なっているチャネリングは、明らかに霊媒であり、仏教的見地からその状態を説明するならば、それは魔境に他ならない。

魔境というのはどういうことかというと、精神世界の修行を始めた人が必ず通過しなければならない途中の点ということになる。そのとき、諸々の現象に対して判断する能力は存在せず、また、絶対的真理を見極める力もその状態においては存在し得ないのだ。

わたしは大変長い間、いろいろな経典の学習と瞑想修行を続けてきた。その大変長い間というのは、この宇宙の創造が始まり、破壊される期間を指すどころではない。宇宙の創造と破壊が何十回も何百回も何千回も、あるいは何万回にも何十万回にもわたって繰り返される長い長い期間においてである。

このような期間、わたしはある生では真理勝者ヴィパッシー仏の弟子であったし、ある生では真理勝者カッサパ仏の弟子であった。もちろん、他の真理勝者が登場なさったときも、わたしは何らかの形で、その真理勝者方、十力者方と縁を持ち、そこで法を学び実践してきた。

そして、わたしは現在、仏教でいうところの〝イェシェ〟というステージに到達しているのである。これは、チベット仏教の偉大なる成就者たちがそれを是認しているし、実際わたしの状態は、経典ではそのように説明されているのである。

では、イェシェとはどのような意味合いであろうか。

これは、日本語に直すと〝完全なる、絶対なる、神の叡智〟ということである。そして、このイェシェは、迷妄を打破した魂の状態、無智を破壊した魂の状態と言い換えることができる。したがって、日本でおそらくただ一人、わたしだけが大川隆法氏の教えを正しく分析し、修正を加えることができるのではないかと考えている。

わたしは、阿含宗、あるいはＧＬＡ、あるいは仏教研究家のお書きになったいろいろな仏典や密教経典、その他をまず日本において読み、理解し、実践した。

しかし、この経典群の中には、例えば「五蘊」についての解釈の過ちや、あるいは、

パーリ語から漢訳されたときの過ち等々、多く見受けられた。

なぜわたしが、それを過ちだと考えたのかというと、それはわたしの過去生において、先程も述べたように多くの真理勝者、多くの十力者のもとで修行を続けてきたという土台があり、正しくないものを見抜く力を持っていたからである。

そして、このままではいけないと考えたわたしは、インドへ行き、そしてインドのいろいろな聖者方に会い、また、インドのダラムサラーへ行き、チベット仏教のいろいろな成就者方と話をすることにより、あるいは教えを受けることにより、その問題点を解決していったのである。

また、わたしには、この人間界だけではなく、アストラル世界やコーザル世界においても、あるいはマハー・ニルヴァーナ（大完全煩悩破壊界）においてもグルが存在している。もちろんこのグルは偉大なる成就者方であり、偉大なる完成者方である。そして、その中心がシヴァ大神なのである。

もともと教えを広めるという場合、そのカルマの怖さについて恐怖しなければならない。内側の体験が存在していれば、その恐怖はある一定の方向へとその魂をいざなう。つまり、それはわたしの場合と同様に、一つの教えを理解したらそれよりもっと深い教

えを、その深い教えを理解したらそれよりもっと深い教えを、そして、その教えを示す者が日本にいなければ日本からその国へと飛び、その教えを理解するといったようにである。

ところが、大川隆法氏の教えは、その一つ一つが浅薄なのだ。つまり、薄っぺらで、単なる人の著作の受け売りであるとしか言わざるを得ない。

それでは、これから一つずつ彼の教義をまず示し、それに対して真実の仏教的見解によって、その過ちを指摘するといった形で一つ一つ進めていきたいと思う。

この本が今、幸福の科学を実践している人たちにとって大いなる利益となりますように。そして、もしわたし自身が本書の中で過ちを犯したならば、それはシヴァ大神、およびすべての真理勝者の知るところとなり、その過ちを正していただけますように――。

一九九一年九月

麻原　彰晃

目次

まえがき

第一章　大川流仏教解釈の大ウソ……17

1　非真説・八正道……18

◎仏教と似て非なる〝大川流八正道〟
◎不幸の根源は魔境?――〈正見〉のデタラメ
◎仏教的宇宙観と相容れない――〈正思〉のデタラメ
◎定義も曖昧――〈正語〉のデタラメ
◎無智なるがゆえの解釈――〈正業〉のデタラメ
◎ムード解釈の落とし穴――〈正命〉のデタラメ
◎全く具体性なし――〈正進〉のデタラメ
◎完全なる勘違い――〈正念〉のデタラメ
◎レベルが低い大川流サマディ――〈正定〉のデタラメ

2 六波羅蜜のウソ……58
◎前代未聞の逆説 〝大川流六波羅蜜〟
◎十戒の対比からもわかる 〝強引なこじつけ〟
◎仏教的見地と真っ向から対立
◎出家修行者の戒を知らない 〝大川流〟
◎大川流 〝禅定波羅蜜〟 は空想家のたわごと!?
◎笑止! 般若波羅蜜の経験のない 〝仏陀〟
◎取り違いと視点のズレが招いた 〝大川流〟 の悲劇

第二章 仏典を知らない仏陀の過ちを正す……83

1 凡人と変わらない 〝悟り〟 の中身……84
◎釈迦が容姿・味覚にとらわれていた?
◎過ちの原因は霊格の低さ!?
◎世界観に見る宗教の優劣
◎釈迦を冒とく
◎悟りを否定——大悟の 〝矛盾〟

◎欲界のカルマが切れていない仏陀
◎瞑想を知らない瞑想家の哀れ

2 間違いだらけの〝転生〟……106
◎前生の記憶がない仏陀?
◎煩悩を肯定する大川流仏教
◎〝六道輪廻〟を真っ向から否定
◎仏教の根本的教義がない!?

3 〝地獄〟のウソ……123
◎悪業ゆえの闇地獄体験?
◎仏典と全く違う地獄観

4 菩薩、如来……すべて自己流解釈……139
◎マイトレーヤが女性の菩薩!?
◎「嘘は暴露される」は彼の説く法どおり
◎根拠不明の〝仏陀の二十相〟
◎矛盾が矛盾を呼ぶ支離滅裂の法

◎一貫した世界観なきツギハギが呼ぶ混乱
◎個の完成者が異説・邪説に惑わされる?
◎〝大魔境〟としか思えない
◎全くわからない〝如来〟の意味
◎根拠が見えない

5 魔境独得?の宇宙観 …… 153
◎支離滅裂は独得
◎「色即是空」「空即是色」も歪められた
◎「空」と「無」の本当の意味
◎現代科学へのとらわれが世界観を小さくする

6 仏典を知らない仏陀の神通力 …… 162
◎六神通の本当の意味
◎梵天を超えた釈迦の神通力の証明
◎教学不足の仏陀
◎話せば話すほどボロが出る

7 間違いだらけの仏教知識……178
◎〝自由〟の本当の意味
◎〝正法〟の定義
◎仏でない魂を霊媒する矛盾
◎「縁起の法」の迷解説は無智の証明
◎〝業〟は魂の記憶として残る?
◎悪の根源を他人のせい?
◎正しさを有するのは、〝神〟それとも〝真我〟?
◎真の仏陀は愛を見ることもできる
◎真実の愛、「四無量心」
◎仏教の常識が通用しない大川流
8 大川流言葉の遊び——仏教の戒を無視した綺語集……193

第三章　真実の仏陀の教えはこうだ――麻原彰晃尊師説法 …… 199
第一話　実践的八正道と四無量心
第二話　迷妄をはらう――真の六波羅蜜
あとがき
参考文献　『スシーマ』

（注）
（一）本文に引用しました原始仏典『南伝大蔵経』の各経典は、パーリ語の原典からその原義を忠実に表わすために、麻原彰晃尊師とオウム真理教『南伝大蔵経』翻訳チームが、検討し決定した訳語を採用しています。
（二）大川隆法氏の著書からの引用については、必要と思われる箇所のみを引用し、省略は「…（略）…」として表わしています。

本文協力
ヤソーダラー正大師
マイトレーヤ正悟師
マンジュシュリー・ミトラ正悟師
カンカー・レーヴァタ師
ヴァンギーサ師

第一章　大川流仏教解釈の大ウソ

1 非真説・八正道

◉仏教と似て非なる〝大川流八正道〟

八正道といえば、仏教の七科三十七道品の中でもその根幹をなす重要な教えであり、実践方法である。

その八正道の名を語り、〝現代の仏陀〟と称する大川隆法氏が、とんでもない教えを繰り広げているのが『真説・八正道』（幸福の科学出版）である。まずはその問題点にメスを入れてみたいと思う。

八正道は、一、正見（正見解）、二、正思（正思惟）、三、正語、四、正業（正行為）、五、正命（正生活）、六、正精進（正奮闘）、七、正念（正記憶修習）、八、正定（正サマディ）という八つの聖なる道から成り立っている。

この順番にも意味があるのだが、大川氏は順番を入れ替え、二番目に来るべき正思を六番目に持ってきている。

しかし、本書では一応正しい順に沿って、取り上げてゆきたい。

なお、大川氏の著書『釈迦の本心』に〝八正道とは何か〟という、氏の八正道についての見解が述べられていて興味深い。まずは、その根本的な八正道のとらえ方について考えてみたいと思う。

さて、本章では、釈迦の思想のなかでも、最も有名なもののひとつである「八正道」について説明をしてみたいと思います。

菩提樹下において悟りを開いたときに、八正道の原形になるものはあったわけですが、いかんせん、まだ方法論としては確立しておらず、八正道が八正道として人びとに説かれるようになるには、その後、約一年の歳月がかかりました。

（『釈迦の本心』より）

これは明らかに間違いである。なぜならば、釈迦牟尼は解脱なさり、一番最初にお説きになった法、これが聖なる八段階の道、つまり、八正道なのであるから。

つまり、このとき釈迦牟尼は四諦（四つの絶対的真理）と八正道をお説きになったのである。四つの絶対的真理とは、

一、苦（この世は苦である）
二、苦の生起（苦は必ず生起するものである）
三、苦の滅尽（苦は滅することができる）
四、苦の滅尽に至る方法（苦の滅尽に至る方法が存在している）
という四つのことで、この最後の「苦の滅尽に至る方法」、それが八正道なのだ。

こうして考えに考えた結果、自分の教えのいちばんの根本は、心を正すという点にあるという結論に達したのです。ならば、いかにして心を正せばよいのか。自らの心を調律していけばよいのか。それを考えると、結局、心を調律するためには、自らの心をより澄み切った心、すなわち、神近き心でもって見つめ直す必要があるのです。そして、その神近き自分のことを釈迦は「善なる第三者」、あるいは「善我」と呼んでいたのです。

確かに、人間は人びとの間において生きているうちには、さまざまな思いが去来して、何が自分の本心であるのか、本領であるのか、何が心の奥にあるものであるのかがつかめないでいます。しかし、誰しも人びとの目を去り、人びとの波動を受けないところに引き下がって、静かに己の心と対面したときには、「嘘をつけない心」「善我なる心」に至ることができます。

虚栄心であるとか、あるいは劣等感の裏返しであるとかで、人前で自分をどのように取り繕ってみても、一人で心静かに座したときに、何か深く思い当たるものがあるのです。それが結局は、真実なる心なのです。神の心と言ってもよい、第三者の心と言ってもよいし、また、善我なる心と言ってもよい。あるいは、自分自身のなかの本当に純粋な部分、嘘がつけない部分、こうした部分だと言ってもよいでしょう。この真実なる心でもって、自らの思いと行ないを振り返ってみる。これが八正道の出発点であったわけです。

そして、その方法としてブッダはいくつかの点検箇所を考えたのです。それが有名な「正見」「正語」「正思」「正業」「正命」「正進」「正念」「正定」という八つの徳目です。見る、語る、思う、生業を立てる、生きてゆく、精進をする、念う、定に入るというこの八つの心の方向性、あるいは肉体の行動、これに「正しい」という号をつけました。この正しさというものは、決してマル・バツの正しさではないけれども、内を深く見つめていくという意味での正しさであったわけです。こうして八つの項目を、ひとつひとつ静かに反省していくということが、主な方法でした。

釈迦の反省は、深夜の三時頃から明け方に近いときに行なわれることが多かったようです。そして、この八つの徳目それぞれについて、だいたい二十分程度、反省を行なっていました。こうした反省を行なうにつれて、自らの心が軽くなり浄化されていくという現象を感じ取っていたのです。

これが八正道についてのあらましであります。

（『釈迦の本心』より）

この八正道の説明については、あまりにも仏典の内容と違いすぎるので、ここではパーリ語で書かれた原始仏典の日本語訳を載せさせていただく。

〔八〕第八　分別

一　サーヴァッティーの地にて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、君たちに聖なる八段階の道を説き分別しよう。聴きなさい。よく作意しなさい。私は説こう。」

「かしこまりました、尊師よ。」

と、彼ら向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。そこで、世尊はこう演説なさった。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、聖なる八段階の道とは何であろうか。

すなわちそれは、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディのことである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正見解とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、すなわちそれは、苦しみにおける精通・苦しみの生起における精通・苦しみの滅尽における精通・苦しみの滅尽に至る方法における精通のことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正見解というのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正思惟とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、すなわちそれは、解放の思惟・非邪悪心の思惟・非残酷の思惟のことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正思惟というのである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正語とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、すなわちそれは、虚言を断つこと・中傷を断つこと・悪口を断つこと・軽薄語を断つことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正語というのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正行為とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、すなわちそれは、殺生を断つこと・窃盗を断つこと・非神聖行を断つことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正行為というのである。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正生活とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで聖なる多学の弟子は、邪生活を捨断して、正生活によって日々を送る。向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正生活というのである。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正奮闘とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、まだ生起していない悪不善の法則が生起しないように、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

既に生起した悪不善の法則を捨断するために、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

まだ生起していない善の法則が生起するように、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

既に生起した善の法則を集中継続し、混乱することなく、さらに多く学び、充実し、修習し、完全にするために、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正奮闘というのである。

一〇　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正記憶修習とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、世界における渇望と激痛を除去しなさい。

感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、世界における渇望と激痛を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、世界における渇望と激痛を除去しなさい。

観念において観念を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、世界における渇望と激痛を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正記憶修習というのである。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正サマディとは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、諸々の愛欲を遠離し、不善の法則を遠離して、有熟考有吟味にして、遠離から生じる喜と楽とがある、第一静慮を具足してとどまる。

熟考と吟味を静止し、心の中を落ち着かせ、心が一点に集中し、無熟考無吟味にして、サマディから生じる喜と楽とがある、第二静慮を具足してとどまる。

喜から離愛著し、無頓着となってとどまり、記憶修習し正智して、身によって楽を覚え、諸々の聖人が『無頓着にして記憶修習がある楽の時を過ごす』と明かす、第三静慮を具足してとどまる。

楽を捨断し苦しみを捨断して、以前の幸福と激痛とを全滅したことから、不苦不楽にして、無頓着と記憶修習による清浄とがある、第四静慮を具足してとどまる。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正サマディというのである。」

（『道相応』八「分別」）

この仏典からもおわかりのように、この八正道は、反省の材料ではなく、実践の発展

段階なのである。

つまり、言葉から始まり、行為の統御、そして生活の統御、その生活から人間を超えるための奮闘努力、そして、神の世界あるいはニルヴァーナ（煩悩破壊界）を思念する、そして三昧（サマディ）に入るということなのである。

この詳細については、他の項で述べることにする。

だが、皆さんは、ここでも大川氏は八正道の順番を替えていることにお気付きだろうか。『真説・八正道』では、第六番目にきている正思が、この『釈迦の本心』では三番目となっているのである。そして、本当の仏典では二番目に位置しているのだ。この基本的であり重要な教えである八正道をコロコロと変えてしまうこと自体、信用がおけないのではないだろうか？

◉不幸の根源は魔境？――〈正見〉のデタラメ

八正道の最初には「正しく見る」ということを掲げてあります。この「正しく見る」という立場は、きわめて難しいところがあります。それは、私たちが「見る」ということを、能動的所作、あるい

は能動的行為として、ほとんど考えていないからであります。

私たちは見るということを、朝起きて眼を開けば、そこに姿が映じてくる、映ってくること、というふうにとらえているのです。そうして漫然と、網膜に映ってくる映像を追い続ける一日を過ごすのです。

そうして一日が終わったときには、いったい何がこの網膜に映っていたか、これすらも忘れ果てているのです。

そこでまず、そういう心の変革が必要となるわけであります。(1)

そこで真実の「正見」とは何であるかと言うと、実はこの「見る」という行為をもっと高めよ、ということであります。映像としてのみ見、映像としてのみ受け取るのではなくて、もっとその奥にあるものを見よ、神の動きを見よ、と言われているのです。「神の手がなした業を見よ。その業の結果を見よ。」ここまで言われているのであります。それを見抜くことができないものは、少なくとも神の子として地上に生きて「見た」とは言えない。それは目が開いていたというのみであって、見たとは言わないのであります。

これは英語で言うならば、seeとlookの違いに似ているかもしれません。正見の見はlookのほうです。seeのように漠然と目に映るというのではなく、これは意志を集めて見るということです。

意図的に、積極的に見なければならないのであります。②

不幸の根源は、理解のギャップではないでしょうか。自分自身の自己理解と、自分に対する他人の理解との懸隔、あるいは自分の他人に対する理解と、その人のその人自身についての解釈との違い、こうしたことから人間関係の不幸というものは生まれてきているように思えるのであります。

こう考えてみたときに、実はこれは大変なことだということがわかってくるのです。恐ろしくて目を開けていられない。そこまでの責任感が出てこなければならないのであります。自分の目に映じている人たちの姿は、これはほんとうに納得のいく姿なのか。自分はその人の印象というものを目を通して受けるが、それをそのままに受け取ってよいのか。その印象は確かか。

印象に基づく他人への評価、これはみな、その重大さを知ってか知らずか、必ずしているのであります。印象を通して人の評価をしているが、それははたして正しいのか、これが問われるのです。こう考えると、ひとを見るというひとつのことでさえ、大変なことになってきます。③

また、一日中いろいろな人を正しく見るということと同様に難しいのが、自分自身を正しく見るということです。これも反省においては欠くことのできない作業であります。④

そのほかに、「正しく見る」ということにおいては、他人と自分の見方だけでなく、まわりの世界をどう見るかということもひじょうにだいじであります。⑤

いまひとつ「見る」ということに関してだいじなことは、動物、植物など、人間以外の生物の見方です。これへの目をけっして忘れてはなりません。⑥。以上①～⑥まで、『真説・八正道』より）

この人の文章の特徴は、内容のないことをだらだらと書き連ねることである。したがって、こちらも論旨を抜き出すのに苦労したのだが、かろうじてこれらを抜き出してみた。

まず驚くことは、彼が「正見（しょうけん）」を文字どおり〝正しく目によって見る〟と受け取って話を展開している点である。

この「正しく見る」という立場は、きわめて難しいところがあります。それは、私たちが「見る」ということを、能動的所作、あるいは能動的行為として、ほとんど考えていないからであります。私たちは見るということを、朝起きて眼を開けば、そこに姿が映じてくる、映ってくること、というふうにとらえているのです。

という最初のくだりなど、一瞬わざと仏教をパロディー化して、大川氏自身面白ろおかしく楽しんでいるのではないか、と疑ってしまったほどである。

しかし、本人はどうも真面目に言っているようである。本格的に魔境に陥っているのだ。

さて、それはさておき、この誤った正見についての考え方を正しておかねばならない。また、『釈迦の本心』にも同じように誤った考え方が述べられているのでつけ加えておく。

さて、それでは「正しく見る」ということは、どういうことなのでしょうか。八正道の最初に据えられたこの項目を、深く考えてみたいと思います。

そうしてみると、結局、人間の悩みの大きな根源は、この「見る」という行為を中心に起きているようにも見えます。少なくとも目が見えないということは、それだけ罪を犯す機会が少ないとも言えましょう。「欲望」と言われるものは、たいてい目から入ってきます。目によって他人の姿を見、異性の姿を見、金銀財宝を見、また豪華な食事を見、目によって欲望というものが、次第次第に募ってくるようになります。したがって、私たちが大切にしなければならない考え方は、この目を通じて入ってくる情報を、いかにしてさばいていくか、いかにしてふるい分けしていくかということです。人間

の感情が波立つ原因は、ほとんど目を通して得られる情報です。
（『釈迦の本心』より）

正見とは、明らかに漢字で正見と書かれているので、大川氏が誤ったものだと考えられる。

実は、正見とは、〝正しく見る〟ではなくて、〝正しい見解〟のことである。

この正見のもとの言葉 sammādiṭṭhi は、sammā + diṭṭhi からなり、sammā は「正しく」という意味である。問題は、diṭṭhi であるが、確かに diṭṭhi には「見解」という意味とともに、「見ること」という意味もある。しかし、

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正見解とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、すなわちそれは、苦しみにおける精通・苦しみの生起における精通・苦しみの滅尽における精通・苦しみの滅尽に至る方法における精通のことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正見解というのである。

という仏典の意味からいって、「見解」とするのが妥当なのである。

つまり、諸現象は無常である、よってそれは苦なのだという煩悩破壊の見解、四つの絶対的真理に基づいた見解のことなのである。ゆえにこれは、如来（真理勝者）の教えをできるだけたくさん記憶することと言い換えることもできる。

大川氏は、八正道の最も大切な部分は「正思」だといっているが、それは正しくない。正しくいうならば、最も大切なもの、土台となるものは、この正見なのである。

そして、正見に基づいてしっかりと考え思索する、これが第二番目の正思（正思惟）なのである。

ところが、彼は第二番目に「正語」を置いている。だが、正思、つまり正しい思索がなされないのに正語の実践がなされようはずがないではないか。なぜなら、心の中に正しく培われたものこそが言葉として表現されるのだから。

八正道の順番も間違っているし、彼の解釈も間違っている。これは彼自らが仏陀でないということを告白しているようなものである。

◉仏教的宇宙観と相容れない――〈正思〉のデタラメ

初めに大川隆法氏のいう「正思」を引用しよう。

「正思」の部分は、何回転生しても、そう簡単には卒業できない部分であります。私がしばしば言う「正しき心の探究」というものも、このあたりに照準があることもおわかりになると思いますが、修行として容易には終わらないところであります。

まず、正思の根本はどこにあるのか、それは神の心です。正しき心ということを、私たちはいくら考えても、追いかけてもなかなかわからないというのが現実であろうかと思います。というのは、正しき心の根本は、人間に求めるべきではないからであります。それは神に求めるべきことなのです。この尺度こそ、神に求める以外に、求めるところがないのです。もし、神のお心が違ったところにあるとしたら、私たちの考え方、行動のパターンも違ったものになるはずであります。私たちが、北極星に向かうがごとく、一定の方向に向かうことを義務づけられている理由は、この正しい思いというものが神の側から規定されているからと考えていいのであります。

では、この正しき思いという神の側の規定は、いったいどこに求めていけばよいのだろうか、ということを考えてみたいと思います。

八正道について、今までは、人間のほうから出発して述べてきましたが、今度は逆に考えてみたいと思います。

次のページの図に示すように、九次元という世界があり、それから、その下に八次元、七次元……とあるのは既刊の書籍で述べたとおりです。

そして、九次元に、数えるとしたら十の意識があるということをも述べてあるはずです。そして、この十の意識のうち、上段階霊とそうでないものとに分かれています。この上段階霊になっている意識の最右翼にいるのが、カンターレです。そして、この横にいるのが、アガシャーです。その次くらいにいるのがランティです。そして、その横にいるのが、いま孔子と呼ばれている意識です。それから次がモーゼ。以上が九次元の上段階霊です。この下に、マヌ、ゾロアスター、ニュートンなどがいるのは、ご存じであると思います。

こうして地球系霊団の意思決定は、この五人の上段階霊会議で通常決められています。ただ、これもそれぞれに個性があることは事実です。そこで、多少の意見のちがいが出るはずで、しかも五人は同格でありますから、これを調整している意識が必ずいるはずなのです。そして、この五人の中で、座長に当たる部分はご存じのようにときどき変わっています。

（『真説・八正道』より）

うーん。一体何が言いたいんだろう。仏教的宇宙観と全く相容れない〝妄想〟を述べ続けているような感じだ。だいたい仏教的世界観を全く無視して八正道を語るというのもおかしなものである。

さて、こんな調子で書かれている『真説・八正道』の中からは、ポイントを抜き出しずらいので、正見と同じく、『釈迦の本心』からも引用しておこう。こちらの方は同様に大川隆法著となっているが、ゴースト・ライターが違うのか、『真説・八正道』に比べたら、読みやすくなっているのだ。内容については、もちろんどうしようもないものである。

さて、「正見」「正語」と続いてきましたが、さらに「正しい思い」というものを考えてみたいと思います。

「見る」という行為、「語る」という行為は、ある程度、万人がそれを自己分析することは可能ですが、「思い」となると、そうでもなくなります。自らが何を思っているかを、冷静に第三者の立場で分析できるという人は、そう多くはありません。実際問題として、この正思の部分が完成すれば、この反省の七割、あるいは八割近い部分はカバーされていくことになります。

「思い」とは何かと言うと、結局、一日中、自分の心のなか、あるいは頭のなかに流れている考え

です。それは結構とりとめもなく、方向もなく、行ったり来たりしている波のようなものであろうと思います。けれども、その人がいったいどういう人であるかは、その人の心に去来する思い、これを見ればわかるのです。どのような思いをその人が出しているか、それを点検すれば、その人がいかなる人であるか、これがだいたい検討がついていきます。すなわち、思いを純化し、高度化する以外に、人間として偉大となってゆく道はないのです。

（「釈迦の本心」より）

まず、正思とは、大川氏がいうような「正しい思い」ではなく、「正しい思索」「正思惟」なのだということをお断りしておかなくてはならない。もともとの言葉は、sammā - saṅkappa（＝sammā + saṅkappa）で、saṅkappa とは、「思惟、考えること、思考、思念」といったような意味で、先程も述べたように、正見にのっとり考えるということである。そして、この考えるということは、自分の日々行なっている言葉・心・行為について検討を加え、考えるということなのだ。そこで仏典では、

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正思惟とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、すなわちそれは、解放の思惟・非邪悪心（ひじゃあくしん）の思惟・非残酷の思惟のことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正思惟というのである。

となっているのである。

したがって、彼の言うような、自分の頭の中に流れている考えでは断じてない。反対に、正見を基に自己の心の中に流れているものを見つめ、正見に基づいて分析し、それを捨断していく方法なのである。

ここで一つ、断っておかなければならないことがある。大川氏はこの正思の実践こそが、八正道の七割八割であると言ってらっしゃる。

しかし、実際わたしたちは、身の行ない、口の行ない、そして心の行ないの三つのパートに分かれてカルマを積み続けている。よって、いくら正思ができたとしても、それが行動やあるいは言葉に表現されなければ、それは言葉によるカルマを積む、あるいは行為によるカルマを積むといったことを避けることはできない。つまり悪業は悪業として存在するのである。

◉定義も曖昧――〈正語〉のデタラメ

つぎに「正しく語る」ということを話してみたいと思います。これは正見と並んで、ともにひじょうに大切な修行の目標であります。しかし、この正語はかなり難しいことです。それは「真説・八正道」という言葉に接して今まで自己の心をチェックしてきた方すべてが、その難しさを感じておられるのではないでしょうか。…（略）…。

自分の語っていることが他人にどういう影響を与えているのか。そしてその言葉を出すことによって、自分自身がどう影響されているか。自分が出す言葉によって、自分がどう影響されているか。これがわからない人がほとんどです。九割以上の人がそうです。そして不幸をつくっているのは自分自身が出している言葉であることのほうが多いのです。

（「真説・八正道」より）

では次に、「正しく語る」とはどういうことでしょうか。

見ることによって心に毒をつくると言いましたが、「語る」ということを通しても毒を受け、毒を売り、毒を広げるということが多いのです。人びとの苦しみの大半は、言葉に起因しているとも言えましょう。他人から発せられた言葉、これが自分を不幸にすることもあれば、自分が発した言葉が他

人を不幸にしていくこともあります。このように、言葉というものは非常に人間の幸・不幸に関係のあるものなのです。この「言葉の調律」ができれば、ある意味では、この地上は理想社会となっていくことが可能なのです。

霊天上界において、高級霊界に近づくほど、この「言葉の調律」ということができるようになってきますし、神々の世界と言われるところにくれば、他人に対して悪しき言葉を吐く人は、まずいなくなります。批判めいたことを言うこともなきにしもあらずですが、それは、必ずその人をよくする、善導するために使われているのが原則であって、真底、他人を嫌と思い、嫌って発する言葉を出せるような人は、そうした高級霊界にはいないのです。…（略）…。

したがって、まず、言葉の調律が非常に大事な修行となっていきます。よい言葉を出す。正しい言葉を出す。神の心に適った言葉を出す。こうして言葉を直しているうちに、自然自然に言葉のもとの部分、すなわち思いの根源へと、その反省の作業が深く深く進んでいくこととなっていくのです。

（『釈迦の本心』より）

正語（しょうご）とは、先程述べた正見、正思を土台とし、妄語（もうご）（嘘）・綺語（きご）（不必要な言葉）・悪口（あっこう）・両舌（りょうぜつ）（人と人とを仲たがいさせるような言葉。中傷）を離れ、慈愛のこもった、あるい

は哀れみのこもった、四つの無量心（慈愛・聖哀れみ・称賛・聖無頓着）を背景とした言葉を話すということである。

不妄語・不綺語・不悪口・不両舌とは、仏教の戒めのうち、言葉に関する四つの戒めである。

しかるに、大川氏はその定義を曖昧にしたまま「正しく語る」ということが、いかに人間の幸・不幸に関係があるかということを語っている。実際は彼が言うような感覚的なことを通り越してカルマの法則にのっとってそれを考えるべきである。

よって、正思は要の一つであることは事実だが、また、正思よりも正見の方が重要であるということは、先に述べたとおりである。全体の七割八割を占めるということはあり得ない。

◉無智なるがゆえの解釈――〈正業〉のデタラメ

「正業」ということは、現代においてひじょうに難しい課題として我々に提示されている問題であります。というのも、現代の社会の複雑化、また産業の進展というものを目の当たりにして、私たちは今、「正しい仕事とは何か」という基準がわからなくなってきているからであります。

（『真説・八正道』より）

そこで、私なりの結論を記すとするならば、この職業における訓練・鍛錬・努力というものが、はたして魂に影響があるのかといえば、これは「大いにある」と言わざるをえないのです。

高級霊界の人たちを見ていても、魂的に進化している人ほど、この仕事ということに関しては幅広い活動が可能であります。実際は、ひじょうに広範な仕事をやっているのです。それはなぜかというと、魂修行に九次元まで行っても残るものとして「指導力」という面があるからです。魂の修行の目標として指導力という面が残っています。六次元以降はだんだんと指導者になっていく歴史で、指導力という魂修行の課題が残っています。この指導力を増していくためには、どうしても仕事というものができなければだめなのです。

高次元霊であっても、この意味において、指導力をつけるためには、やはり時おり地上に生まれて地上経験を身につけなければ指導力が低下していくのであります。それは、高次元の霊界にいると、地上の環境についての理解、社会についての理解が欠け始めること、また霊的世界の感覚と地上の感覚とに差があること、また、地上経験をした多数の霊人たちが実在界に還ってくるにあたって、彼らを指導するさいに困難を感じるからであります。

したがって高次元霊であっても、単に救世のためだけに生まれ変わっているかといえばそうでは

なく、仕事能力をつける意味でも出ていることがあるのです。仕事能力をつけることによって、実在界に還ってもさらに大きな仕事ができるのです。これは魂にとって、ひじょうに貴重な体験であると言ってよいでしょう。

（『真説・八正道』より）

さて、本節では「正しい生業の立て方」、すなわち「正しい仕事のあり方」とは何か、それを語ってみたいと思います。…（略）…。

ですから、「正業」の観点としては、その人の本当の実力、それが生かせるような仕事であること、それがまた自分の目的と反しないこと。こうしたことがまず第一に大事です。

第二には、その仕事の遂行において、他の人びととの調和、これを保つことができ、そして幸せの輪が広がっていくということが何にも増して大事であろうと思います。

（『釈迦の本心』より）

これは完全に過ちである。彼は正業（しょうごう）を正しい仕事などといっている。

確かに漢語の「業」イコール「仕事」という言葉が漢和辞典には出てくる。しかし、

これは彼が無智なるがゆえにこういう解釈をしているのであって、正しくは〝正しい行為〟を指す。

もともとの言葉は、sammakammanata（＝ samma ＋ kammanta ）で、確かにkammantaには「仕事」という意味もある。しかし、

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正行為とは何であろうか。
向煩悩滅尽多学男たちよ、すなわちそれは、殺生を断つこと・窃盗を断つこと・非神聖行を断つことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正行為というのである。

という仏典を見てもわかるとおり、「仕事」では意味が通じないのである。もともと「正業」と、「業」という訳語が当てられたのは、このkammantaがカルマ（業）の関連語であったためであろう。

釈迦牟尼は、この正しい行為として、不殺生（ふせっしょう）・不偸盗（ふちゅうとう）・不邪淫（ふじゃいん）の三つを挙げていらっしゃる。つまり、生き物に対して慈愛の心を持ち、不殺生・不偸盗・不邪淫の実践をしなさいといってらっしゃるのである。

◉ムード解釈の落とし穴――〈正命〉のデタラメ

「正しく生活をする」ということに関して述べてみたいと思います。

正業と正命の違い、これは職業と生活との違いというふうに考えればそれまでですが、正命のなかにはもっと違った意味合いがあります。現代的に言い換えるとするならば、この正命というのは時間の生かし方と考えてよいと思います。

（『真説・八正道』より）

結局、「正命」とはこういうことなのです。その日で人生が終わると考えて、さて、それなら自分は今日一日をどう生きたか、こうした観点から見たときに、反省すべき点が出るはずです。もし今日で命が終わるならば、おそらく自分はこのように生きたであろう。その観点からみれば、あちらにもこちらにも、さまざまな可能性があったのに、その可能性を捨てて生きていた自分であったことを知らされるわけです。

要はこの一点です。一日を一生と思い、そしてその一日で死んでしまうと思ったときに、果たして悔いのない一日であったか、こういう観点から一日の出来事を、自分のなしたことを判断していくということです。それによって初めて、「正しく生活をしている」と言うことができるのです。

（『釈迦の本心』より）

この正命（正生活）は、出家修行者、出家修行者も小乗の修行者や大乗の修行者、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナの修行者によって形が違う。そして、在家の場合は、また在家の場合で形が違うわけである。

出家修行者について、ここでわたしが法を説くと、また大川隆法氏がまねしかねないのでここでは隠すとして、在家の部分だけここでは説くことにしよう。また、幸福の科学には出家制度というものが存在していないし、ここで説く必要もない。

それでは在家の正生活とは何だろうか。

在家の正生活には七法がある。この七つの法を『南伝大蔵経』によって検討してみよう。

一　サーヴァッティー。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、有能神の王は、前世において人間であったとき、七つの宗教的義務の手段を完全に記憶実践していた。それらの記憶実践から、有能神は有能神の位を獲得したのである。

三　それでは、七つの宗教的義務の手段とは何であろうか。

四　一生涯、父母を養わなければならない。
一生涯、一族の徳の高い者に敬意を払わなければならない。
一生涯、穏やかな言葉を語らなければならない。
一生涯、中傷をなしてはならない。
一生涯、物惜しみの垢を消滅した心で家で生活し、物惜しみをせず、手によって布施し、安楽に楽しみ、施しを求められたら喜んで応じ、布施を分配することを楽しまなければならない。
一生涯、真理を語らなければならない。
一生涯、怒ってはならない。もし怒りが生じたならば、速やかに抑えなければならない。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、有能神の王は、前世において人間であったとき、これら七つの宗教的義務の手段を完全に記憶実践していた。それらの記憶実践から、有能神は有能神の位を獲得したのである。

六　父母を養う人は、
一族の徳の高い者に敬意を払い、
穏やかで優しい会話をし、

中傷を捨断し、
物惜しみの除去に専念し、
真理を語り、怒りに打ち勝った人、
その人を三十三愛欲神天（あいよくしんてん）は、
まさしく善き人という。」
（『有能神相応』一一「愛欲神、あるいは宗教的義務の手段」）

この七つを実践することこそが、在家の正生活なのである。大川隆法氏はかなり曖昧に、ムードに頼って正しい生活を説いているが、釈迦牟尼は具体的にその道を説き示しているのである。

◉全く具体性なし――〈正進〉のデタラメ

この「正進」は「正道に精進する」という内容です。仏教のなかではこの正しく道に精進するということをひじょうに重視しています。前章の「正思」においても、自助努力の姿勢ということを述べておきました。重なるところもあるかと思いますが、「正思」のほうでの自助努力は一般的な面です

が、この正進のほうはもう少し具体的、個別的になっていきます。真に悟りを求めている者たちにとって、必須の心がけとは何かということが要求されてくるわけです。

（『真説・八正道』より）

私たちのこの正精進とは、けっして千日回峰のように、山のなかを歩いたり、滝に打たれたりするようなことでもなければ、神理の知識をたくさん詰め込んで、それを競うようなものでもありません。これらはあくまでも材料であって、神理を学ぶことによって実生活にその光が出なければまったく意味がないのです。そういう意味での正進であります。

ですから、――学んだ神理を、学んだ知識を実生活で示せ。その悟りが本物であるならば実践せよ。実践されているかどうかは、まわりを見ればわかるはずだ。他の人の自分への接し方を見ればわかるはずだ。そして、それが退化することなく、あるいはいっそうすばらしいものとなっているかどうか自己確認する姿勢を持ちなさい。――そういうことを言っておきたいのです。

「正進」は決して神理浸けの特殊な人間をつくるためにあるのではないのです。むしろ、神理に触れることによって、心がくらりと一転し、心を開き、自己改革に取り組み、自分の欠点を修正し、そしていっそうすばらしい、今までになかったような、完成度の高い人間になっていただきたいのです。そして、その途中において、悟りの維持ということはどれほど困難かということをけっして忘れない

でいただきたいのです。

入り口に立っているだけで、悟ったつもりになってはなりません。悟りはこれからが本番だということをけっして忘れないでいただきたいと思います。

（『真説・八正道』より）

この正進（しょうじん）の説明は、これまでの内容に比べたら非常にまともである。だが、これも具体的な内容が述べられていないし、幸福の科学のように、法（ダルマ）をねじ曲げて学んでいるならば、いくら精進しても精進にはならないという点に注意しなくてはならない。

正進（正奮闘）とは、今までなしたものを、より一層奮闘努力すること。怠惰になりがちな心を絶えず引き締め、善に向かって、徳に向かって、あるいは寂止（じゃくし）に向かって、法の修行に向かって奮闘すること。そして、一日の生活の全部を最終的には仏道修行に向けるということである。二十四時間を真理に即して生きるように努力するわけである。しかも、その二十四時間の努力がより密度を濃くしていく。これが正進（正奮闘）なのである。

冒頭に掲げた『南伝大蔵経』では次のように説かれている。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正奮闘とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、まだ生起していない悪不善の法則が生起しないように、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

既に生起した悪不善の法則を捨断するために、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

まだ生起していない善の法則が生起するように、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

既に生起した善の法則を集中継続し、混乱することなく、さらに多く学び、充実し、修習し、完全にするために、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正奮闘というのである。

なお、大川隆法氏は、この項で悟りについて触れている。

可能性としては、すべての人に開けている、そして、瞬間的にはある程度のところまで達することも可能とされている、しかし、維持することが難しいもの、これが悟りです。

と。しかし、実際は、一度悟ったものは崩れないのである。それを知らない彼には悟りの経験がないことは確かである。

◉完全なる勘違い――〈正念〉のデタラメ

さて、ではこの「正しく念う」とは何か。自らの想念のコントロールのしかたとして、「正思」というのが一日のうちに去来する思い、これの総量、集大成したものと考えるならば、この「正念」というのは、未来の計画、人生計画、将来の自分のあり方へのヴィジョンの投影、そうしたことになります。正しい目標設定ができているかということにもなりましょうか。あるいは、正しき自己像として、何を描いているかということにもなりましょうか。これはある意味において、あなたの人生計画、自己実現計画はどの辺にあるのか。あなたがいつも心に念じていることはいったい何なのか。そうしたことを問うわけです。…（略）…。

この「念」というものは、精神統一をすればするほど強くなってくるために、ますますそのコント

ロールということが重要になってきます。しかし、念いということを考えたこともない人、心の力の神秘力を知らない人にとっては、この「正念」というのは、遥かに遠いところにある存在となっていくでしょう。この点、さらに高度に発展した反省方法であるということを知っていただきたいと思います。

（『釈迦の本心』より）

この正念（しょうねん）でも大川氏は完全に勘違いをしている。漢訳で「念」という言葉が用いられているために、念ずることだと思い込み、

つまり、この目的性をもった念いのコントロール、これを反省の徳目として挙げたのが、この「正念」なわけなのです。

とか、

この「念」というものは、精神統一をすればするほど強くなってくるために

などといっているのである。

しかし、この正念（sammāsati ＝ sammā ＋ sati、sati は「記憶、想起、回想、記憶作用、記憶力」）の正しい訳語は正記憶修習なのである。そして、それは、正見解に基づいた、正思惟に基づいた、四念処に基づいた真理のデータをひたすら繰り返し記憶する作業を指すのである。例えば、一つの経典を何度も何度も読んだり、あるいは、一つのマントラを何度も何度も繰り返し唱えることである。

◉レベルが低い大川流〝サマディ〟――〈正定〉のデタラメ

なぜ、この正しく定に入るという項目があるのかということですが、これは結局これもひとつの幸福のための技法であるということなのです。

人間を不幸にする原因の一つは、心が波立つことです。心の安定ということは思いのほかだいじなことなのです。心が波立っていて、あるいは渦をつくっていて、幸福な人というのはいません。

…（略）…。

人間の心というのは、ある意味で、ふりこのようなものです。そして心が乱れているというのは、ふりこのように、揺れて動いているということです。これをメトロノームのようにゆっくりと上のほ

うを動くようにしてやる必要があるのです。

（『真説・八正道』より）

そこで、幸福の科学としての「正定」の具体的方法ですが、まず心の波長をととのえる必要があるので、深い深呼吸をし、そのあとで、できれば『正心法語』の朗読をしてほしいと思います。これは一〇分ぐらいあれば十分でしょう。そして、反省をするのならばこのあと、反省に入っていきます。本書で具体的に述べた、八正道の八つの項目についての反省に入っていくのです。…（略）…。

『正心法語』から精神統一に入るという話に補足いたしますと、ひじょうに体調の悪い方、明らかに霊障になっていると思われる方、妄想が湧いて湧いて霊が働きかけてしようがないようなタイプの方、こうした方にとってはこの方法は少し危険です。このタイプの方に勧められるのは、精神統一ではなくて、むしろテープを聴いたり、あるいは神理の本を読むような仕事です。こうしたことのほうに力をさいていただいて、もうすこし、状態がよくなってから精神統一をしていただきたいと思います。

あまり、霊現象が多く起きてきはじめた場合には、精神統一はちょっとストップしてください。霊現象を喜んでいたりするのは間違いです。自分の心の状況を見て、そんなにいい状況でもないのに霊現象が起きてきたときは、少しストップしたほうがいいと思います。勇気を持ってストップさせてく

ださい。

（『真説・八正道』より）

すなわち、正定の最終の目的は、結局のところ、内部にある自己の拡大ということになります。肉体の内に止まっている小さな自分ではなくて、それを宇宙大に広げてみる。これが「宇宙即我」という考えです。こうした自己の拡大ということが一面にあります。そして正定のもうひとつの目的として、自己の内部を掘り下げていくことが挙げられます。どこまでも深く掘り下げていく。それによって、内なる守護霊、指導霊たちと交渉することができる。交流していくことができる。そうした境地に達するということです。…（略）…。

これゆえに、正定に基づく反省の観点というのは、結局、どれほど宇宙的自己、宇宙の一員としての自己、神の創られた世界の一部としての自己を認識し得たか、という反省となるのです。そこまで至って初めて、われらがこの修行も完成に至ると言えましょう。

かくのごとく、「正見」「正語」「正思」「正業」「正命」「正進」「正念」「正定」、このすべてが完成されたときに、少なくとも阿羅漢の境地に達することができ、さらに次なる行動の段階において、菩薩へと進化してゆくことが可能となるのです。そうしたひとつの修行の方法として、また希望の原理として、進化の原則として「八正道」があるということを、知っていただきたいと思います。

大川氏は、魔境っぽい内容の精神統一程度のものをここで説いているので話にならない。ズバリ仏教における正定をここで説こう。

どうも漢訳において「定」という言葉と、「三昧」という言葉の使い分けが正しくなされなかったように思う。正定（sammāsamādhi ＝ sammā ＋ samādhi）は正しくは三昧（サマディ）というべきである。つまり、正サマディに入るということだ。

正サマディに入り、四つのサマディを経験し、六神通を体得し、正離解脱するわけである。これが正しい八正道の考え方なのである。

四つのサマディとは、次の四つのステージである。

一、第一静慮＝有熟考にして有吟味。ここでは遠離・離貪から来る喜と楽を経験する。

二、第二静慮＝無熟考にして無吟味。ここではサマディから来る喜と楽を経験する。

三、第三静慮＝サマディから来る楽を経験する。

四、サマディから来る寂静に至る。

そして、六神通とは、

・神足通（空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりすることのできる能力）
・天耳通（神々の声を聞いたり、遠くの音を聞いたりする能力）
・他心通（他人の心を知る能力）
・宿命通（前生を知る能力）
・天眼通（一般に遠隔透視能力といわれているが、これは北伝系仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智のこと。死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力）
・漏尽通（完全なる絶対なる神の叡智）

という六つの神通力なのだ。これを体得し、正離解脱へと至ることができるのである。これほど、八正道はわたしたちに素晴らしい内的体験や神通力、さらには正離解脱という至高の境地をもたらしてくれる実践的方法なのだ。断じて大川隆法氏がいわれているような、反省法などではない。

仏教の基本的な修行方法についてこんなにもでたらめな解釈をし説いているのだから、キリスト教、空海、日蓮、ノストラダムスなどに関する内容もこの程度のものだろう。

2　六波羅蜜のウソ

◉前代未聞の逆説〝大川流六波羅蜜〟

次に、大乗仏教の基本的な修行体系である「六波羅蜜（ろっぱらみつ）」について、大川隆法氏が説いているので、取り上げてみたい。

さて、「六波羅蜜多」の最初に出てくる考え方に、「布施波羅蜜多」という考え方があります。これは別名、「施しの完成」とも呼ばれています。

釈迦思想のなかでは、「施し」というものを、非常に重要視している点があります。この「施し」という考えは、いかにも仏教的な響きを有しておりますが、その根本は、「愛」の思想と言ってよいと思います。キリスト教における「愛」の思想が、この「布施」の考え方、「施す」という考え方のなかに流れているのです。

したがって、「六波羅蜜多」の思想の筆頭に、「布施波羅蜜多」を持ってきたということは、いかに釈迦が「愛」ということを重視していたかということを、示すための証左となるでしょう。

この「波羅蜜多」という言葉について、いま一度、説明を加えておくとするならば、「波羅」という言葉は、これは「パーラ」とインド語では言って、「内在する」という意味です。「心の奥底の」、という意味です。「蜜」というのは、これは蜂蜜の蜜ですが、「非常に価値あるもの」、「値打ちあるもの」という意味です。「多」は、それが多いという様、こんこんと湧いてくる様を言います。すなわち、心の井戸を深く掘ったら、こんこんと湧いてくる叡知、そういう意味で「波羅蜜多」という言葉を使っているのです。

したがって、「布施波羅蜜多」というのは、布施という修行を通して、こんこんと湧いてくる叡知、これを味わうということ、これを身に付けるということ、こうした修行方法なのです。

（『釈迦の本心』より）

まず、「波羅蜜多」は正しくなく、パーラミター（pāramitā）である。このパーラミターはパーリ語で、「徹底」あるいは「極限」、「限界」という意味である。つまり、布施の限界、持戒の限界、あるいは布施の徹底、持戒の徹底、忍辱の徹底、精進の徹底、そして禅定の徹底、智慧の徹底、これが六パーラミターの正しい意味合いである。

彼がこの「蜜が多い」という理解をしたのは、漢字の意味からその意味をとろうとし

たがための過ちであろう。しかし、ここは理解しておかなければならないことだが、インドから中国へ伝わった段階で、そのインドの音、パーリ語の音を漢語でいかに表わすかということを、例えば玄奘三蔵や鳩摩羅什は苦心したようである。

日本に伝わった意味を伴わないこの音写の漢字に対して、これだけはっきりといい加減な訳語をふったのは大川隆法氏が初めてではないだろうか。

また、彼は布施の根本は「愛」の思想であると言っているし、次の持戒の部分で再び布施に触れて、

> 実は、「布施波羅蜜多」の思想、「布施」の思想が、天上界に在るイエス・キリストの前身の生命体からの通信として、与えられた教え

として、キリスト教的「愛」を強調しているが、こんなばかげた話はない。

布施には、功徳を積むとともに、自らの貪りのカルマを切る働きがあるがゆえに、解脱のための修行の土台として六波羅蜜の第一に来ているのである。もし、真理の修行者であったなら、わたしの言っていることが実体験として理解できるはずだ。

なお、布施をする対象のステージが高ければ高いほど、布施によってエネルギー交換が起き、その人に自分のカルマを背負ってもらうことになる。

◉十戒の対比からもわかる〝強引なこじつけ〟

この「持戒波羅蜜多」の思想のなかには、主として五つの持戒が与えられています。まず「不殺生」、次に「不偸盗」、さらに「不邪淫」、さらに「不妄語」、最後には「不飲酒」、この五つです。これは他の言葉でわかりやすく言い換えるならば、「汝、殺すなかれ」、「汝、盗むなかれ」、「汝、みだりに姦淫するなかれ」、「汝、みだりに証を立てるなかれ」、「汝、酒に溺れることなかれ、誘惑に溺れることなかれ」という言葉でも言えるでしょう。

このように翻訳してみると、これはいわゆる「モーゼの十戒」に非常に似ていることに気がつかれる方も多いでしょう。実は、「布施波羅蜜多」の思想、「布施」の思想が、天上界に在るイエス・キリストの前身の生命体からの通信として、与えられた教えであるのに対し、この「持戒波羅蜜多」の思想は、実は今から三千年余りの昔、出エジプトを行なったモーゼが、実は天上界から釈迦を指導していて、こうした戒めというものを与えたのです。

（『釈迦の本心』より）

また大川氏が魔境っぽいことを言っているが、実際にモーゼの十戒と仏教の十戒を対比してみていただきたい。一致するのはわずかに三つである。これが非常に似ているなどとは、モーゼを釈迦牟尼の指導霊にしたいがためのこじつけにすぎない。

一応参考までに、モーゼの十戒と仏教の十戒を以下に掲げておく。

モーゼの十戒

・あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。
・あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。
・あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。
・安息日を覚えて、これを聖とせよ。
・あなたの父と母を敬え。
・あなたは殺してはならない。
・あなたは姦淫(かんいん)してはならない。
・あなたは盗んではならない。
・あなたは隣人について、偽証してはならない。

・あなたは隣人の家に貪ってはならない。

仏教の十戒

・不殺生（殺生をしてはならない）
・不偸盗（盗んではならない）
・不邪淫（邪淫をしてはならない）
・不妄語（ウソをついてはならない）
・不綺語（必要のない言葉をしゃべってはならない）
・不悪口（悪口を言ってはならない）
・不両舌（人と人とを仲たがいさせるような言葉をしゃべってはならない）
・不慳貪（貪ってはならない）
・不瞋恚（憎しみから怒りを発してはならない）
・不邪見（真理を否定してはならない）

◉仏教的見地と真っ向から対立

また「不偸盗」、盗みということは、これはいけないことなのだということを教えました。盗みということは、非常に簡単に他人の物を略奪することです。それは自分にとっては非常に利益となることではあるけれども、その反面、他の人びとの心を害し、不安に陥れ、また社会の規律を乱していきます。したがって、盗むなかれという教えがどうしても必要であった。

（『釈迦の本心』より）

この持戒における不偸盗の意味合い、彼はカルマの法則、あるいはカルマにおけるエネルギーの交換等が全く見えてないし、実際に感じてないようである。もともと偸盗は他を害する、だからいけないではなく、自分自身の貪りの心、これを増大させる、だからいけないのである。

この仏教的見地は、大川氏の「それ（盗み）とは自分にとって非常に利益となることではあるけれども」という言葉と真っ向から対立するものである。

そして彼の最も大きな間違いは、彼が釈迦時代の戒律といっているものが、これはあくまでも在家の戒律だということである。出家修行者の戒律ではない。出家修行者は三

百にも上る戒律を遵守していたのである。当然、酒を飲むなどはもってのほかであった。なぜならば、もともと高い世界へ至る、あるいは解脱するためには精神集中、精神集中からの拡大、そして合一、解脱というプロセスをたどるのである。よって、彼は比丘や比丘尼の制度について全く無智ということになる。

◉出家修行者の戒を知らない〝大川流〟

さて、「尸提波羅蜜多」について説明をしていきたいと思います。これは別名「耐え忍びの完成」とも言われています。「布施」、「持戒」ときて、次に「耐え忍びの徳」が説かれているわけです。

やはり、釈迦の人生というものを振り返ってみたときに、ひとつの特徴がここにあるように感じられるわけです。やはり、長年月をかけて、自らの心を開拓し、魂を向上させていくためには、どうしても「耐え忍び」ということが大事です。それゆえに、ここにも修行者の大切な徳目として、この「尸提波羅蜜多」ということが与えられているのです。

（『釈迦の本心』より）

まずここで検討しなければならないのは、三番目の忍辱である。しかしこの、もとも

と六つの極限である六波羅蜜、これは北伝系の修行なのである。南伝系は十のパーラミターを提唱している。そして、この十のパーラミターにしろ六つのパーラミターにしろ、これは在家の修行なのである。出家修行者の修行ではない。ここはあらためて断っておく必要がある。

そして、この忍辱の中で早く悟りたい等々、大川氏が出しているが、これは実際先程も述べたとおり、出家修行者の修行ではなく在家修行者の修行であるから、早く悟りたいということは存在しないのである。

例えば一つ例を挙げよう。釈迦牟尼は前生において忍辱の修行をなさっていたが、その忍辱の経典を出すことによって、皆さんに忍辱の本当の意味合いというものを理解していただくことにしよう。

これは、尊師がジェータ林にとどまっておられたときに、ある怒りやすい者について講演なさったものです。物語は以前に講演されたものです。

そこで、尊師はその向煩悩滅尽多学男に、

「なぜお前は、怒りのない覚者の救済計画において出家しながら怒るんだ。いにしえの賢者たちは、

肉体を千回殴られ、手や足や耳や鼻が切られても、他の人に怒ることはなかったのである。」

このように演説し、物語をお話しになったのです。

その昔、バーラーナシー（剣の城塞）で、カラーブという名前のカーシ（太陽）国の王が君臨していました。そのとき、到達真智運命魂は八億の財産のある祭司の家に生まれました。

彼はクンダカ・クマーラという名前の青年だったのですが、成年に達すると、タッカシラー（宝石のような見解の都市）であらゆる学識を獲得して、家屋敷を構えました。そして、父母がこの世を去った後、財産の山を見てこう思ったのです。

「この財産を生み出して、わたしの親族はそれを持たずに死んでしまった。しかし、わたしはこれを持っていかなければならない。」

そこで、そのすべての財産を検討し、布施を受けるにふさわしい者にふさわしい物を施し、雪山に入って出家しました。そして、野生の実によって暮らし、久しく住んだ後、塩と酢を使用するために、人間の根城に行き、やがてバーラーナシーに到着すると、王の庭園にとどまったのです。

その翌日、街に托鉢に行き、軍師の家のドアのところにやってきました。軍師は、彼の徳のある態度に浄信を持ち、家に入れ、自分のために用意してあった食事をもてなし、公言をもって国王の庭園に住まわせたのです。

さてある日のこと、カラーブ国王は、酔っぱらって大浮かれの状態で踊り子に囲まれて、得意の絶頂で庭園に行きました。そして、ちょうどよい石の平板の上に寝床を敷かせ、一人の気に入った女性のひざに横たわったのです。

そのとき、歌や音楽や舞踏に巧みな踊り子たちは、歌などを歌って、神々の王である有能神のように大いに華やいでいました。そして、国王は眠り込んだのです。そこで、その女性たちはこう思いました。

「彼のために、わたしたちは歌などを歌っていたのに、彼は眠ってしまった。わたしたちは歌っても仕方ないわ」と。

そして、リュートなどの楽器を至る所に捨てて、庭園へと立ち去り、花や実や新芽などを求めながら、庭園で楽しむのでした。

そのとき、到達真智遍命魂は、その庭園の満開のサーラ樹の根元で、出家の楽を味わいながら、最も元気な象のように座っていました。そして、散歩していたその女性たちは、彼を見て言いました。

「皆さん、いらっしゃいな。この樹下に出家された方が座っていらっしゃいます。国王が目を覚ますまで、彼のもとで何か聞きながら座っていましょう。」

そこで、近付くと敬礼して、周りを囲んで座りました。

「わたしたちに話すのにふさわしいことを、何かお話しください。」

到達真智運命魂は、彼女たちに法則を話したのです。

さて、かの女性が膝を動かしたので、国王を目を覚ましてしまいました。国王が目を覚ますと、彼女たちが見当たらないので、こう言いました。

「女たちはどこに行ったんだ。」

「大王様、彼女たちは出ていって、ある苦行者を囲んで座っています。」

国王は怒って、刀を取り、

「あのインチキ行者に教えてやろう。」

と、急いで行きました。

そのとき、その女性たちは国王が怒ってやってくるのを見ました。そこで、その中の最も愛されている者たちは行って、国王の手から剣を取り、国王をなだめたのです。彼はやってくると、到達真智運命魂の前に立って尋ねました。

「お前はどういう教義を持っているんだ、出家修行者よ。」

「忍辱の教義を持っています、大王よ。」

「その忍辱とは一体何だ。」

「罵倒されても、殴られても、中傷されても怒らないことです。」

「じゃあ、それを確かめてやろう。おまえに忍辱があるのかをな。」

国王は死刑執行人を呼びにやりました。

彼は自分がいつもやっているように、首切り斧とイバラの鞭を持ち、赤っぽい黄色の衣を着、赤い花飾りを身に付けてやってきました。そして、国王に敬礼して言いました。

「どういたしましょうか。」

「この無法者である邪悪な苦行者を捕らえて、地べたに引きずり倒し、イバラの鞭で、前後左右合わせて四方から、二千回彼を殴れ。」

彼はそのように行ないました。到達真智遮命魂の表皮は切られ、真皮は切られ、肉は切られ、血が流れました。

再び、国王は言いました。

「お前はどういう教養を持っているんだ、乞食よ。」

「忍辱の教養を持っています、大王よ。あなたはわたしの皮の中に忍辱があるとお考えでしょうが、わたしの皮の中に忍辱はありません。心の内側にわたしの忍辱は確立されているのですが、あなたは見ることができないでしょう、大王よ。」

再び、死刑執行人は尋ねました。

「どういたしましょうか。」

「このインチキ行者の両手を切れ。」

彼は首切り斧を取って、死刑執行の作業台に置き、手を切りました。

さらに、彼に言いました。

「足を切れ。」

そこで、足を切りました。手足の先からは、壺の割れ目から紅色の汁が流れるように、血が流れました。

再び、国王は尋ねました。

「どういう教義を持っているんだ。」

「忍辱の教義を持っています、大王よ。あなたはわたしの手足の先に忍辱があるとお考えでしょうが、それはここにはありません。なぜなら、わたしの忍辱は深い場所に確立されているからです。」

彼は言いました。

「彼の耳と鼻を切れ。」

死刑執行人は耳と鼻を切りました。そこで、全身血まみれになりました。

再び、彼は尋ねました。

「どういう教義を持っているんだ、お前は。」

「大王よ、忍辱の教義を持っています。しかし、あなたは耳や鼻の先に忍辱というものが確立されているとお考えになってはいけません。わたしの忍辱は、深い心の内側に確立されているのです。」

「インチキ行者め。お前はお前の忍辱を支えて座ってみろ。」

と、国王は到達真智運命魂の心臓を足で蹴って、立ち去ったのです。

彼が立ち去ると、軍師は到達真智運命魂の体から血をぬぐい取って、手や足や耳や鼻の先を衣服の端に置き、到達真智運命魂をゆっくりと座らせて敬礼し、そばに座って懇願しました。

「尊師よ、もしあなたが怒りたいのでしたら、あなたにひどい行為をなした国王に対してだけ、お怒りになってください。他の者に対しては、お怒りになりませんように。」

そして、第一の詩句を唱えたのです。

一　あなたの手と足と、
　耳や鼻を切った者に、
　お怒りください、偉大なる勇者よ。
　この国を滅ぼさないでください。

それを聞くと、到達真智運命魂は第二の詩句を唱えました。

二　わたしの手と足と耳や鼻を切った、

かの国王が長生きしますように。
なぜなら、わたしのような者は、
怒るということがないからです。

国王が庭園から出て、到達真智運命魂の視界を離れたとき、この二十四万ヨージャナの厚さの大地は、強く堅くなった布切れのように裂け、超期間地獄から炎が出てきて、一族から与えられた赤い毛織物にくるまれるように、国王を捕らえました。彼は庭園の門のところで地面に入り、超期間大地獄にとどまったのです。

到達真智運命魂は、その日のうちに命を終えました。そして、国王の家来や市民は、香料や花飾りやお香を手にやってきて、到達真智運命魂の遺骸を葬りました。

ところで、「その後、到達真智運命魂は雪山に行った」と言う人もいますが、それは真実ではありません。

三　昔、忍辱を明らかにした、
出家修行者がいた。
この忍辱による利益を、

カーシ国王は断ち切った。

四　彼の残忍な要素の蓄積の、
結果は苛酷であった。
カーシ国王はそのことを、
地獄に陥って理解した。

この二つは、現正覚者による詩句なのです。

尊師はこの教えをもたらした後、諸々の真理を説明し、輪廻転生談に当てはめられたのです。なお、真理を終えられたとき、怒りやすかった向煩悩滅尽多学男は不還の果報を確立し、多くの者が預流の果報などに達しました。

「そのときのカラーブというカーシ国の王はデーヴァダッタであり、軍師はサーリプッタであり、忍辱の教義を持つ苦行者は、このわたしなのである。」

（『忍辱の教義輪廻転生談』）

◉大川流　〝禅定波羅蜜多〟は空想家のたわごと!?

この「禅定波羅蜜多」というのは、八正道においては「正定」と重なるところでもあろうと思いますが、別名「精神統一の完成」とも呼ばれています。

では、八正道の正定とはどう違うかと言うと、八正道の正定は結局、自らが正しく定に入ったか、その定に入るときの精神状態のあり方、その思いのあり方というものを、作法として反省するというところに力点があったわけですが、この「禅定波羅蜜多」は、こうした精神統一を日々重ねていくという、この実践の徳目を指しているのです。

たとえば、日曜日なら日曜日、一か月に一回、自分にとって閑暇が訪れたときに、過去を振り返るということは、そう難しいことではないかも知れません。しかしながら、毎日々々を忙しく過ごしていながら、かつ、自らの心の内を日々振り返り、自らの行動を日々振り返るということは、そうそうたやすいことではないのです。これを積み重ねるということは、大変なことです。…(略)…。

そして、さらにこの「禅定波羅蜜多」の究極の姿としてあるものは、実は、特定の作法にのっとった禅定だけをするのではなく、作法にかかわらず、禅定の状態に入るということにあるのです。すなわち、人間として当然なすべき仕事、生活をしていながら、歩くなかにも、語るなかにも、仕事をするなかにも禅定がある姿、これが実は「禅定波羅蜜多」の完成の姿なのです。その二十四時間の、一

日のどの部分をとってみても、禅定の状態にある。心はすでに天上界に向いており、いつでも高級諸神霊と話ができるような、そうした禅定の状態とまったく同じ状態にある。これが実は、人間として目標とすべき修行の最高の段階であるのです。…（略）…。

こうした理想の状態、天上界にいるのとまったく同じ状態で、この三次元に生きている。三次元にいるのか、実在界にいるのか、まったくわからないような、この三次元即実在界、三次元即菩薩界、三次元即如来界という生活を実践できている人のことを、この「禅定波羅蜜多」の完成者と言うのです。ここまで至ることが、少なくとも修行者のひとつの目標であったと言えますし、釈迦教団のなかでも、最大の目的のひとつとされていたのです。

（『釈迦の本心』より）

この禅定（ぜんじょう）については、全くデタラメしか書かれていない。この禅定とは、本当は四禅（し）定を指す。四禅定とは何かというと、まず四念処により心を離貪させる。すべての煩悩から離れさせる。それによって、今まで培ってきた布施から精進までの徳を体にみなぎらせると。これが第一禅定である。そして第二禅定は、それを呼吸を止めた静止の状態、それによって経験する。第三禅定は、その行き渡った歓喜のエネルギーが体に満ち、心

も体も完全にリラックスした状態、呼吸が完全に止まった状態、これを指す。そして第四禅定は、完全に呼吸停止、そして心臓も停止に向かうと。この状態を指す。この四つのプロセス、これが禅定波羅蜜である。

よって、彼の説いている禅定波羅蜜は空想論であり、これは明らかに大川隆法氏独得の禅定波羅蜜といわざるを得ない。

◉笑止！　般若波羅蜜多の経験のない仏陀

六波羅蜜多の最後の徳目の一つとして、「般若波羅蜜多」というのがあります。般若心経などでも有名な「般若」という言葉ですが、これは「智慧」という意味です。その智慧も、単なる知識的な知恵ではなくて、深いところから出てくる叡知、この意味です。そしてこれは「般若の智慧」とも言いますが、こうした深いところから智慧があふれ出るさま、こんこんと湧き出てきて止まらないさま、これが本当の知者の姿でもあるわけです。

この般若の智慧を得た段階に至っては、この世的なる学問や、経験というものが、その持つ効力を、効能を、急速に失っていくのです。人格が完成し、ある程度の人物となり、偉人となっていくためには、数多くの読書、数多くの試練、経験を経ていくということが大事であって、そうした知識や経

験が、珠玉のごとく輝いているわけですが、そうした珠玉のごとき知識、経験も、この般若の智慧が出てき始めたときには、もはや影を失っていきます。影を潜めていきます。そして、光を失っていくように見えます。それほど、この般若の智慧というものは偉大なものです。

その偉大性の理由は、心の窓を開かねば、この般若の智慧に至ることはできないからです。八正道を中心にして、自らの心を正していく途中で、どこかで心の扉が開き、自らの守護霊、指導霊たちの声を聴けるようになっていきます。彼らと話ができるようになっていきます。この実在界にある守護霊、指導霊たちの叡知というものは、地上の人間が何万人集まったとしても、出すことができないほどの智慧を出す力があるのです。…(略)…。

今、高級霊たちがさまざまな霊示を私に送ってきていますが、こうして霊示を受けることによっていろんな本を作っていますが、それによってできた生産物は、地上にいるどんな人が考えつくこともできないほどの、質と量を含んでいると思います。これもまた、「般若波羅蜜多」の実践を行なっているということになりましょう。

この人間として最大の智慧を得るために、ここまで至るために、「努力」というものがあるということを知らねばなりません。それは結局、神理を知るということが自分を自由自在となし、大力量人へと変えていくということを意味しているのです。

(「釈迦の本心」より)

この般若波羅蜜多については笑い話である。彼は、般若波羅蜜多の経験をしていないということになる。

ここでは完全に空に没入する。空に没入するとは、空間に没入するということである。この空間に没入するというのは深遠な意味があり、言葉で表現することは難しい。自分自身が空間であると。そして、その外側に形状界、あるいは欲界が存在するということになる。そしてそのとき、すべてを知る智慧を得ることができるのである。これこそが般若波羅蜜多の極致なのである。つまり、このとき心の本質は独存位の状態に入り、そして非形状界の世界、形状界の世界、そして欲界の世界、これを同時に見通すことができるのである。

◉取り違いと視点のズレが招いた〝大川流〟の悲劇

以上で、六つの徳目についての思想的説明を終えたわけですが、この釈迦の六波羅蜜多の思想を現代にどのように生かすことができるか、こうした観点で最後にまとめてみたいと思います。八正道と重なる部分も多いために、私はこれを違った角度からまとめてみたいと考えます。

まず、「布施」という考え方、「布施波羅蜜多」に対しては、「愛の実践」という言葉で説明をしてお

きたいと思います。これを現代的には、「与える愛」という言葉で呼んでみたい、与える愛の実践ということで考えてみたいと思います。

「持戒波羅蜜多」については、すでにその意味合いは失われていると考えられます。けれども、この精神を現代に生かすとするならば、「ストイシズムの復権」ということであろうと思います。自らの生活をシンプル化し、シンプルななかに、平坦ななかに知的なものを、精神的なるものを求めていくという、そういったストイックな生き方、ストイシズムの生き方のなかに、この「持戒波羅蜜多」の生き方がありうると思います。…（略）…。

「忍提波羅蜜多（にんだいはらみた）」については、やはりこれは大事なことであって、現代的にも「耐え忍び」ということは大事だと思います。これは時間を待つ、時を待つという考え方、一定の時期まで自らの力を蓄えながら時を待つということ。悩みのときには、いたずらに右往左往するのではなくて、瓶のなかに一滴一滴の水を溜めていくように、自らの内に蓄えながら時節到来を待つという、そうした考え方として解釈していきたいと思います。

「精進波羅蜜多」については、これは努力ということですが、現代的には「神理の学習」ということに置き換えてみたいと思います。神理の学習の意味、神理の探究、学習ということの意味、そうしたものとしてとらえたいと思います。

「禅定波羅蜜多」については、これは現代的「真説・八正道の復活」、そういう考えをとってみたい

と思います。八正道というものを、今後さまざまな角度からわかりやすく説明していきたいと考えていますが、そうした内省的な時を持つ、沈黙の時間を持って、自らの内を見つめる。そうした時間を取れ。自らの内を振り返って反省せよ。それが大事である。これは、「幸福の科学」の説いている四正道のなかのひとつである「反省」として完成することになると思います。

最後の「般若波羅蜜多」、智慧の完成ということですが、これも四正道のなかの「知」に当たるわけですけれども、この霊的智慧、これの集大成、これをやってみたいと考えています。…（略）…。

すなわち、「与える愛」、「ストイックな生き方」、「耐え忍び」、また「学習の継続」、「内省的な時間を取る」ということ、こうしたことが霊道を開いた人間の生き方を守るという大切な役割を果たすのだと思います。

以上でもって、「六波羅蜜多」の現代的解釈としたいと思います。

（『釈迦の本心』より）

この六つのパーラミターに付いている現代的解釈については、コメントをするに値しない。なぜならば、もともとパーラミターは極限という意味があるにかかわらず、彼はまずパーラミターの意味をここで取り違えているわけだし、そして、現代人にできる形

に変えているというところは素晴らしいが、その一つ一つの視点がずれている。よって、この現代的な六つのパーラミターについての説明、これについてはコメントを差し控えることにする。

第二章　仏典を知らない仏陀の過ちを正す

1 凡人と変わらない〝悟り〟の中身

◉釈迦が容姿・味覚にとらわれていた?

悟りについて、大川隆法氏が語っているものは数多いようだ。その中からいくつかを取り上げて、その誤りを指摘してみることにしよう。

まずは、彼が『釈迦の本心』という著書の中で、釈迦牟尼の最終解脱・悟りについて書いている部分がある。釈迦牟尼が苦行を捨て、村の娘スジャーターから乳がゆの供養を受けるところである。

そのときにゴーダマが感じたことは、我が身とその村娘との対比でありました。その村娘は洞窟から出てきたゴーダマにとっては、まるで天使のようでした。その美しい目の輝き、その亜麻色の髪、また、生命力にあふれた身体。その全身からは村娘という身分に似つかわしくない、素晴らしい香りが漂っていました。それにひきくらべ、我が身は骨と皮ばかりの骸骨であり、目は落ち窪み、肋は浮き出し、誰が見ても、いつ死んでもおかしくないような肉体でした。もう三十五歳で人生を終えてし

まうのかというような、そうした姿であったのです。

村娘はチュダータとその名を名のりました。そのチュダータは、ゴーダマの姿を見ると橋を渡って駆け寄ってきて、そうして一椀のミルクがゆを差し出しました。そしてそのかゆを一口すすったときに、何とも言えない熱い涙が、ゴーダマの両頬を伝って流れ落ちていったのです。それは当時の食べ物として、決して高価なものではありませんでしたが、木の実や草の根を食べていたゴーダマにとっては、そのミルクがゆは、天上のものとも思われるような美味しさを含んでいたのです。

そのときに流した涙の意味を考えてみますと、結局、生命の悦びを捨てて、苦行に生きている自分の姿の恥ずかしさ、虚しさであったと思います。「修行するということが、骸骨となり、この地上への執着を断ち、生命を断ってしまうというようなことであるならば、それがいったいいかほどの美を含んでいるのか、いかほどの値打ちを含んでいるのだろうか。このチュダータという村娘は何の悟りも得ていないであろう。法を学んだこともないであろう。修行をしたこともないであろう。そのチュダータが、なぜこれほど光り輝いているのか。それはまるで天から来た者のように輝いていた――」その違いは結局、生きていこうとする者と、死んでいこうとする者との違いでもあったと言えましょう。思わず知らず両眼からあふれ、頬を濡らした涙、自分にはまだ流す涙もあったのかと驚く反面、生命を捨て、死に着こうとする心の、いかに惨めで侘しいことであるかということを知ったのです。

（『釈迦の本心』より）

非形状界の最高位、非想非非想定（非認知非非認知境）に到達すると、人は人ではなくなり、神でもなくなり、この宇宙全体、いや正確な言い方をするならば、十億大宇宙全体と同一になる。このスジャーターから乳がゆの供養を受ける時点で、釈迦牟尼は既にその状態に到達していた。そして、最終の悟りとは、非想非非想定から離脱し、マハー・ボーディ・ニルヴァーナに到達する段階を指す。釈迦牟尼の場合、これが菩提樹下の悟りといわれるものである。

したがって、スジャーターからの乳がゆの供養の段階で、最後のサマディだけを残した、既に真理勝者、十力者といっても過言ではない釈迦牟尼が、この人間の世界において異性を見、その異性に対して「輝いている」と言うだろうか。当然言うはずがない。あとは「座れば終わる」というほどのステージなのだ。

そして、釈迦牟尼は、自分たちの弟子に対して、異性に対しては糞尿で構成されている身体だと見よと説いていらっしゃるのだ。これは、『南伝大蔵経・経集――マーガンディヤ経』に載っている。

また、この状態に到達すると味覚も完全に止滅する。よって、釈迦牟尼が乳がゆに対して「大変おいしい」、あるいは「素晴らしい。おいしい」などという表現を使うはずが

ない。

◉過ちの原因は霊格の低さ!?

そして、釈迦牟尼の悟りの部分。ここもひどいものだ。

結局、どのような思いであったとしても、その思いに心が止まり、一点に集中して、いつも粘着質のごとく離れないようになると、それは苦しみの原因となるということを知ったのです。それゆえに、心はいつも執われずに自由でありたい。春の小川のようにサラサラと流れていく心でありたい。無執着の境地でありたい。思いというものは善念であれ、悪念であれ、あまりにもそのことに集中し過ぎると、心の自由性をなくし、幼子のごとき自由な心を失ってしまう。その結果、その心の思いが一点に止まったところを、魔に狙われやすい。そうであってはいけない。努力せねばならないという気負いを捨てて、もっと伸びやかで、もっと開放的で、豊かな、安らかな境地に入っていかねばならん。このように、ゴータマは悟ったのです。

過去三十五年数か月、三十六年近い歳月を振り返り、ひと通りの反省を終え、そして単に反省をするだけではなく、現に心に引っかかっているものを捨てて、無執着の境地、執われのない境地に達し

たときに、大いなる安らぎがゴーダマの身にしみてきました。それは先日現れたマーラーとは大違いであって、天上界から本当に、暖かい光がサァーッと胸に入ってくるのをゴーダマは感じました。そのときに、梵天の声が聴こえてきました。

「ゴーダマよ、よく悟った。お前がその悟りを得るのを私たちは今まで待っていた。私たちは長い間お前を見守っていた。よくぞそこまで悟った。まずこれがお前の第一歩なのだ。この悟りを得ないでは、今世のお前の使命は果たせないのだ。お前が歓喜の生活のなかにいたときも、私たちはずいぶん心配したし、お前が出家した当初も、栄養失調で死んでしまうのではないのか、あるいは苦行のあまり死んでしまうのではないのか、自殺をするのではないのかと、我らはずいぶん心配もしていた。しかし、そのお前がやっとこの段階まで、我らの声を聴ける段階まで修行したということを嬉しく思う。」

こうした声が聴こえてきたのです。

この声を主として伝えた者が、これがイエス・キリストの過去世の霊の声であったり、あるいはモーゼであったり、あるいは他の霊であったわけです。こうした高級諸霊たちが「梵天」という名を名乗って、インド的に現れていたのです。

（『釈迦の本心』より）

彼の最終解脱、最終の悟りに対する見解は、明らかに間違っている。なぜ、彼の見解が間違っているか、それについてこれから検討しよう。

まず、梵天という言葉、これは日本語に正確に訳すならば「神聖天」である。つまり、煩悩を離れた神の天界ということになる。この天界は、小乗仏教における独覚の修行者が完全に煩悩を破壊したときに行く世界であり、あるいは煩悩を清め、そして自己犠牲をなした魂の行く世界である。

ところが、釈迦牟尼はこの梵天の世界に過去世何度も転生しておられ、それ以上の高い世界へも何度も転生していらっしゃる。そして、梵天にとって、釈迦牟尼は〝師〟なのである。

つまり、大川隆法氏は、釈迦牟尼は指導霊によって指導されたと言っているが、これは大きな過ちで、もともと彼の、つまり大川隆法氏の霊格が低いから、守護霊の指導によって現象を生きなければならないのだろうが、釈迦牟尼ほどになるとそういうことは一切関係がないのだ。逆にこの肉体を有し、肉体から離脱し、神聖天界へお入りになり、そして神聖天界の神々を指導なさる。あるいは、日本でいうところの帝釈天――これはオウム真理教では「有能神」と正確には翻訳をしているが――有能神の世界にいらっしゃ

り、同じように指導なさっているのである。

それではここで、『南伝大蔵経・神聖天相応』を引用することにしよう。

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。

二　ところでそのとき、神聖天バカに、このような邪悪見解が生じた。

「これは常である。これは永続するものである。これは不滅である。これは完全である。これは死すべき法則ではない。実にこれは、生まれることがなく、老いることがなく、衰えることがなく、死ぬことがなく、転生することがない。また、これより他に、より優れたその煩悩からの解放はないのである」と。

三　そこで、世尊は神聖天バカの心を心によって熟考して知り、例として力強い人が曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのように、ジェータ林で消えて、その神聖天界に出現なさったのである。

四　神聖天バカは、遠くから世尊がいらっしゃるのを見た。見ると、世尊にこう申し上げた。

「ようこそ、尊師よ。よくいらっしゃいました、尊師よ。尊師よ、久しぶりにここに来る機会を作ってくださいました。

尊師よ、実にこれは常です。これは永続するものです。これは不滅です。これは完全です。これは死すべき法則ではありません。実にこれは、生まれることがなく、老いることがなく、衰えることがなく、死ぬことがなく、転生することがありません。また、これより他に、より優れたその煩悩からの解放はないのです。」

五　このように言われたとき、世尊は神聖天バカにこうおっしゃった。

「友、神聖天バカよ、なんて非神秘力になったんだ。友、神聖天バカよ、なんて非神秘力になったんだ。

というのは、無常を常であると言い、非永続するものを永続するものであると言い、滅亡するものを不滅であると言い、不完全を完全であると言い、死すべき法則であるものを死すべき法則ではないと言うからである。また、生まれ、老い、衰え、死に、転生するところを、これは、生まれることがなく、老いることがなく、衰えることがなく、死ぬことがなく、転生することがないと、このように言う。また、他により優れたその煩悩からの解放があるのに、他により優れたその煩悩からの解放はないと言うのだ。」

六　「ゴータマよ、七十二人は功徳の要素の蓄積によって、
欲望満足従事者となり、出生と老いから解放された。
これは最後であり、祭司の聖典に通じ、神聖天に生まれた。
多くの人々は、わたしに祈る。」

七　「この寿命は短く、長くはない。
バカよ、あなたが長いと考えている寿命は、
十万ニラブッダである。
神聖天におけるあなたの寿命を、わたしは認識し理解している。」

八　「世尊よ、わたしは無辺を見る者であり、
出生と老いと不運な出来事を超えて、
ああ、いにしえのわたしの戒と礼拝とは何かを、
わたしにお明かしください。わたしはそれを識別したい。」

九　「喉が渇き、暑さに悩まされた、

多くの人々にあなたが水を飲ませること、
実にそれは、いにしえのあなたの戒と礼拝であり、
眠りから覚めたように思い出す。

エーニー河の土手において、捕らわれた人を解放し、
捕らわれるべき者を導くこと、
実にそれは、いにしえのあなたの戒と礼拝であり、
眠りから覚めたように思い出す。

ガンジス河の流れにおいて、貪欲な龍により、
捕らわれた船の人々を欲し、
力ずくで解放させた。
実にそれは、いにしえのあなたの戒と礼拝であり、
眠りから覚めたように思い出す。

あなたの奉仕者カッパであった。

正覚あるとそれを考える。
実にそれは、いにしえのあなたの戒と礼拝であり、
眠りから覚めたように思い出す。」

一〇「確かに、わたしのこの寿命を認識し理解しておられる。
他をもご存じである。覚者はそのようであられる。
そのようであられるから、あなたのこの輝かしい威神力は、
神聖天界を輝かせてとどまるのだ。」
（「神聖天相応」四「神聖天バカ」）

これでおわかりになったと思うが、大川隆法氏は間違いなく釈迦牟尼の輪廻転生ではない。彼は明らかに大魔境なのである。

◉世界観に見る宗教の優劣

ここで、世界の宗教の位置付けを見てみよう。

「世界には、多くの宗教が存在している。そして、よく知られている宗教の代表的なものは、仏教、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教などである。

これらの宗教は、物理的世界と非物理的世界と、そしてこの両方を超越した超物理的、超非物理的世界の三つに分類することができる。そして、非物理的世界と超非物理的世界は、仏教と、ヒンドゥー教の一派であるヨーガ派にのみ存在しているのである。この三つの関係を図に示すと次のようになる。

【図1】

※図は、それぞれ、上に行くほどステージが高い

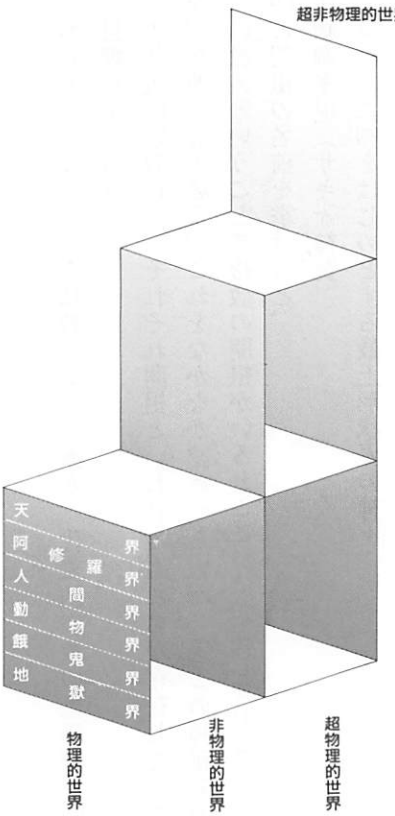


図1からもおわかりのように、この仏教とヨーガ派が、代表的宗教の世界観を内在していることは一目瞭然であろう。

ところで、この代表的宗教には、それぞれ開祖といわれる人たちが存在している。ユダヤ教のような、教典中心の場合、これをなかなか認めづらいが、過去の神秘的力を有した予言者たちの教えということで複数の開祖がいるとここでは定義しておこう。

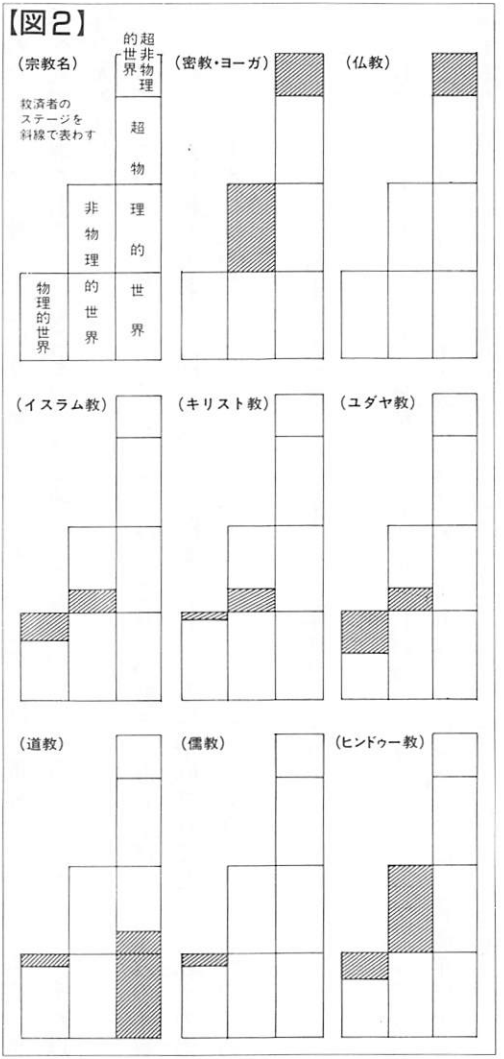
代表的な教団と開祖の名前を挙げると、

仏教――仏陀釈迦牟尼（サキャ神賢）
ヨーガ派――シヴァ大神をはじめとする最上形状界の神々
密教――マハーカーラ（シヴァ大神の化身）
ユダヤ教――過去の諸々の予言者
キリスト教――イエス・キリスト
儒教――孔子
道教――老子・荘子
イスラム教――マホメット（ムハマンド）
ヒンドゥー教――非物理的世界の諸々の神々と物理的世界の諸々の神々

と、いうことになる。

そして、これらの救済者のステージは図2に示すことができるのである。

【図2】



わたしがここで救済者という言葉を使ったのは、この人間の世界より少しでも高い世界へ人間の魂を引き上げることのできる魂という意味からである。したがって、それ以外の大義はない。

そして、この『えんじょい・はぴねす』では、これらの教えを取り上げて、宗教の本質は一つの流れに属しており、図1に掲げた順番どおり世界は構成されており、教えの崇高さもその順番に従っているのだということを、ここで論証していきたいと思うのである。

（『えんじょい・はぴねす』「宗教は一つの道」九一年九月号より）

これでもおわかりのとおり、世界の宗教の位置付けはこのような配列になっている。よって、イエス・キリストやモーゼが、自分たちよりはるかにレベルの高い釈迦牟尼を守護するだとか、あるいは指導霊になるだとかいうことは決してあり得ないのである。

実に、この十億宇宙の中で、ただ一つの魂、それが釈迦牟尼なのである。

◉釈迦を冒とく

さらに大川氏は続ける。釈迦牟尼が悟った後の状態についてである。

こうして、菩提樹下において最初の悟りを得たわけですが、悟りというものはまことに不明確な部分があって、いったん最高のものを味わってしまうと、そこに到達してそのままでいたいと思うのだけれども、どうしてもふたたび平凡な生活のなかに取り紛れていくことが多かったのです。ゴーダマもまたそうしたことが多かったと言えましょう。

それゆえに、このパピラの木の下で悟って、仏陀となったと思った彼は、この悟りを一日も早く、多くの者たちに伝えていかねばならない、これを語らないでは、私の今世での生の意味がないであろう、自分一人の心の奥に潜めておくだけならば、意味がないであろう、こう考えて、これを誰かに伝えようとしていったのです。

そして単に托鉢するだけではなく、遊行の途中、誰彼なしにつかまえては、「私は悟りを開いた」、「私は覚者となった」、「私はこういう体験をした」ということを言って回ったわけですが、誰も取り合ってくれませんでした。

「修行者よ、お前は頭がおかしくなったのだ。あまりうぬぼれるものではない。」こうした声、言葉

が返ってきました。「修行者よ、お前は誰のもとで修行してそんなに偉くなったのか。自分一人の独学ではそんなに悟りは得られるものではない。」こうした声があったのです。

（『釈迦の本心』より）

真実の仏典ではこのようになっている。菩提樹下でお悟りになった釈迦牟尼は、四十九日間のサマディにお入りになった。それは七日間のサマディに七回入られたということである。

それでは釈迦牟尼は何を体得されたのか。それはこの欲界、つまりサムサーラ、そして形状界、非形状界、その非形状界を超えたマハー・ボーディ・ニルヴァーナ（大到達真智完全煩悩破壊界）へ行き、そしてそこから帰るプロセス、これを四十九日間のサマディによって経験なさったわけである。つまり、全宇宙、全世界、全次元をここで経験なさったわけである。

これは釈迦牟尼が無煩悩、いや正確な言い方をするならば、超越煩悩の状態であったから、そのサマディにお入りになることができたわけである。よって、このようなばかげた話はない。

この一節すべて偉大なる釈迦牟尼を冒とくするような内容だった。いい加減にしてほしい。

大川隆法氏は明らかに幻影を見ているか、あるいは意図的に幻影を作り出しているのである。何とも哀れな存在である。

◉悟りを否定――大悟の〝矛盾〟

これに懲りることなく、大川氏は悟りについてあちこちで誤った持論を展開している。例えば、こんなふうである。

> つまり、悟りとは、神仏のつくられたこの世界の原理を究明しながらも、自ら自身が神仏に近づいてゆくということです。そういう意味では、悟りには、限界がありません。つまり、「悟った」ということは、永遠にありえないことなのです。
>
> （『太陽の法』より）

では、人間は、どのようにすれば悟ることができるのか。これが、つぎなる問題となります。悟り

とは、人生のやりなおしをする過程で、さらに霊性、神性を磨くことですが、この霊性、神性を磨く方法とはなんなのかを考えると、そこには、さまざまな可能性と無限の道が用意されていることに気づきます。

（「太陽の法」より）

悟りに限界がない――これでは、大川氏自身の大悟（たいご）というものも曖昧になってしまうではないか。また、悟りのためには無限の道が用意されているというが、それは違う。なぜならば、真の悟りとは煩悩破壊から来る絶対の自由・幸福・歓喜が伴うものであり、そのような煩悩を破壊する教義は仏教にしかないからである。

◉欲界のカルマが切れていない仏陀

人間というのは、肉体を持って地上に生まれて来る前っていうのは、もともとそれなりに悟った存在でありました。それなりに悟った存在であった人間が地上に生まれて、肉体を持ったがために、その肉体を持つこと自体でもって、非常に迷いやすく、また、人生航路を誤りやすく、生きておるわけですね。

（『幸福瞑想法』より）

このようなことはない。なぜならば、人間と生まれてくるのは、欲界のカルマが切れていない証拠であり、もし悟っているならば、菩薩のような例を除けば、人間界に転生するはずがないのである。

◉瞑想を知らない瞑想家の哀れ

これは恍惚感と言われることもありますが、瞑想をくり返すにつれて、次第に小恍惚感というものを何度も何度も経験するようになっていきます。ひじょうに幸せな感覚というものが体中に広がっていく。その爽やかな感じ、幸福な感じというのが体中に広がっていく。そうした感覚を得られることが多いでしょう。

そしてやがて、それが大恍惚感へと変わっていくことがあります。偉大なる悟りに近づいてくるわけです。ほんとうの人間の存在の意味、自分が生かされている意味、大宇宙の中の一員としての自分、こうした自覚を得て、そしてこの大宇宙の中の個として自分が生きているというこの意義を知り抜いた時に、大いなる悦びというものが降り注いできます。そして、体の中に血が騒ぐほどのうれしさ

を感じます。

これを大恍惚感と言いますが、古来、悟りと呼ばれているもの、大きな意味での悟りと言われていたものも、この大恍惚感なのです。大悟するということを言います。これに対して先ほどの小恍惚感というのは、小さな悟りではありますが、悟りへの入口、霊的体験ということにもなりましょう。

（『瞑想の極意』より）

これは瞑想を知らなさすぎる。おそらく、彼のいう恍惚感とは、せいぜいが「縁起の法」でいう「悦」の段階のことで、もし瞑想に熟達していない場合にはそれ以前の単なる錯覚の可能性も高い。

「縁起の法」については『生死を超える』（オウム出版）を参考にしていただきたいのだが、この「悦」の先に「喜・軽安・楽・三昧・如実智見・遠離・離貪」とあって、解脱、悟りに至るのである。よって、恍惚感をもって悟りとなすのは全くもってナンセンスである。

悟りについては、きちんとその最終の段階があることが仏典には示されている。締めくくりとして、ここにそれを掲げることにしよう。

「大王よ、ちょうど同じように、向煩悩滅尽多学男がこのようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は漏の破壊精通に心を定め傾注するのです。

彼は「これは苦である」と如実に認識し理解し、「これは苦の生起である」と如実に認識し理解し、「これは苦の滅尽である」と如実に認識し理解し、「これは苦の滅尽に至る方法である」と如実に認識し理解します。また、「これらは漏である」と如実に認識し理解し、「これは漏の生起である」と如実に認識し理解し、「これは漏の滅尽である」と如実に認識し理解し、「これは漏の滅尽に至る方法である」と如実に認識し理解します。

そして、このように気付き、このように見ることによって、愛欲漏から心は離解脱し、生存漏から心は離解脱し、非神秘力漏から心は離解脱し、離解脱において離解脱したという精通が生じ、「生は破壊され、神聖行を果たし、なすべきことをなし、この世に存在することにおいて求めることはない」と認識し理解します。

大王よ、これは、現実に利益をもたらす出家修行者の果報であり、前の現実に利益をもたらす出家修行者の果報よりも、より素晴らしく、より極妙なのです。

大王よ、この現実に利益をもたらす出家修行者の果報よりも、より優れより極妙な現実に利益をもたらす出家修行者の果報が、他にあることはないのです。」

（『出家修行者果報経』）

2 間違いだらけの〝転生〟

◉前生の記憶がない仏陀？

次に、大川隆法氏の説く輪廻転生について見てみよう。

人間とは、まことにまことに不思議なものであることよ。
そのように、成熟した魂であったものが、
母の胎内に宿り、数か月、暗闇のなかで、
赤ん坊として魂の修行に耐え、
地上に生まれ出す時に、
ああ、過去の記憶は一切消し去られ、
どのような魂であっても、平等にゼロからのスタートを切るのだ。
……（略）……
真の平等とは何であるか。

それは、いかなる境涯にある魂であっても、
母の胎内に宿り、そうして
赤ん坊として、いったん生まれたならば、
すべて過去の事実を忘れて、
ゼロからのスタートを切るという点においてのみ、
人間は平等を享受することができるのだ。
（『永遠の仏陀』より）

彼は、子宮に入り生まれた瞬間に記憶がない、イコール平等だといっている。しかし、これは大変な誤った見解である。真の仏陀の場合、死後ショックから来る意識の断絶というものがなく、前生からの意識を連続して持って生まれてこれるのである。つまり、それは自分が過去どこで死に、どういう状態で転生してきたかをはっきりと記憶しているということなのである。

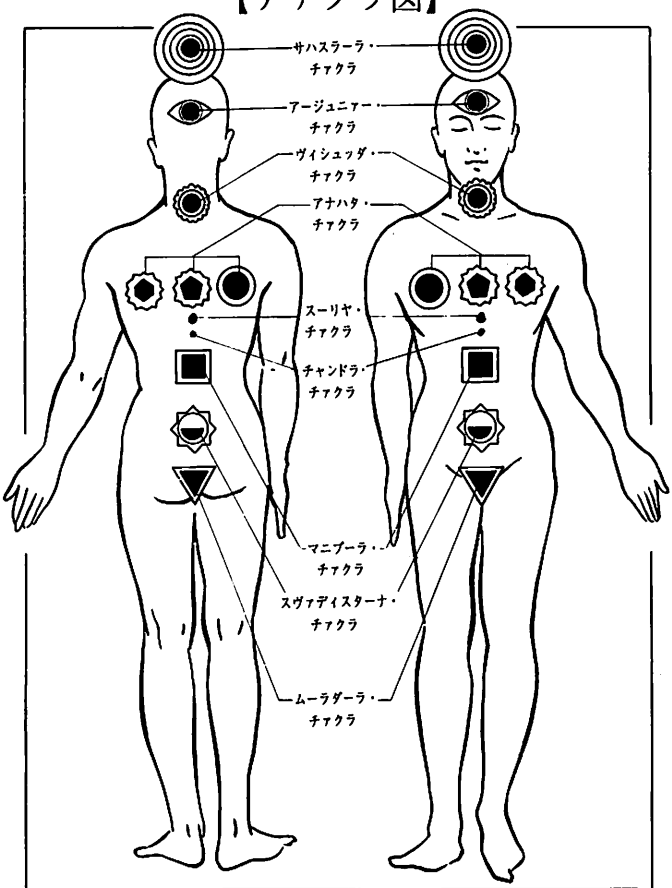
これを見てもわかるとおり、それは彼自体が仏陀でないことの証明でもあり得る。つまり、彼は子宮からこの現象界に現われるとき、記憶を完全になくしていたのである。

つまり、彼自体は意識の連続性、仏陀の必要条件である意識の連続性というものを有していなかったということになる。

ちなみに、大川隆法氏の最近のベストセラーとされる『永遠の仏陀』の中身にひととおり目を通して驚いたことは、彼がやはり完全な魔境であったということである。

まずその文章のタッチが情緒的であるという点に注意せねばならない。もし彼が仏陀であるならば、情緒的文章というものは書かないはずであるし、書けないはずなのだ。なぜならば、情緒というものはもともと下から二番目のスヴァディスターナ・チャクラ（霊的なセンターの一つ）に属し、そのスヴァディスターナの働きを完全に止滅してこそ、仏陀だからなのである。

【チャクラ図】



—チャクラ—

チャクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは七種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。訓練によって開発されるのである。

また、チャクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

超能力もこのチャクラが司っているのだ。

◉煩悩を肯定する大川流仏教

諸々の比丘、比丘尼たちよ。
この我が懐かしき声を、
魂の奥底にまで刻んでおくがよい。
おまえたちは二千六百年の時空間を経て、
ふたたび我が声を聴いているのである。
（『永遠の仏陀』より）

ここでは、二千六百年を経て比丘・比丘尼よ、聴きなさい、と言っている。まず、この比丘・比丘尼という言葉について検討を加える必要があろう。

この比丘・比丘尼というのはもともと、向煩悩滅尽多学男、あるいは向煩悩滅尽多学女のことを指している。つまり、煩悩を肯定する教えは、比丘・比丘尼にとって、それは悪魔であり、そして天敵なのである。しかし、彼は煩悩を肯定する教えを説きながら、二千六百年間を経て比丘・比丘尼に「聴きなさい」といっている。これは大きな矛盾である。

それだけではなく、この教えの中で、彼は大変な過ちを犯している。それは、なぜ二千六百年を経て、比丘・比丘尼が仏陀の教えを聴かなければならないかということである。

つまり、比丘・比丘尼がこの人間の世界に生まれ、そして釈迦牟尼の法と接するということは、当然釈迦牟尼の入滅後、釈迦牟尼と同じ世界へ行くか、あるいはアストラル世界やコーザル世界を通じて、多くの教え、多くのヴァイブレーション、多くの声を経験しているはずである。

つまり、輪廻転生というものは、連続しているものであり、断片的なものではない。例えば例を挙げるならば、五百年前ヨーロッパに転生した人が、次に日本にこの時代に転生するということはあり得ないのである。つまり、ヨーロッパに転生した五百年前の魂は、そこから次はどこの生、次はどこの生、次はどこの生と連続し、そしてこの人間の世界へ転生するわけである。

彼は完全なる魔境である。そして、魔境に導かれた者は、必ず地獄へ落ちるのである。幸福の科学の会員は、一体何のために会員となっているのだろうか？

◉〝六道輪廻〟を真っ向から否定

現実には、人間の魂は、魂としてすでに何億年も前から選別されているのであって、魂そのものが動物の魂に変わるということは、ほとんどないと言ってもよいのです。人間はあくまでも人間として転生輪廻していきます。もちろん一時期、修行のために動物の肉体に宿るということも可能ではありますが、それとても、人間にごく近い高等動物にしか宿ることはあり得ません。それもわずか一年、二年という短い期間だけ宿るということしかありません。これは、人間として生まれることの有難さを感じさせるために、そうしたことがあるのです。

したがって、実は、犬であるとか猫であるとか、こうした高等な家畜のなかには、本当は過去、人間の魂であった者も一部にはいることはいるわけですが、この間、人間的感覚を保有しているために、非常に「生」そのものが惨めにはなります。けれども、これをいったん去ったときに、「ああ、人間というのは、これほどありがたかったのか」ということを感じることになるのです。しかしこれは、あくまでも例外中の例外であって、一般的に人間は人間として生まれ変わってくる。これを言っておいてよいと思います。

（『釈迦の本心』より）

仏教は、人間は前生になした善業と悪業によって来世が決定され、「地獄・餓鬼・動物・人間・阿修羅・天界」という六つの世界を輪廻転生していると説いている。大川氏の言うように人間として選別されているという説はない。

そして、「人間はあくまでも人間」「人間にごく近い高等動物にしか宿ることはありません」というが、それ以外の転生の例はいくらでもある。

わたしの弟子の中には、瞑想によって前生を思い出している者がたくさんいる。ここで、そのいくつかをご紹介しよう。彼らの体験を見れば、大川氏の言うことが何ら根拠のないものであることがおわかりいただけるであろう。

ここでは便宜上、彼らの低い世界へ転生した例を挙げるが、彼らには人間界を超えた高い世界の過去世もたくさんあることをあらかじめお断りしておく。

◇今日はいい気分

わたしは大きな牧場で飼われている、よく肥えた乳牛でした。そこは年間を通して気候は温暖で、牛を大切にしている国でした。現代でいうと、インドやネパールのように、ヒンドゥー教徒が多く、牛は神聖な動物（シヴァ大神の乗り物とされている）として保

護しているような国だったと思います。
保護されているといっても、雄牛はもっぱら牛車や荷物車を引く役目を負い、雌牛は乳牛として人間の役に立つという、大切な労働力として使われていたのです。
わたしは毎日、昼は牧場に出され、暇さえあれば草などを食べていました。ポカポカと太陽の光を浴びながら、
「ああ、ポカポカと暖かくていいなぁー。」
と思って、のんびりと、ただひたすら口だけは動かして草を食べ続けているのです。
時折、農場に一緒に飼われている山羊などが近付いてきて話しかけます。話といっても、言葉を使うわけではなく、お互いの態度や表情で意志の疎通ができるのです。
「今日は晴れていて気持ちが良いですね。」
「気分はいかがですか。」
「今日は気分がいいです。」
「今日はわたしは気分が悪いです。お腹の調子が悪くて。」
「あなたは古くからここにいるのですか。」
「わたしは古株ですよ。年寄りです。」

動物の種類が違っても相手の言いたいことはわかるのですが、この程度の単純な会話しかしません。

のんびり過ごして牛舎に戻ると、人間が乳絞りをするので、黙って立っているのがわたしの仕事でした。毎日毎日同じことの繰り返し。ボーッとした不鮮明な意識状態で日々を経て、限りなく無思考に近い生でした。

この生は、少し天界的な要素を含んだ動物界の生だったといえると思います。家畜として飼われているので、身に危険が迫ることもないし、食べ物も十分に与えられていました。食べて寝て食べて寝てを繰り返し、怠惰で混沌とした意識状態の中、何も考えずに寿命が尽きたという、苦を感じることなく生きていられた生だったからです。しかし、この生のヴィジョンから覚めたときは、

「それにしても、まさに無智の極みとはこのような状態をいうのだな。」

と、思わず苦笑してしまいました。

動物に生まれても、個々のカルマには大きな差があります。野生の肉食動物に生まれたら、たいていは殺生のカルマによって落下のプロセスをたどり、地獄や餓鬼の世界へと落ちますが、草食動物や家畜、ペットの場合は、上の世界へとはい上がるチャンスが

あります（もちろん例外もままあります）。

わたしにとって、この乳牛の生は、だいぶ前の過去世ですが、動物界のカルマを滅する途上の生だったと思います。

（マハー・ケイマ正大師）

◇狭いトンネルの意味は

あれは、八八年の極厳修行での瞑想中の出来事でした。そのとき、あるヴィジョンが見えてきました。それは、童顔で可愛いらしい男の子と二人で細いトンネルのようなものの中を歩いているというものでした。すると、そのうちにどんどんトンネルが狭くなってくるのです。そしてついには、もうお互いが体を密着させなければ通れないぐらい細くなりました。

そのトンネルの壁というのは、すごく柔らかく、ぶよぶよしていて、しかも動くのです。そして、その動きによって、壁に密着しているわたしの体を押し進めていきました。

わたしとその男の子とは手を握り合って、

「これからわたしたちはどうなるんだろう。」

と不安混じりに言っていました。そして、本当に最後はすごく窮屈になり、ついにスポンと抜けたのでした。すると、急に明るくて広いところに飛び出したのです。

ところがです。ふと、後ろを振り返ってみると、なんとそこには女の人の裸のお尻があったのです。そこでわたしは、自分が今までその女性の体の中にいて、排泄されたのだということがわかったのです。

相手の男の子もわたしも人間の形をしていたようでしたので、自分はただ単にそこで遊んでいただけかなと思っていたのですが、それから一年後ぐらいに、尊師が説法で虫も自分たちの形を虫の形としては見ず、もっと綺麗なものとして考えているということを知りました。そこで、ひょっとしたらあれはうじ虫だったのではないか、そういえばもう一度状況を振り返ると、肛門から出た後にハエのように妙にくねくねと空を飛んでいたということを思い出したのです。

わたしは、あれはわたしがうじ虫だった過去世だったのだと思います。

（マチク・ラプドンマ師）

◇驚いた脱皮のシーン

わたしがそのヴィジョンを見たとき、最初は地獄のヴィジョンかと思いました。しかし、後でよく考えてみると、そうではないようです。

わたし自身は人間の形をしていました。しかし、これは全く当てになりません。なぜなら（これもアストラルのヴィジョンで自分が動物だった生のことを思い出して知ったのですが）、動物には自分たちの姿が人間に見えているからです。

わたしの皮膚は、突然裂け始めました。皮膚がピリピリと破れて、その中から出てきたのは、なんと、もう一人のわたしだったのです！　あまりのリアルさに気持ちが悪くなってそこでわたしの意識は肉体に戻ってしまいました。

どうやら、これはわたしが虫だった生のヴィジョンらしく、脱皮のシーンだったようです。

（マハーナーマ師）

◇冷たかった木枯らし

八九年五月のインド、ダラムサラーでのことです。「ツァンダリー」の瞑想をしていたわたしに、突然キタキツネの顔が浮かんできました。この顔を見ながら、「これは過去世の自分かな」などと思っていると、今度は、十二、三人の人間の顔がキタキツネの顔の周りに広がったのです。つまり、体がなく顔だけが、闇の中に浮いているような感じになったのです。

わたしは直感的に、「これは過去世の自分である」と知りました。十二、三人の人間は、ほとんどが男性でしたが、中には女性の顔も混じっていました。

そこで、「ああ、いろんな生の自分を知りたいな」と思って瞑想を続けていると、中央のキタキツネの顔がアップになり、吹雪が舞う冬の木立をさまようキタキツネの姿が静止画像となって現われたのです。さらに、瞑想し続けていると、その静止画像が動き出し、木立の中をキタキツネが歩き出したのです。そして、こんな声が聞こえてきました。

「寒いなあ。おなかがへっちゃったなあ。」

ここでヴィジョンは終わったのですが、その後には動物の生の空しさが残りました。

このころ、瞑想で体験する宿命通は、このように、「顔のヴィジョン→背景を含んだ静止画像→画像が動き出し声が聞こえる」といったプロセスで進行していました。

（ヴァンギーサ師）

◇ブンブン飛んだ、その後は

もう四年ぐらい前、丹沢の集中セミナーのときだったのですが、瞑想しているとき、一つのヴィジョンを見ました。それは、まず自分が地面をはっているのでした。そして、気が付くと、空を飛べるようになっていて、とにかく楽しいのです。やがて、疲れたわたしは蓑虫のいる木に止まるのでした。

次に場面が変わると、わたしは細い草の葉に止まっていました。すると、地平線の彼方に人影が見えるのです。「はて、何だろう」と好奇心がわき、ブーンと飛び上がり、その人影に近付いていったのです。すると、それは男性と女性の二人連れで、わたしはその鼻が高い美しい女性の顔の周りをブンブンと飛び回ったのです。と、突然、目の前にニュッと人間の手が伸びて、「バシッ」とつぶされてしまったのです。

このとき、興味深かったのは、自分は「アブ」なんだという記憶があったこと、しか

し同時に、虫の顔同士が人間の顔に見え、自分を人間のように見ている（体が動物で、顔が人間）ということでした。

これが、わたしが初めて見た過去世だったのです。

（ラーフラ師）

このように、現在人間であっても、過去世いろいろな動物に転生した例はいくらでもある。それは人間としてのありがたさを感じるための例外中の例外などではない。どのような魂であっても、前生のカルマによって、動物あるいはその他の世界へ転生するものなのである。

◉仏教の根本的教義がない!?

本来私たちは、すべて天上界、天国から生まれ変わってきているということが、霊言集のなかに書いてあるはずです。なぜ地獄界から地上に出ることができないかというと、地獄というのは苦しみの世界であるからです。もしそこから地上に生まれ変わってくることができるなら、人間に生まれたほうがよほど楽なはずです。もし地獄霊が生まれ変われるなら、人間になって生まれてくれば楽になる

のだから、みんな地獄から抜け出してくるでしょう。そうすると地獄はなくなってしまいます。

しかし、それが許されていないから、憑依して、生きている人間の体に入って一時期地獄の苦しさから逃れようとしているのです。こういう生まれ変わりについての真実があります。

（『人生の発見』より）

困ったものだ。六道輪廻とカルマの法則は仏教における根本的な教義である。このような教えがどこから出てくるのであろうか。いうまでもなく、地獄に転生するのは、そのようなカルマがあって転生したわけであるが、そのカルマが清算された後は、それ以上の世界に生まれ変わるのである。したがって、地獄から人間界に転生する場合も当然あるのである。

その最もいい例が釈迦牟尼の二大弟子の一人であるマハーモッガラーナの例である。彼は地獄から転生して釈迦牟尼の弟子となっている。それはその一つ前の生、第六天界の王・マーラ（破滅天）として生まれ、人間界に登場なさった真理勝者カクサンダ仏の高弟を傷付けるという悪業をなしたため、地獄へ落ちたのであった。

このように、地獄から人間界へ転生する魂も当然存在するのであり、大川氏が大ウソつきであることがここからも明らかである。

3　〝地獄〟のウソ

◉悪業ゆえの闇地獄体験？

地獄の話が出たところで、次に、彼の地獄に関する記述を見てみることにしたい。

しかし、この命綱を放した時に、
ああ、あなたがたが堕ちていく先は、決して地面ではない。
それは、無限の深い深い闇なのだ。
その闇に底はなく、
あなたがたは、どこまでもどこまでも
堕ちてゆくことになるのだ。
これを地獄という。
（「永遠の仏陀」より）

まず、地獄の描写である。彼は地獄の体験をしていない。いや、彼自体経験をなしたのは、彼の悪業なるがゆえにダルマ・カーヤ（法身）における瞬間的地獄の経験、つまり完全な闇の地獄を経験したのだろう。しかし実際、地獄というものは闇だけが存在するわけではない。

例えば苦痛を与えた場合、その苦痛と同じ、あるいはそれ以上の苦痛が同じような形で表現される。

例を挙げるならば、虫を平気でブチブチと殺したら、当然それは同じように自分の体がつぶされるし、あるいは生き物をそのまま切り刻んだならば、当然同じように切り刻まれる。これについては、『南伝大蔵経』の中の『天使経』に詳しく述べられている。それではその一節を引用しよう。

「しかし、向煩悩滅尽多学男たちよ、その大地獄のすぐ後に接して、巨大な糞便地獄がある。彼はそこに落ちる。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、その糞便地獄には針の口がある生き物がいて、表皮を切る。表皮を切り終わると、真皮を切る。真皮を切り終わると、肉を切る。肉を切り終わると、筋肉を切る。筋肉を切り終わると、骸骨を切る。骸骨を切り終わると、骨髄を食らう。そこで、彼は激

しく厳しい苦しみの感覚を経験する。しかもその悪い要素の蓄積が尽きない限りは、その間命が終わることはないのである。」

読者の諸君はよく理解できたはずである。これが地獄なのである。そして、これは地獄の一部なのである。もちろん、わたしの弟子たちもこの地獄については経験しているし、わたしも経験している。そこで、その一部を次に掲載しよう。

◇「真っ赤な血吹雪が頭の上まで飛び散って……」

強烈な地獄界の体験を、ぜひ皆さんにお話ししたくてペンを執りました。

地獄界のヴィジョンは、今まで数回見ていますが、そのどれも断片的で臨場感に欠けるものばかりでした。というのも、地獄界があまりに恐ろしいので、意図的にタマスのエネルギーを使ってその場面を覆い隠してしまったり、まともに見なかったりしたためです。また、潜在意識にある、そういう恐ろしい世界へ行きたくないという自己保存の心が働いて、避けていたということもあるのではないかと思います。

しかし、先日のヴィジョンは違いました。リアルで真に迫った、〝これこそ地獄である〟

というすさまじい体験をしたのです。

初めに、わたしは魔界、つまり阿修羅界に行きました。その世界は、オカルトチックな雰囲気があり、ピリピリとした緊張に満ちた世界でした。このヴァイブレーションは以前に経験したことのあるものでしたので、すぐに阿修羅界にアストラル・トリップしたことがわかりました。

ここでわたしは、ある経典を探していました。しばらくして、一冊だけその経典のダイジェスト版が手に入りました。わたしはその経典の中身をパラパラとめくってみたのですが、

「これではダメだ。原典でなければ。」

と思って、再び原典を探し回りました。この世界でもその経典は秘儀であって、めったに見つかるものではなかったのです。

探し歩いているうちに、ある女性が持っているという話を聞きました。しかし、その人は、この世界でも指折りの超能力者で、訪ねていっても会うかどうかわからない変わった人だということでした。とにかく行ってみなければ始まらないと思い、わたしは会いに出かけました。すると、その人は、わたしが会いに行くのもまるで知っていたかのよ

うに、わたしの目の前に突然現われ、経典を置いて立ち去りました。何も話す暇がないくらいあっという間のことでしたが、その女性は髪が長くて、長いストレートヘアをしていて、目は茶色、肌は白く美しい人でした。

その経典は、全部で二十巻ほどあって、二十巻で一セットになっていました。一冊の大きさは文庫本くらいで、厚さは一センチほどの小さなものです。しかし、阿修羅界の本は皆、外見は小さくても、本の中身が浮き上がるようになっているので、実際はその何十倍、何百倍もの内容が含まれているのです。

一巻から二十巻までを並べると、背表紙が一つの絵となっていました。ターコイズブルー（トルコ石の色）、茶色、こげ茶色、黄緑、緑の色を使って、木のツルのような模様が描かれていて、ところどころ花か木の実を表わすような毒々しい赤い丸い点が描かれていました。とても派手で、どぎつい感じを受けました。

そして、これは何の経典かというと、実はすべての地獄について詳しく描かれている「地獄界に関する経典」であったのです。ほんの少し中身を垣間見ただけでも、人間界に存在するどんな人体アトラスとも比較にならないくらい、生々しく、たとえ人体標本などと見比べたとしても、ずっと恐怖をそそるものでした。

そのとき、わたしは経典の中身に気を取られていて、この経典が阿修羅界のもので、内容が浮き上がる仕組みになっているのをすっかり忘れていました。すると次の瞬間、開いた経典のページが拡大して、一人の女性が現われました。そして、その人が、

「わたしが見本になります。」

と言うやいなや、わたしはそのページから経典の世界に入ってしまったのです。何か、ショックと共に経典の中に落っこちたような感じでした。

ふと辺りを見回すと、三人の女性がいました。そのうちの一人は、今さっき「わたしが見本になります」と言った女性で、透明なプラスティックのようなものでできている医療用のベッドに仰向けに寝かされています。よく見ると、目に見えないロープか何かでそのベッドにくくり付けられているかのようで、彼女がもがいても起き上がることはできないのです。

そこに、数人の男がやってきました。皆、手に様々な武器を持っています。ある者は大きなナタのようなものを持ち、ある者はサーベル、ある者はカマなど、とにかく鋭く研ぎ澄まされた刃物を持っているのです。

彼らは、ベッドの周りを取り囲むと、一斉にくくり付けられている女性の体を切り刻

み始めました。生きたまま、明確な意識があるままの彼女を、無造作に切っているのです！　皮をはぎ、肉を切り取って……内臓が見えてきました。腸も見えます。辺り一面血しぶきが上がり……血の海です。切られている女性は、恐怖で顔は変形し、髪は逆立ち、この世のものとは思えない形相で叫び声を上げています！　彼女は自分で、自分の目で、自分の肉体が切り刻まれているのを見ているのです！

おもむろに内臓を取り出し、すりつぶしたり……、腸を何メートルも引っ張り出している……。肉を切り取ってローラーのようなもので押しつぶす……、大きなナタを振り下ろし、骨を粉々に砕いている……。

わたしは、そのベッドの一メートルくらい横に立っていました。恐怖で全身がガクガク震え、足がすくみ、とにかく一秒でもいいから早くここから出たい、逃げ出したい――怖くて恐ろしくてどうしようもない、だが、どうしたことか全く足を動かすことができない、という状態でした。急に、わたしは嘔吐してしまいました。しかし、胃には何も入っておらず、胃液のような黄色い液体が飛び出ただけでした。

と、突然、切り刻んでいる男のカマの刃先が、偶然わたしの太ももに当たり、数センチ「グサッ！」とくい込みました。その途端、「パッ」と真っ赤な血しぶきがわたしの頭

の上まで飛び散り、血の雨が降り注ぎました。見ると、ももの肉が数十センチほどV字型にぱっくり口を開けていて、鮮血が流れ出ています。でも痛みは感じません。というよりも、痛みに気を取られる余裕などないのです。

辺りは、人間の肉と内臓類と血、体液で異様な臭気がたちこめていました。わたしは、何とか逃れたい、それだけが心を支配していましたが、赤い血と黄色い体液に満ちあふれているその場から一歩も動けません。

目の前の女性の体が完全に原形をとどめなくなったとき、やっとのことでその空間から解放されることができました。気が付くと、わたしは飛行機のような乗り物の中にアストラル・トリップしていました。思わず、自分の手足、そして刃物が刺さったはずのももを確認しましたが、五体満足で切り傷一つありませんでした。

わたしが乗っているその乗り物は、宇宙空間のような真っ暗な空間を静かにゆっくりと上昇していました。たぶん、これはバルドー（死後魂が入るといわれる中間状態）の空間だったのではないかと思います。わたしは、その中にいたので、乗り物の外形はわかりませんでしたが、中にはわたしの他には人の姿は見えませんでした。

乗り物に乗ってから数時間は経ったころかなと思っていると、阿修羅界に到着しまし

た。そして、そこで時間を確認してみると（もちろん阿修羅の世界の時間です）、わたしが経典の中に落ちてしまったときから一日半も経っていたのです。

その後、わたしはすぐに人間界に戻りました。

意識が肉体に戻ったとき、瞑想に入ったときと全く同じ位置に蓮華座を組んだまま、ピタッと固定されていました。たぶん人間界の時間にしたら数十分か一時間くらいのことだったと思いますが、正確にはわかりません。

しばらくわたしは、たった今経験したすさまじい地獄界の模様が脳裏に焼き付いて離れませんでした。これほどの恐怖は、わたしにとって生まれて初めての経験でした。いえ、きっと、遠い過去世にさかのぼり、わたしが地獄界からはい上がって以来、感じたことのない恐怖であったといっても過言ではないでしょう。

今回お話ししたわたしの地獄界の体験。これは数多く存在している地獄界のたった一つの、ほんの一場面にすぎません。それでも、恐ろしい、本当に恐怖の体験でした。決しておとぎ話の中の世界ではありません。

なぜ、仏教の寺院や、多くの仏画、マンダラには、生々しい地獄絵が描かれているのか——それは単なる脅しではないのです。修行を積んだ聖者や僧たちが、皆、瞑想によっ

て経験した世界を人々に知らしめ、悪業を積むとこのような恐ろしい世界に落ちてしまうんだよと警告を与えるために描かせたもの、それが地獄絵です。

三悪趣の世界、それは確実に存在しています。自己のカルマの風に流されて、苦しみの生を受けることがないよう、貪・瞋・癡の煩悩を滅すべく、しっかり修行しましょう。

（マハー・ケイマ正大師）

◇「火の海の中で水車のようなものに縛り付けられていた」

シャクティーパットを受ける前には、いつも期待と不安で落ち着かなくなってしまう。それは、自分の修行の進み具合が明確にわかってしまうからである。

わたしが初めてシャクティーパットを受けたのは、昭和五十九年のことである。このときは、アージュニァー・チァクラ（眉間）に集中したことと、大変元気になったことしか記憶にないが、少しずつ修行が進んでクンダリニーが覚醒したのを境に、シャクティーパット時に神秘体験をするようになった。

それから、尊師が送ってくれるエネルギーを受けると、わたしのクンダリニーが上昇するようになった。これが起こった後は絶好調の状態が続くのだ。しかし、わたしがい

たらないため、それは長くは続かないのが常だった。そもそも自分の内にたまったエネルギーは、内面の探求のために使うべきなのに、愚かなわたしは、遊びに使ってしまったからである。あたかもいっぱいに詰まった樽酒の栓を緩めるがごとく、エネルギーを徐々に漏らしていってしまったのだった。三カ月もすると、いっぱいに満ちていたエネルギーも底をついてしまい、わたしはすっかり元の怠惰な生活に戻っている、といった具合であった。

あの日のわたしも、脱力感と疲労の極致にあった。道場に来ても修行する気にもなれず、ただひたすらシャヴァアーサナをとっていた。すると突然、ブーンというモーター音と共にわたしの体がグルグルと回転し出した。

「遊びすぎると地獄に落ちるぞ。」

どこからか、世にも恐ろしい声が聞こえてくると、いつの間にかわたしは灼熱地獄に落ちていた。火の海の中で、わたしは水車のようなものに縛り付けられてグルグルと回っている。熱くて熱くて、助けを求めようとしても声にならない。

「もうダメだ！」

そう思った瞬間、わたしは元の状態に戻っていた。

尊師は、こうおっしゃっていた。

「修行をおろそかにして遊びにふけっていた罰として、守護神があなたに見せたバルドーの世界だ。」

と。わたしは、この恐ろしい体験に懲りて、再び一から始めるつもりで修行を再開した。

今のわたしは、心を入れ替えちゃんと修行をしている。確かに怠け者のわたしにとって修行はつらい。でも、つらくなったときには、シャクティーパットでの数々の体験を思い出すようにしている。あの感覚を早く自分のものにしたいと思う。近ごろでは、音を聞く体験が多くなった。エネルギーが、満ちてくると「シンシンシン……」とか「カンカンカン……」というような音が耳について離れないことがしばしばである。この先、まだまだ大変なこともたくさんあると思うが、必ず修行を成就させたい。

（サクラー正悟師（せいごし）……解脱前の体験）

お読みになっておわかりのとおり、これだけ具体的に地獄というものは形成されているし、地獄の世界は存在するのである。

◉仏典と全く違う地獄観

その他、大川氏の地獄に関する記述をいくつか見てみることにする。

地獄も、長年いるうちには、自分が厳しいことをさせられていると思うのですが、ほんとうは、死後しばらくして、自分自身まだまだ修行が足りないと思って、守護霊たちと相談の上で、地獄で修行することになるのです。

（『永遠の法』より）

地球での人類の歴史からいけば、当初地獄はなかったのです。地獄ができたのは、いまから一億二千万年前、このころからできたのです。

（『人生の発見』より）

むかしから、地獄というのは、天国と同じような大きさで、天使と悪魔が対立しているように思われてきておりますが、実際はそんなものではないのです。…（略）…。もちろん、そのよどみも相当大きく、何十億人もの地獄界人口を擁していることは確かです。

（『太陽の法』より）

やはり、大川氏が地獄を知らないということが表われている。正しく仏典を読み、また正しい瞑想修行を行なっているならば、このような考えを持つはずがない。一体、真理の法のないところでどうやって修行をするというのだろうか。

この地獄のスケールについては、以下の仏典を参考にしていただこう。決して大川氏の言うような規模ではないことがわかるであろう。

「向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十コーサラ・カーリー量のゴマを積んだ荷車から、百年経過するごとに人が一粒のゴマを取り出したとしよう。向煩悩滅尽多学男よ、二十コーサラ・カーリー量のゴマを積んだ荷車から、この方法で消滅し消費する方が、一つの『できもの地獄』よりも速いのである。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の『できもの地獄』は一つの『これ以上にないできものの地獄』に等しい。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の『これ以上にないできものの地獄』は一つの『大期間地獄』に等しい。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の『大期間地獄』は一つの『地獄徘徊流転地獄』に等

しい。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の「地獄徘徊流転地獄」は一つの「悲痛苦痛の叫び声地獄」に等しい。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の「悲痛苦痛の叫び声地獄」は一つの「黄蓮華のような状態になる地獄」に等しい。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の「黄蓮華のような状態になる地獄」は一つの「白水蓮のような状態になる地獄」に等しい。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の「白水蓮のような状態になる地獄」は一つ「青蓮華のような状態になる地獄」に等しい。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の「青蓮華のような状態になる地獄」は一つの「白蓮華のような状態になる地獄」に等しい。

向煩悩滅尽多学男よ、たとえるならば、二十の「白蓮華のような状態になる地獄」は一つの「紅蓮華のような状態になる地獄」に等しい。

向煩悩滅尽多学男よ、そして、サーリプッタとモッガラーナに対して心に反感を持ったコーカーリカ向煩悩滅尽多学男は、「紅蓮華のような状態になる地獄」に転生したのである。」

（『神聖天相応』一〇「コーカーリカ」）

「向煩悩滅尽多学男たちよ、また、その彼を、獄卒たちは大地獄の中に放り込む。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、その大地獄には、

四隅があり、四つの門があって、
同じ大きさに分けられ、
鉄の城壁に取り囲まれ、
鉄で覆われている。
その鉄でできた地は、
燃え上がり火に固定され、
あらゆる所に百ヨージャナ行き渡って、
常にとどまっている。」

（『天使経』）

4　菩薩、如来……すべて自己流解釈

◉マイトレーヤが女性の菩薩!?

それでは、今度は「菩薩・仏陀・如来・阿羅漢」について見てみよう。

そして、この釈迦の予言を書き残した人が、弥勒菩薩というふうに呼ばれているわけです。これがマイトレーヤーと言われる存在です。女性の菩薩でありました。インド語ではマイトレーヤーという名前で呼ばれました。そしてこういう未来について書き遺したわけです。

（「漏神通力」より）

まず、本書の初めに、「未来仏マイトレーヤはわたしである」という言葉を記したが、マイトレーヤそのものは女性の菩薩ではなく、男性の菩薩である。これはインド、そしてインドから伝わった中国あるいはチベット、あるいは日本問わず、男性の菩薩であることはそのすべてが認めている内容である。

そして、このマイトレーヤ、イコール弥勒、これは正しい。正確に釈迦牟尼の時代の音を発音するならば、マイトレーヤではなくてメッテッヤである。これが、パーリ語の発音である。そして、このマイトレーヤは、このカルパの終わり、つまり人間の寿命が八万歳になったとき、ジャンブ州のバーラーナシーに転生し、そしてそこで多くの法を説き明かす。これが、マイトレーヤの真の意味合いである。

◉「嘘は暴露される」は彼の説く法どおり

般若心経のなかに、「観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時」こういう言葉があります。「観自在菩薩」というのは、観自在の菩薩というふうに書いてありますが、これは古代インド語の訳で、アポロキシティー・シュバラーと言います。アポロキシティーというのは、これが観自在、シュバーラーというのは、そういう能力者という意味です。そういう能力者のことを観自在能力と言います。観自在菩薩というのは、そうした自在、何でもすべてがわかる、手に取るようになった状況の菩薩の心境の人、という意味です。

（『漏神通力』より）

次に、菩薩について説明しよう。菩薩とは「ボーディサットヴァ」の音写である。この正確な意味合いは、「到達真智運命魂」、必ず真智に到達する運命を有している魂という意味である。そして、観自在菩薩とは、これは観世音菩薩と全く同じ意味合いであり、アヴァローキテーシュヴァラを意味している。で、このアヴァローキテーシュヴァラというのは、そのサンボーガ・カーヤ（報身）の第二形状界、つまり光音天界に属しており、悲・哀れみの菩薩ともいわれている。

しかし、ここは大変重要なポイントである。彼は、「嘘は暴露される、嘘は必ず現象化する、この世で現象化する」という法を説いている。まさに彼の言葉どおり、彼の嘘はこのような形で暴露されるのである。

◉根拠不明の〝仏陀の二十相〟

今はみなさん方は、そうしたことを忘れ去っているけれども、経典を読めば、仏陀の顔に二十面相ありというのがありますね。釈迦に二十相ありと言って、顔つきが変わってくるのです。説法の度に変わる。なぜ変わるかというと、入っている指導霊が違うのです。それを弟子たちのなかにはずいぶ

ん霊視のできる人が多かったから、顔が変わるのを見ていたのです。それが現代では、二十相ありというふうに伝わっているのです。ただ、教えのなかにこれだけの法門があったということは、まあある意味では、二千五、六百年前に、現代の幸福の科学と同じように、当時考えられる限りの神理の集大成をやっていたということなのです。それが仏教の本質なのです。

（『新・幸福の科学入門』より）

まず、大川隆法氏に問いたい。仏陀の二十相なる内容は、どの経典のどの部分に載っているかと。そういう経典は一切存在しない。存在する教えは如来の三十二相のみ存在する。もちろん、中国、日本と伝わるうちにいろんな内容が欠落し、そして如来の二十相だとか、如来の十相だとかいう内容が登場したかもしれない。しかし、少なくともインド、あるいはチベットに伝わる教えの中で、如来の二十相、しかもその如来の二十相が顔が二十の形に変わるだとか、あるいは指導霊が変わることによって顔が変わるだとかいう教えはどこにも存在していない。

また、法を説くときの状態だが、指導霊が説くのではなく、叡智がそこへ現われるのである。指導霊とて、形あるものである。形なき非形状界の神々、あるいはそれよりも

上のマハー・ボーディ・ニルヴァーナ（大到達真智完全煩悩破壊界）の神々等は形が存在せず、それは光そのものなのである。しかも、彼らが体を借りて語る、語られているときの状態が体を借りられているとするならば、それはやはり魔境なのである。

◉矛盾が矛盾を呼ぶ支離滅裂の法

高級霊と地上の人間との違いというのは、本当は圧倒的なのです。

その事実を知ったときに、人間は飛んだり跳ねたりできなくなります。…（略）…たとえ地上に降りている人間が、霊格において如来であったとしても、菩薩であったとしても、実在界の菩薩や如来に比べると、心境的にはやはりそうそうな違いがあります。…（略）…したがって、彼らから見れば地上の人間は赤子同然に見えるのです。

（『幸福の科学原論一』より）

彼は、自分自身は仏陀の転生であるといっている。そして、自分こそ王であり、初めであり終わりであるという言葉を使っていながら、『幸福の科学原論』の中で、この人間界の魂はたとえそれが如来であろうと菩薩であろうと、実在界の如来、菩薩に比べて赤

子同然に見え、その程度の認識と視野しかないととらえている。

しかしである、これは彼の宇宙観をも完全に否定する内容になるわけだが、もともと如来、正確に言葉を使うならば、十力者は十億宇宙の中にただ一つの魂であるという定義が、実際に仏典の中に存在している。

ではこれは、仏典の中にどのような形で存在しているのだろうか。それは三千大千世界の中でただ一つの魂、三千大千世界の中にただ一つしか存在しない魂、これが真理勝者なのである。如来なのであると説かれているのである。

ということは、彼のとらえている如来というのは、少なくとも今から二千五百年前お説きになった釈迦牟尼の如来の定義とは大いなるズレがあるというふうに考えなければならない。

それはちょうど、ここに模型の飛行機とそして本物の飛行機があって、ある人が模型の飛行機を指して、「これは飛行機である」と説明をしたと。そして、みんなが、「あれが本当の飛行機なんだ」と考えたと。しかし、実際は乗れない単純な模型の飛行機であったと。つまり、彼の言っている如来、あるいは仏陀といわれるものは、そのようなおもちゃ、彼独得の仏陀であり、彼独得の如来なのである。

ついでに説明するならば、如来は十億宇宙の中のただ一つの魂である。神聖天は千宇宙の中のただ一つの魂である。当然、太陽神はその千宇宙の中の千分の一の宇宙の中のただ一つの魂ということになる。よって、如来が、十力者（じゅうりきしゃ）がいかに偉大な魂であるか、それは理解しなければならない。

◉一貫した世界観なきツギハギが呼ぶ混乱

天使といえば、キリスト教的であるし、一方、菩薩というと、とても仏教的な響きがあります。しかし、キリスト教の大天使は、仏教でいう如来と同じであるし、天使ということばは、菩薩や諸天善神をふくんでいるのです。

（『太陽の法』より）

先に述べたように、キリスト教は天界の一部までしかその世界観を持ち合わせていない宗教である。したがって、キリスト教の大天使や天使が、欲界を超えた存在である如来や菩薩と同じなどということはあるはずがない。

◉個の完成者が異説・邪説に惑わされる?

阿羅漢の境地とは、神仏への確固とした信仰が根づき、この世的な波風に動じない不動心ができ、守護霊の指導を受けて、日々生活をし、そのなかで接する他人の気持ちが見すかすようにわかる段階です。すなわち、人間としては、かなり完成してきた段階であり、宗教人としても、一般の人々を指導することができる段階です。

とはいえ、阿羅漢の段階では、まだ、転落する危険性をもっています。なぜならば、阿羅漢の段階とは、まだ、自分自身の潜在意識層にいる守護霊と交流可能な境地だということにすぎず、高級神霊たちの心までは十分にわかっていないからです。神理の教えの高下、バラエティ、奥行きなどについては、まだ、十分に理解していないのです。そのため、異説、邪説などにまどわされる可能性も高いといえます。

(『太陽の法』より)

これもひどい。阿羅漢とは、ヒナヤーナ(小乗)仏教の完成者を指す言葉である。つまり、他の衆生を救済するマハーヤーナ(大乗)の修行こそまだなし得ていないが、少なくとも個の完成を意味するステージに到達した修行者を指すのである。オウム真理教

の修行でいうならば、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マハー・ムドラーといったヨーガを成就して初めて到達するステージである。

このステージに達した修行者は、煩悩が止滅した状態にある。したがって、その心の安定度は極めて高い。なぜならば、心を不安定にするもの、それは煩悩だからである。よって、阿羅漢の境地に到達した者が異説、邪説に惑わされるなどということは決してあり得ないのである。

ちなみに阿羅漢とはパーリ語の音写で、経典の言葉を正確に訳すならば、「供養値魂（くようちこん）」、供養に値する魂という意味なのである。

◉〝大魔境〟としか思えない

クシナガラの沙羅双樹の木の下で、右腹を下にして、右腕を頭の下に折りしいて、左手を病んだ腹部にあてながら、涅槃に入りつつあったとき、つぎのように考えていたのです。

「私は三十五歳で悟りをひらいて以来、四十五年間、真実の神仏の道を説いてきた。しかし、その私にも、ついに、肉体を去るべきときが来たようだ。私の老いさらばえた肉体よ、八十年の長きにわたって、ほんとうにどうもありがとう。あなたががんばってくれたために、私は、実に四十数年ものあい

だ、人びとに神仏の道を説き、人間として生きる道を示すことができた。私の肉体諸器官よ、ほんとうにごくろうさまでした。…（略）…

先年亡くなった舎利仏よ。もうすぐそちらの世界に還れるから、おまえとも会えるな。また、久しぶりでひざづめで話をしようよ。おまえも、ほんとうによくやってくれた。おまえがよき聞き役だったので、私も、実に説法がしやすかったよ。おまえは、ときどき、おろかな質問をしては、私を苦笑させたが、おまえの質問のおかげで、直接私に質問する勇気さえなかった衆生が、一体どれだけ感謝したことか。

また、ヤサよ。色白で、色男のおまえを弟子にしたばっかりに、比丘尼となった女性が何十人いたことか。私は、女性がつぎつぎと頭を丸めて、家を飛び出し、入門を求め、そのご両親から抗議を受けたときは、おまえを弟子としたことを、どれだけ後悔したことかしれない。そのおまえもいい老人になってしまったな。来世で、私はもう一度、東の国に生まれてくることになっているから、そのときは、おまえも一緒に生まれてきて、私の仕事をきっとまた、手伝うんだぞ。いいな、忘れるなよ。

アナンよ。おまえはまだ若く、霊能力もさほどもっていない。しかし、おまえももうすぐ、阿羅漢の境地に到達するからね。おまえは人並はずれて記憶力がいいから、私が説法していたことをよく憶えておいて、仏典編集のときには、大車輪の活躍をするんだよ。

ウパリよ。おまえは気短かで、よくけんかをしたね。私のことを批判する人が出ると、おまえは腕

まくりをして、よくなぐりかかったものだ。おまえは、ほんとうに正義感が強かった。おまえは来世、東の国に生まれて、法華経の行者となるが、そのときには、他宗の排撃をあまりやりすぎちゃいかんぞ。

ミロク菩薩よ。女性でありながら、あなたもよく、私の教えにここまでついてこれたね。来世で、私が東の国に生まれかわるときには、おまえも、同時代に生まれかわることになっている。しかし、おまえは、私よりもさきに生まれて、どうやら、私の露払いをやってくれるようだ。私が東の国に生まれかわるということを、おまえはお経のなかに遺しておきなさい。…（略）…」

これが、釈迦が入寂するときの想いでした。さすがの釈迦も、入寂のときには、ほとんど声が出ず、心の窓をひらいている弟子たちが、その霊能力によって、釈迦の心中の声を聞き、こうして涅槃経に記録として遺されたようです。

（「太陽の法」より）

これが大川氏のいう釈迦牟尼入滅のときの想いだそうだが、わたくしは大川氏ほど釈迦牟尼を軽々しく扱った宗教家はいないのではないかと思う。しかもその内容も何を根拠にしてこのような書くのか、全く理解できないのである。

大川氏のいう『涅槃経』とは、いわゆる『大般涅槃経』、オウム真理教でいう『大完全煩悩破壊経』のことだと思われるが、一体そのどこにこのような内容が書かれているというのであろうか。でたらめもいいところである。

しかもここでは、釈迦牟尼のみならず、舎利仏（サーリプッタ）をはじめとする高弟たちをも誹謗中傷するとは、一体どういうことなのであろうか。

サーリプッタは、「智慧第一」と称され、マハーモッガラーナと並んで釈迦牟尼の二大弟子と呼ばれた大聖者である。「おろかな質問をして、私を苦笑させた」に至ってはわたしはあ然として言葉が出ない。それは、弥勒菩薩についても同じである。

やはり、これは大変な魔境であると考えるより他に解釈のしようがない。

◉全くわからない〝如来〟の意味

そこでまず、この如来とは一体何かということについて、定義していきましょう。如来という字は、来るが如しと、こう書いてあります。来るが如し。何が来るが如しなのかというと、結局、神仏ですね、神仏、それが来るが如し、そういうことなのです。神や仏と言われるような人が、この地上に来るが如し、これを如来と言います。

（『永遠の法』より）

これは如来の何の説明にもなっていない。ここで、如来の原語（tathāgata）を解析してみたい。

確かに、これをtathā + āgataと考えると、「そのように来る」という意味になり、そこから「如来」という言葉を当てることはできる。しかし、これをtatham + gataと考えると、「真理に至る」という意味になるのである。パーリ語というのは、このように切り方によって大きく意味合いが変わってくるのである。そして、研究者の中では、この言葉は「勝利を得て真理に到達した者（he who has won through to the truth）」であると提案されているのである。そこで、わたしはこの言葉に「真理勝者」という訳語を当てたのである。

◉根拠が見えない

霊界の人口は、すべて合わせて五百億人を超えるとも、一説には言われております。しかし、その五百億人近い霊人口のなかで、如来と言われている人の数は、わずか四百数十名、五百名足らずであります。これだけしかいないわけです。

（『永遠の法』より）

これについては、再び『虹の階梯』からチベット仏教の教えを引用させていただこう。

「また、こうもいわれている。地獄の住人の数を夜空にまたたく星の数にたとえれば、餓鬼の数は昼間の空に見える星の数ほどしかない。この餓鬼の数を夜空の星の数とすれば、動物は白昼の空の星くらいわずかだし、この動物でさえ、その数を夜空の星の数にたとえれば、昼の空の星ほどもわずかな人間よりもはるかに多い。その人間の中でさえ、修行にはげもうという人の数は、白昼の星ほどに減ってしまう。」

現在、地球上の人間の数は約五十億。それとこの比喩を考えれば、魂の総数が五百億などというものではないことがすぐにわかるであろう。

5　魔境独得？の宇宙観

◉支離滅裂は独得

大宇宙がどれほど広大無辺なものであっても、たかだか三次元空間の存在にしか過ぎないのです。…（略）…。

従ってわれわれの考える神は、従来の天地創造の神というイメージをはるかに超えた、高次元宇宙、多次元宇宙をも創り出している広大な創造エネルギーの持ち主ということになります。しかも、十次元や九次元という高次元世界はもちろんのこと、四次元や三次元物質界も、神の意志、想念によってスクリーンに映された映画のように放映されている世界であり、神が映写機のスイッチを切ったならば、こつ然と消えてしまうような意識空間でもあるということです。

（『新・幸福の科学入門』より）

「菩薩・如来」のところでも述べたが、十力者の存在は太陽神や、あるいは宇宙神をはるかに超えた存在である。よって、彼の定義している次元、あるいは宇宙観というもの

は、完全に仏教的宇宙観でもなければ、彼独特の魔境による宇宙観であるといわざるを得ない。

◉「色即是空」「空即是色」も歪められた

この「色即是空」に代表される「空」の思想は、実は二段階に分けて理解されるべきなのです。

その第一は、結局、この世とあの世という二分化されたものの見方、思想ということを意味しています。すなわち、この場合の「色」というのは、三次元世界のことです。

この三次元世界は、実は「色即是空」、すなわち、本当の世界ではないのだ。「仮の世界」なのだ。そして「実の世界」が、あの世にあるのだ。この世はやがて滅び去っていく姿であり、本当は仮の世なのだ。…(略)…したがって、「色」すなわち外見に表れ、目に見えるような姿は仮のもので、実際は、それはやがてうつろい消えていく、そして実の世界に入っていく。この実の世界は、目には見えないがために「空」と呼ばれる。

また、「空即是色」、すなわち実在の世界に在る魂たちは、修行という目的を持ってこの三次元世界に再び生まれ変わってくる。そして肉体をまとって生活をしていく。これは目に見えぬ世界が、目に見える世界へと変わってくることであるので、これが「空即是色」というふうに言われているのです。

(『釈迦の本心』より)

これも違う。この世における現象は、すべて心の現われである。これが「色即是空」の正しい意味である。そして、心の働きはすべてこの世に現象化する。これが「空即是色」である。これはオウム真理教の説く正しい宇宙観とそれぞれの世界の関係を理解していただければわかることと思う。

仏典の中に、「欲界・色界・無色界」という言葉が出てくる。オウム真理教では、それぞれ正しい訳語で「愛欲界・形状界・非形状界」という言葉を当てている。これに該当する言葉は、ヨーガでも見られ、それぞれ「現象界・アストラル世界・コーザル世界」と呼んでいる。

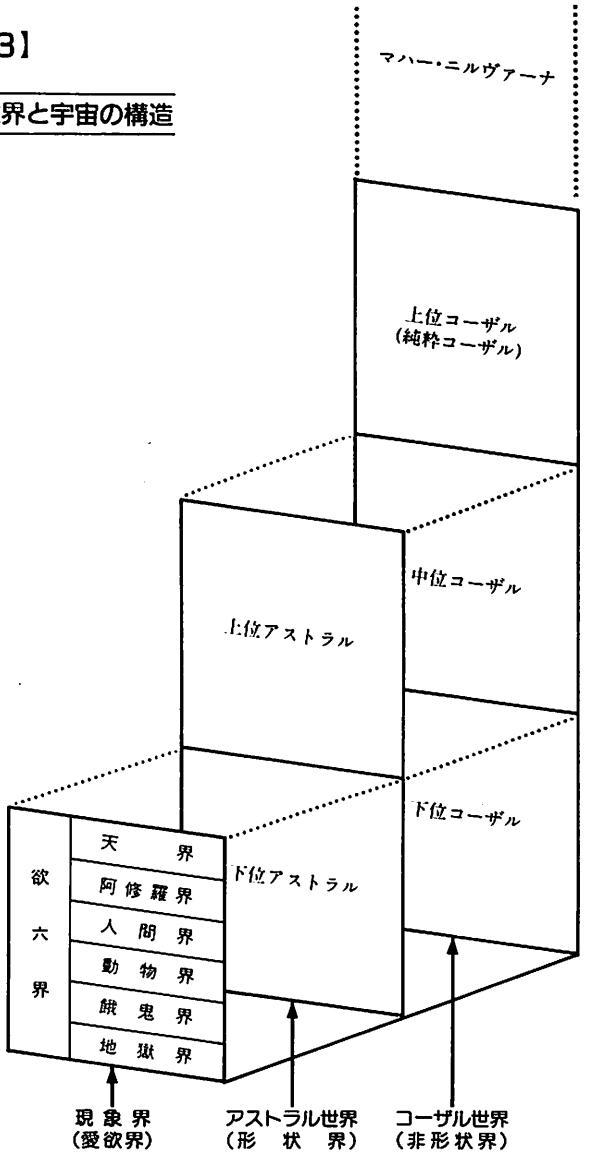
わたしたちの住んでいる欲界の世界の現象は、すべて非形状界、コーザル世界にあるデータがアストラル世界、形状界でイメージと化し、そしてこの現象界で現象化されるのである。

わたしがここで、この世における現象は、すべて心の現われ、つまり最も深い潜在的なデータの現われであり、心の働きがすべてこの世に現象化すると言ったのはこのことである。これらのそれぞれの位置関係は図3を参照していただきたい。

ちなみに大川氏は九次元世界とか二十次元世界といった言い方をされているが、それらは全く根拠のない世界観といわざるをえない。

【図3】

欲六界と宇宙の構造



◉「空」と「無」の本当の意味

「空」という言葉の意味を解く鍵は、実は時間にあります。これは時間というものの本質を、「空」という言葉で表しているのです。時間というものの存在のなかには、実は変転していくということの意味があるのです。何ものも変化しない、そうした空間のなかにおいては、時間というものは存在しないのです。それは静止した状態であり、停止している状態であると言ってもよいでしょう。万物が変転し、流転するということによって、初めて時間というものが発生してくるのです。

したがって「空」の思想は、実は時間論に他ならないと言えます。時間というものは、生成、発展、衰退、枯死、あるいは衰退、消滅という、この循環のプロセスを意味している。このように考えていいのです。

さすれば「無」というものは、これは存在論、つまり時間と対比される存在、この存在論にキイがあると考えてよいのです。

（『釈迦の本心』より）

この「空」と「無」の理論もでたらめである。これは、先程述べた宇宙観の中の非形状界、コーザル世界を見ていただきたい。この非形状界を構成する要素は光である。そし

て、世界が高くなればなるほど、その光は強まり、純粋コーザルと呼ばれる世界はまさに光の海、「空」なのである。ところが、このコーザル世界の最も低い部分は、光がなく闇である。この世界を「無」と呼ぶのである。これは、禅の修行などで、功徳（善行）を積まず、専ら心を静める修行だけをなしている場合、このような「無」の世界に没入することになるのである。

◉現代科学へのとらわれが世界観を小さくする

九次元の世界では、縦、横、高さ、時間、精神、神知識、利他、慈悲の八つの構成要素に、宇宙という要素が加わります。八次元世界までの住人は、地球を取り巻く成層圏内に、地球的磁場としての多次元世界を構成し、そこに住んでおります。しかし、九次元世界になると、地球系だけにとどまっておらず、太陽系以外のほかの星団の霊界ともつながっているのです。

（『太陽の法』より）

三次元宇宙空間に星としての太陽が出現したのは、いまから約百億年前です。そのつぎの星として、七十億年前に水星ができたわけですが、このときには、まだ、生命が住めるような状態ではありませ

んでした。

この太陽系に最初の生命が誕生したのは、美しきヴィーナスの星、金星ができてからです。金星ができたのは六十億年前ですが、それからさらに五億年ほどたったころ、ですから、五十五億年ぐらい前になりますが、そのころにこの太陽系に九次元世界がつくられることになりました。

（『太陽の法』より）

仏教に「四劫」というものがある。これは、「成劫・住劫・壊劫・空劫」を指し、宇宙の創造から破壊・再生のプロセスを説明した言葉である。同じことを、ヨーガでは「創造・維持・還元（破壊）・虚空」という言葉で表わしている。

原始仏典『南伝大蔵経』を見ると、釈迦牟尼の以前に二十四の如来（真理勝者）がこの世に登場したとされている。そして、その第一の真理勝者ディーパンカラ仏が登場したのは、今から四アサンキャ十万カルパ昔のこととされている。

この「アサンキャ」あるいは「カルパ」とは、インド仏教における時間の単位であるが、一カルパが約百億年とされている。したがって、真実の真理の歴史がいかに長いタイムスケールを有しているか、よくおわかりであろう。

大川氏の著書を読んで感じることは、仏教を説いていながらそのタイムスケールが異常に短いということである。

おそらく、大川氏は現代宇宙論をはじめとする現代科学の観念にとらわれており、真実の仏典にあるような時間や数量の感覚を持ち合わせていないのではないだろうか。彼の持ち出す単位はせいぜいが億どまりなのである。

しかし、実際この宇宙は既に何度も創造から破壊、再生のプロセスを繰り返して今に至っている。それは、日々瞑想修行に励んでいるわたし、それからわたしの弟子たちが何カルパも前の過去世を思い出したりしていることからも明らかなことである。

ところで、この惑星誕生の年代とその順番は、現代地球物理学から見てもおかしなものとなっているのだが、一体どういうことなのだろうか。

次に挙げる文もあまりにもスケールの小さい、短い、大川氏の宇宙観をよく表わす例である。

しかし、あの世に還ってみると、ほんとうの人生経験というのは、そんなに短いものではないことがわかるでしょう。しかも、数千年、数万年というほどの短いものではなくて、もっともっとはるか

昔から、自分が人間として生きていたのだということを知るのです。それは百万年というものではない。もっともっと古いものです。数千万年、数億年の歴史というものを、自分の魂は刻んでいるのです。こうした過去世の記憶というのが戻ってくるのです。…（略）…。

これに反して、天国に還った人たちは、過去世の記憶というのがすべて蘇ってきます。…（略）…。菩薩と言われる方で、数万年ぐらい前のことまでは、憶い出すことができます。如来という方になってくると、もっと昔のことまで憶い出していくことができます。如来になると、数十万年、あるいは、百万年ぐらい前のことまで、憶い出そうと思えば憶い出すことができます。

（『永遠の法』より）

6 仏典を知らない仏陀の神通力

◉六神通の本当の意味

釈迦の持っている六大神通力のなかで、最大のものと言われたこの漏尽通力。この世的にも優れた生き方をしながら、そして霊的能力を最高度に発揮する生き方。これをどのように究めていけばよいのか。

そのためには、まず、生きている人間がこの漏尽通力を究めんとするならば、まずその意識を高めていく必要が、どうしてもあります。すなわち、肉を持った身でありながら、高級霊たちと同じだけの意識の高さを持つ必要があるわけです。単に、高級霊からの啓示というものを教えとして受け止めるのみならず、彼らの垂れんとしている教えそのものの輪郭がわかり、その高低がわかり、その広がりがわかる。その個性の違いがわかる。こういう必要があるわけです。

（「漏尽通力」より）

漏尽通（ろじんつう）といわれる神通力（じんつうりき）は、一元的に発生する神通力ではない。これは、その前に四

段階のサマディを通過した者が頭頂から化身を抜け出し、一身を多身となし、多身を一身となし、あるいは空中を自在に浮揚する等の神通力を得、さらに、天耳・他心・宿命・天眼という合わせて五つの神通力を得て初めて身につく神通力なのである。このとき、心は完全に空性へ没入し、そしてコーザルのバルドー、つまりダルマ・カーヤ（法身）、アストラルのバルドー、つまりサンボーガ・カーヤ（報身）、そしてこの現象界のバルドー つまり、ニルマーナ・カーヤ（変化身）、それと同時にその身体、それを動かすことができる状態になっている。

つまり、この漏尽智イコール仏陀の証明なのである。また、証明そのものなのである。よって、この現象の世界で仕事がたくさんできるだとか、あるいは霊能力を持ちながら現代人と同じ生き方ができるだとかいわれている意味合いではない。

これについては、先に挙げた『南伝大蔵経・出家修行者果報経』（P105）を見ていただきたい。

他の神通力についても同じで、天耳・他心・宿命・天眼――正確にいうと、日本では天眼と訳されているが、実際は死生智――これについても正しい見解というものはこのような形で表現されるのである。

「このようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は天耳界に心を定め傾注します。そこで、彼は清浄であって人間を超越した天耳界において、天や人間、あるいは遠くや面前の双方の声を聞くのです。…（中略）…

このようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は他心通に心を定め傾注します。そこで、彼は他の生命体や他の魂の心によって、心を把握して認識し理解します。すなわち、

愛著がある心を愛著がある心と認識し理解する。
愛著を離れた心を愛著を離れた心と認識し理解する。
邪悪心がある心を邪悪心がある心と認識し理解する。
邪悪心を離れた心を邪悪心を離れた心と認識し理解する。
迷妄がある心を迷妄がある心と認識し理解する。
迷妄を離れた心を迷妄を離れた心と認識し理解する。
閉じ込められた心を閉じ込められた心と認識し理解する。
散らばった心を散らばった心と認識し理解する。
大いに広がった心を大いに広がった心と認識し理解する。

大いに広がっていない心を大いに広がっていない心と認識し理解する。
より優れたものを持っている心をより優れたものを持っている心と認識し理解する。
無上の心を無上の心と認識し理解する。
サマディに入った心をサマディに入った心と認識し理解する。
サマディに入っていない心をサマディに入っていない心と認識し理解する。
離解脱した心を離解脱した心と認識し理解する。
離解脱していない心を離解脱していない心と認識し理解するのです。…（中略）…
このようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は前世の生き様の回想精通に心を定め傾注します。
そこで、彼は様々な前世の生き様を思い出します。
すなわち、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元期と再生期において、
『わたしはあそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような楽苦を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、そこに転生した。

そこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、ここに転生した。」

と、このように状態と説明とがある、様々な前世の生き様を思い出すのです。…（中略）…

このようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は生命体の死生精通に心を定め傾注します。

彼は清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体の死と転生を見て、生命体が要素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解します。

「尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において悪行を具足し、言葉において悪行を具足し、意識において悪行を具足し、聖人を非難し、誤謬見解を抱き、誤謬見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、離別であり、悲痛に向かうことであり、破滅である地獄に転生した。

尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において善行を具足し、言葉において善行を具足し、意識において善行を具足し、聖人を非難することなく、正見解を抱き、正見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、幸福に向かうことである天の世界に転生した。」

と、このように、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体の死と転生を見て、生命体がその要素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解するのです。」

（『出家修行者果報経』）

◉梵天を超えた釈迦の神通力の証明

菩薩とは、一応、自分づくりという「小乗」の段階を通過して、「大乗」、すなわち、衆生済度に立ちあがり、人びとを救おうという気持ちになっている魂の段階です。とはいえ、この菩薩の境地にいたってもまだ、人間的な悩み、苦しみがあり、いつもいつも神霊能力を発揮できるような状態ではありません。しかし、菩薩の心境が進み、菩薩界上々段階の悟り、すなわち、梵天の境地になってくると、少々の病気や事件、人間関係のできごとにおかまいなく、安定した神通力を発揮することができるようになってきます。

（『太陽の法』より）

これについては、仏典をご紹介しよう。梵天（神聖天）と釈迦牟尼、弟子たちのステー

ジ、そして釈迦牟尼の救済計画を手伝っていた高弟たちと梵天のどちらが神通において秀でているかがおわかりいただけるであろう（また、『太陽の法』P144では、神足通を幽体離脱のこととされているが、これも間違いである。第一章参照）。

一　サーヴァッティーの地にて。

二　ところでそのとき、ある神聖天にこのような邪悪見解が生じた。

「ここに来ることのできる、出家修行者や祭司はいない」と。

三　そこで、世尊は、その神聖天の心を心によって熟考して知り、例として力強い人が曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのように、ジェータ林で消えて、その神聖天界に出現なさったのである。

四　そして、世尊はその神聖天の上空に蓮華座で座り、火の要素の生起のサマディに入られた。

五　さて、聖者マハーモッガラーナには、これがふと心に浮かんだ。

「今、世尊は一体どこにとどまっておられるのだろうか」と。

六　そこで、聖者マハーモッガラーナは、清浄で人間を超越した天眼によって、世尊がその神聖天の上空に蓮華座で座り、火の要素を具足しておられるのを見た。それを見ると、例として力強い人が曲

げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのように、ジェータ林で消えて、神聖天界に現われたのである。

七　そして、聖者マハーモッガラーナは、その神聖天の上空の東の方角で、世尊より低い所に蓮華座で座り、火の要素の生起のサマディに入った。

八　さて、聖者マハーカッサパには、これがふと心に浮かんだ。

「今、世尊は一体どこにとどまっておられるのだろうか」と。

そこで、聖者マハーカッサパは、清浄で人間を超越した天眼によって、世尊がその神聖天の上空に蓮華座で座り、火の要素を具足しておられるのを見た。それを見ると、例として力強い人が曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのように、ジェータ林で消えて、神聖天界に現われたのである。

そして、聖者マハーカッサパは、その神聖天の上空の南の方角で、世尊より低い所に蓮華座で座り、火の要素の生起のサマディに入った。

九　さて、聖者マハーカッピナには、これがふと心に浮かんだ。

「今、世尊は一体どこにとどまっておられるのだろうか」と。

一〇　そこで、聖者マハーカッピナは、清浄で人間を超越した天眼によって、世尊がその神聖天の上空に蓮華座で座り、火の要素を具足しておられるのを見た。それを見ると、例として力強い人が曲げ

た腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのように、ジェータ林で消えて、神聖天界に現われたのである。

そして、聖者マハーカッピナは、その神聖天の上空の西の方角で、世尊より低い所に蓮華座で座り、火の要素の生起のサマディに入った。

一一　さて、聖者アヌルッダには、これがふと心に浮かんだ。

「今、世尊は一体どこにとどまっておられるのだろうか」と。

そこで、聖者アヌルッダは、清浄で人間を超越した天眼によって、世尊がその神聖天の上空に蓮華座で座り、火の要素を具足しておられるのを見た。それを見ると、例として力強い人が曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのように、ジェータ林で消えて、神聖天界に現われたのである。

そして、聖者アヌルッダは、その神聖天の上空の北の方角で、世尊より低い所に蓮華座で座り、火の要素の生起のサマディに入った。

一二　さて、聖者マハーモッガラーナは、その神聖天に詩句によって語りかけた。

「友よ、今日あなたにその見解があり、
以前にも、あなたにその見解があった。

神聖天界の輝きを、
超えるものを見たのか。」

一三「尊者よ、わたしにはその見解はなく、
以前にも、わたしにその見解はありません。
神聖天界の輝きを、
超えるものを見たこのわたしが、
わたしは常であり、不滅であると、
今日どうして言えましょう。」

一四　そこで、世尊はその神聖天を動揺させて、例として力強い人が曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのように、神聖天界から消えて、ジェータ林に出現なさったのである。

一五　さて、その神聖天は、ある神聖代議天にこう呼びかけた。

「さあ友よ、聖者マハーモッガラーナの所に行きなさい。行って、聖者マハーモッガラーナにこのように言いなさい。

『尊者モッガラーナよ、一体、かの世尊の多学の弟子たちの中で、例として尊者モッガラーナやカッ

サバやカッピナやアヌルッダのように、このような大いなる如意とこのような大いなる威神力を持つ人々が、他にいるのでしょうか」と。」

一六「かしこまりました、ご主人さま。」

と、その神聖代議天はその神聖天に承諾すると、聖者マハーモッガラーナの所に行った。

一七　行くと、聖者マハーモッガラーナにこう言った。

「尊者モッガラーナよ、一体、かの世尊の多学の弟子たちの中で、例として尊者モッガラーナやカッサパやカッピナやアヌルッダのように、このような大いなる如意とこのような大いなる威神力を持つ人々が、他にいるのでしょうか」と。

一八　そこで、聖者マハーモッガラーナは、その神聖代議天に詩句によって語りかけた。

「三つの神秘力と如意に達し、
心の秩序を熟知し、
漏を破壊した供養値魂の、
多くは覚者の多学の弟子である。」

一九　そこで、神聖代議天は聖者マハーモッガラーナが説いたことに欣喜し感謝すると、大神聖天の

所に行った。行くと、神聖天にこう言った。

「ご主人さま、聖者マハーモッガラーナはこのようにおっしゃいました。

『三つの神秘力と如意に達し、
心の秩序を熟知し、
漏を破壊した供養値魂の、
多くは覚者の多学の弟子である』と。」

二〇　このようにその神聖代議天は言った。大喜びしたその神聖天は、その神聖代議天が説いたことを受け、それを実践しようと心から決意した。

（『神聖天相応』五「別の見解」）

◉教学不足の仏陀

もちろん、九次元の悟りには、六大神通力のそれぞれにつき、最高の能力をともない、三世を見通す能力がそなわります。しかし、釈迦は、神仏の道に入った者が、超能力信仰におちいる危険性をい

ち早く見抜き、その盲信をいましめるため、読心力以外の霊能力をあまり使わなかったようです。

（『太陽の法』より）

日本に紹介されている仏教経典は、主に北伝仏教、つまりインド、中国を経由して日本にもたらされたものである。確かに、現在一般に見られる経典に、釈迦牟尼の神通力の記述はあまり出てこない。しかし、それをもって、釈迦牟尼が神通について説かず、また実際に使用しなかったとするのは全くのでたらめである。

P168に挙げた経典（神足通）、『大完全煩悩破壊経』に見られるテレポーテーション、頻繁に登場する死亡した修行者の転生先を語る話（死生智）、ジャータカに見られる過去世の話（宿命通）など、数え上げればきりがないほどである。

この程度の基本的な知識もないとは。仏陀を名乗るのであれば、もっと教学が必要であろう。

◉話せば話すほどボロが出る

②過去世と方便

はずれると言うのでは問題があるかもしれないので、方便と考えたほうがよいかもしれません。釈迦もこの宿命通力にひじょうにたけていました。そして過去世物語をそうと語っています。これは仏教の物語で、読まれた方もけっこういらっしゃると思いますが、ではそれがほんとうにすべて当たっているかどうかということを考えてみますと、はっきりいって当たっていないのです。

釈迦自身も自分は過去七回生まれ変わって過去七仏といわれていると語っております。そしてその前世物語を話していて、そのときは自分はベナレスに生まれてどうこうだったというように説いているのですが、すべてインドのなかでの話なのです。認識がインドを出ることがないからこのようになるのです。…（略）…。

これははたして釈迦が真実を知らなかったのか、あるいは、知っていてそういったのかどうか、このあたりはミソの部分で言えませんが、事実として見ればこれは当たっていないのです。そういうことがいえます。

それからジャータカ物語などでも、動物がたくさん登場してまいります。釈迦の過去世をずっとたどっていくと、鹿になったり、うさぎになったりするのです。それが自分の過去世であったという話

も出てくるのです。しかし、このようなことが当たっているはずもありません。これは人を教化するためにそのような話をして、動物をだいじにしなければいけないということを、人間にはそういう立場になる可能性があるという話で諭しているのです。鹿の王様であったときの話など、いろいろと語っています。これには多少の方便もあったと思います。

③過去世と指導霊

このように、過去世を見通すといってもそうした問題はありますし、特に指導霊がこのあたりは、ある意味で適当なことを言うことがありうるということです。指導霊の認識と、地上の人間の認識とのあいだに、ものすごいズレがあるためなのです。

（『太陽のメッセージ・PART2』より）

釈迦牟尼が過去七回生まれ変わって過去七仏といわれているなど、これもでたらめである。現に、釈迦牟尼の一つ前に登場した真理勝者カッサパ仏の当時、釈迦牟尼はジョーティパーラという名で真理勝者の弟子であったことが『ガティーカーラ経』には記されている。

また、過去世物語がすべてインドの中の話というが、インドどころか第二天界の有能

神だった過去世の記述もあるほどだ。

こういう形で、仏典を知らないということがばれてしまうのである。

7 間違いだらけの仏教知識

◉〝自由〟の本当の意味

ここでは、その他としてアトランダムに、大川隆法氏の著書からピックアップしたものについてコメントを添えておこう。

そうして、自由とは何であるか。
ゼロからのスタートを切った赤ん坊が、
その個性を発揮し、その思いによって、行ないによって、
自らの人格を形成し、仕事をなしてゆく時に、
いかなる評価を受けるような人間になるかは、
各人の責任に委ねられているということを意味するのだ。
（『永遠の仏陀』より）

ここは、彼の「自由」という考え方である。この文章を見る限り、彼はエゴ、イコール自由だと表現している。しかし、仏教で説く自由というのは、逆にそういうものから完全に離脱した状態、そしてマハー・ボーディ・ニルヴァーナ（大到達真智完全煩悩破壊界）というところに真我が独存位となり、そこから非形状界・形状界・愛欲界を自在に出入りすることのできる状態、これを自由と定義している。

つまり、仕事が思うがままにできるとか、あるいは自分の実力が発揮できるというような内容をもって自由といっているのではないのである。それは明らかに、前生において積んだ徳が現象化したにすぎないわけである。

もし、それが自由だとするならば、その人の意志によって何百年、何千年と自由に仕事ができるはずである。しかし、できないところを見ればそれが自由でないことをよく理解できるはずである。

◉ "正法" の定義

◇正法の定義①――過去の人類の知的遺産に照らして合致すること

そうすると、正法の基準としては、釈迦なり、イエスなり、ソクラテスなり、モーゼなり、孔子なり、こうした過去の評価が定まっている偉人の、人類に対する知的遺産、これと照らし合わせて、大きな矛盾がないかどうか、納得がいくような真理が、合致するような真理がそこにあるかどうか。説き方の違いはあるにしても、本質において同じかどうか。これが点検されねばなりません。

◇正法の定義②――何らかの人智を超えた現象を伴うこと

神が、そうした偉大な人を送り込んできて教えを説かすとするならば、その人の教えを支援するために、さまざまな援助をするはずです。これがある時には霊言となったり、霊視となったり、霊聴となったり、あるいは、三世を見通す力となったり、いろんな超能力としてあらわれる場合となるわけです。

◇正法の定義③――現代人の知性と理性に訴えかけて矛盾しない理論の存在

神が宇宙を統べる方であり、宇宙の理法の体言者であるならば、そこから流れ出した教えもまた、宇宙の理法を体現しておらねばならない。宇宙の理法を体現しているということは、そこに理路整然とした筋があるはずです。

（『マインドアップシリーズ／幸福の科学中級テキスト①より』）

彼はここで、三つの正法の定義を掲げている。しかし、正法とは、特に仏教でいわれている正法とは、それは釈迦牟尼の教えなのである。

では、釈迦牟尼の教えの正法とは何であろうか。これは、煩悩破壊の教えである。つまり、いかに煩悩破壊をし、そして自由・幸福・歓喜を得させるか、これが正法の大原則なのである。

よって、古今東西の聖人あるいは哲人といわれている人の中で、煩悩を肯定している人、煩悩を否定も肯定もしていない人、煩悩を否定している人、この三つのグループの人の説く法は正法とはいえないのである。これは、正法の途上にある法ということができるのである。

では、何によって正法というのであろうか。それは、煩悩を超越し、完全にその煩悩を破壊することのできる法、それこそが正法なのである。また、釈迦牟尼は『創世期経』の中でこのように説いていらっしゃる。

「今正しいといわれている法の中で、正しくない法がたくさん存在している。」

と。

つまり、今知識人、インテリゲンチアといわれている人たちの生活基盤となっている

考え方が正しいとは釈迦牟尼は言ってらっしゃらない。特に時代が悪化すればするほど、そこの差、つまり正法とインテリゲンチアとの考えのギャップは開いてくるとおっしゃっている。これも大きな矛盾である。

これは、『創世期経』の中に詳しく述べられている。

「最上の魂に匹敵する者よ、その生命体たちのある生命体たちは、森の境域の葉っぱの小屋でその静慮はできず、村の近くや町の近くに退いて、経典を作って住む。そこで、人間たちは彼を見て、このように言った。

『友よ、実に、この生命体たちは、森の境域の葉っぱの小屋でその静慮はできず、村の近くや町の近くに退いて、経典を作って住む。今や彼らは静慮しない』と。

最上の魂に匹敵する者よ、『今や彼らは静慮しない』というのが、学者のことであり、『学者』という第三の言葉が生じたのだ。

最上の魂に匹敵する者よ、そのときは卑しいと見なされていたのだが、今では最上と見なされているのである。」

（『創世期経』）

◉仏でない魂を霊媒する矛盾

仏の説く教えは、
過去・現在・未来を通して、一乗なり。
一つの乗り物、一つの教え方、一つの内容なり。
過去、幾百万年、幾千万年、
あるいはそれを超える歳月のなかで、
人間は、さまざまな社会をつくり、
さまざまな時代をつくり、
さまざまな文化をつくってきた。
その時代、時代に、
その地域、地域に、
その文化、文化に、
異なった色彩はあれど、
されど、仏法は一乗なり。

（『仏陀再誕』より）

仏の教えが過去・現在・未来を通して一乗だとするならば、なぜ彼はいろいろな仏でもない魂を霊媒し、そしてその教えを本に著わさなければならなかったのだろうか。これには、多くの矛盾がある。彼がもしそれを「方便」というならば、その方便の定義そのものが仏教の定義と違うのである（方便という言葉は、実際は比喩という意味である。ウソという意味ではない。きっと彼は、国語辞典によって「嘘も方便」という言葉をひいて、それによって正しくない方便という言葉の使い方を本によってしたのだろう）。

そして、真理勝者の教えは一乗ではなく、最低四乗存在する。それは、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナ、そして真理勝者へ至るための無上最上の道である。

◉「縁起の法」の迷解説は無智の証明

さて、「縁起」とは、縁が起こると書きますが、まず、この「縁」とは何かということについて、話をしておきたいと思うのです。これは、仏教の思想としては、長らく人口に膾炙（かいしゃ）した言葉でもあり、今でもその流行から遠ざかっていない思想でもあると思います。人びとは時に触れ、折に触れ、「ご縁があった」とか、「縁を大切にしたい」、「袖ふり合うも他生の縁」（原文のまま。正しくは、「袖ふれ

合うも他生の縁」）というふうな言葉を使います。こうした「縁」の思想というのが、仏教国であるということからか、日本でも長らく伝わってきたようです。

この縁とは何かと言うと、この世に偶然なるものはない、という考え方の表れのひとつなのです。その奥には結局、ひとつの「愛」の思想があると言ってもよいのです。人間というものは、目に見えないえにしの糸によって結びつけられているのだ。したがって、この世で偶然に会うように思ったとしても、実は、そのえにしの糸によって、深い絆によって結びつけられているのだ。こうした考え方であるわけです。

（『釈迦の本心』より）

大川氏が「縁起の法」を解説する箇所であるが、「縁起の法」は、釈迦牟尼の法の中でも土台となる法である。それがこのような解釈をされてはたまったものではない。

一般には「無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取著・有・生・苦」という言葉で知られている「縁起の法」とは、わたしたちがマハー・ボーディ・ニルヴァーナからこの欲六界に落下したプロセスを説き明かした、いわばこの苦しみの世界へ転生したいきさつを明かす最高の法なのである。詳しくは『生死を超える』（オウム出版）を読んでいただきた

いが、したがって、ここでいう「縁」とは滅するべきものであっても、決して「ご縁があった」などと喜ぶべきものではない。これは明らかに仏教を理解していない証拠である。

◉〝業〟は魂の記憶として残る?

こうした「業」の観念がありますが、これは確かに魂のなかに記憶として残っており、「魂の傾向性」という観念でとらえ直してもよいと思います。

人間にはやはり魂の傾向性があって、そうした傾向性を持っている人間は、ある一定の環境が現れたときに、似たような行動のパターンを起こして、みすみすそうした型のなかにはまり込んでいく、落とし穴に落ちていくということがあります。このように「業」というものも、魂の傾向性としてとらえていくという考え方が、現代的であろうと思います。

(「釈迦の本心」より)

「業」というものが魂の中に記憶として残っているというのは全くでたらめである。「業」というものには、二つある。それは「善業」と「悪業」で、それらはもともと魂に備

わっているものではない。わたしたちがマハー・ボーディ・ニルヴァーナから落下して今生まで積み重ねてきたものなのである。魂（＝真我）の本性とは、それらの業とは一切離れた、絶対の自由・幸福・歓喜なのである。

◉悪の根源を他人のせい？

悪とは、魂そのもののなかにひそむ性質ではありません。悪とは、お互いの魂の自由と自由が相剋するところに生まれたゆがみであり、ひずみなのです。

人間は、そもそも、自分ひとりでは、いかなる悪も犯しえません。つまり、悪とは、他人の存在、ほかの生命の存在、あるいはまた、ほかの物体の存在をもってはじめて、その姿をあらわしてくるものだからです。

（『太陽の法』より）

「人間は自分ひとりではいかなる悪も犯さない」というが、これは明らかに仏教の教えではない。

仏教は三つの毒を説く。それは、「貪（貪り）・瞋（嫌悪）・癡（無智）」の三つである（オ

ウム真理教では、「愛著・邪悪心・迷妄」という正確な訳語を採用している）。これが人間の煩悩の根源とされている。そしてこれは、人間がマハー・ボーディ・ニルヴァーナから落下したときからとらわれ続けているものなのである。

したがって、たとえその行為において、あるいは言葉の働きにおいて、悪をなさないとしても、心の行ないにおいては悪が生じるのである。よって、この三毒という根本的な煩悩を破壊し、最終的にマハー・ボーディ・ニルヴァーナへ到達せよという教え、これが真の仏教なのである。

これではまるで、悪の根源を他人のせいにしているようではないか。

◉正しさを有するのは、〝神〟それとも〝真我〟？

「正しさ」を知るとは、神の心を知るということなのです。…（略）…。

神の心、神のエネルギー体としての性質を理解していただくために、私は、本書以外にも、霊言集を刊行して、高級神霊の声を伝えております。そして、この高級神霊の霊言こそ、神の心を知るための最大のよすがとなるはずです。ですから、高級神霊のことばを通して神の心を知り、「正しさ」をつかんで、自らの八正道の指針としていただきたいと思っています。

私が、みなさんにお伝えしている高級神霊の声が、はたしてほんものかどうかを知る基準は、それによって、自らの心が感銘を受けるかどうか、自らの心が感動するかどうかです。ですから、みなさんが、もしそれらの書物に、魂の底から共鳴するものがなければ、霊言集はすてて、自らの頭で、合理的な基準を打ちたてて、「正しさ」を追究すればいいでしょう。しかしもし、高級神霊の霊声を、神近き人びとのことばだと信じられるならば、彼らの教える正しさを人生のヒントとして生きていくべきです。いずれにしても、最終的に「正しさ」を決定するのは、真我なる自分自身であり、自分自身の奥底にひそむ神性が納得し、共鳴するかどうかなのです。

（『太陽の法』より）

これはわけがわからない。一体「正しさ」を有しているのは神なのか、それとも真我なのか。〝「正しさ」の基準を示すのが私の使命〟と言いながら、これでは全く逆効果である。

◉真の仏陀は愛を見ることもできる

愛とは、それを手にとって見ることができないし、これが愛ですと取り出して、人に見せることもできないものだからです。…（略）…。

例えば、風。私たちは、風そのものの存在を目で見て、確かめることができません。…（略）…。

愛とは、すなわち、風のようなものです。

（『太陽の法』より）

現代物理学では、風を見ることは可能である。そして、真の仏陀は「愛を見ること」も可能なのである。

◉真実の愛、「四無量心」

愛は病です。この病におかされると、すべての人は、熱に浮かされ、熱に苦しみ、夜も眠れなくなってゆきます。しかし、その熱中にこそ、真なるものがあり、つきはてぬ生命の躍動があるのです。

（『太陽の法』より）

愛と愛着は違う。そして、愛と愛情も違う。このような病をもたらすようなものは、煩悩を背景とした愛着や愛情のことで、真実の愛ではない。

それでは、真実の愛とは何かというと、これは大乗の「四無量心」の愛、純粋に他の幸福と成長を願い、そこに一切の見返りを求めない慈愛、それを愛というのである。

◉仏教の常識が通用しない大川流

まず、現代人にとっては、この止観ということが、なかなかわからんであろうと思います。止観とは、一体何であるか。まあ、漢字を見れば、「観ずることを止める」と書いてあります。…（略）…。では、その「観」を止めるとは、いかなることであろうか、これについて、話していかねばならぬでしょう。

（『幸福瞑想法』より）

これは大川氏が瞑想について無智であることを示している。止観とは「止」と「観」とに分けられ、「止」とは「寂静」、「観」とは「観照」を意味している。つまり、寂静とは心を静めていくことであり、観照とは功徳を積み、光を強めていくということなのである。

この二つにより、如実智見（にょじつちけん）となり、遠離（おんり）、離貪（りとん）し、解脱していくという瞑想の方法を表わしている言葉なのである。『「観」を止める』などとは、勘違いも甚だしい。

8　大川流言葉の遊び――仏教の戒を無視した綺語集

仏教における口の悪業には四つある。それは、妄語・綺語・悪口・両舌（中傷）である。この中の綺語とは、軽薄な言葉、たわごとを指し、意味のない言葉のことをいう。以下に挙げる大川隆法氏の記述はまさに綺語である。これらはコメントするに値しない。賢明な読者の皆さんが、それぞれの意味のなさを読み取っていただきたい。

●シヴァ神として後の世に知られる、シルヴァナンダという方が西インドに生まれます。この方は、やがて、破壊の神と呼ばれるようになりますが、実は、当時の軍事的英雄であり、後にギリシャに生まれた、アレキサンダー大王（紀元前三五六－三二三）なのです。

（『黄金の法』より）

●愛については、私たちだけではなくて、あの世でもいま研究中です。イエス様を中心

にした愛のグループがあって、あの世の高級霊であっても、日夜愛について議論中なのです。愛というのはそれほど大きな問題集なのです。

…（略）…菩薩・如来であっても日々探究中で、探究して「これが愛だ」というものを取り出したら、一度それを実践してみます。そして、どうもうまくいかないと、ちょっと違う面があるのではないかということで、また勉強します。

（『真理の発見』より）

●そこは如来界であったのですが、その方は無門慧開と名乗られました。しばらく話をして、それから縁側のほうへ連れていってくれて、指さして「あそこのへんを見てください。」と言うので見ると、塀を越えたところに小道が出ていて、そのむこうは蓮の池になっていました。「あれがお釈迦様いきつけの蓮の池です。」などと教えてくれました。

（『真理の発見』より）

●（Q:弥勒様はどうでしょうか。）

弥勒様を出すと、いまちょっとまずい人が某宗教団体にいますので……。

（Q：いま出ておられるのですか。）

ええ、やはり、この世に出ているという人がいる場合は、「触らぬ神に祟りなし」がいいのではないかと思います。

（『真理の発見』より）

●そのための方法はどうしたらよいのかというと、これは霊道を開けとは言いませんが、実は天上界にアンテナを向けて波長が合えば、実際上、引いてこれるのです。私などは、ぼーっとしていると、インスピレーションがどんどん降りてきて、アイディアもどんどん湧き出てきて、現実的には対応できなくなるほどなのです。それにすべて対応していると仕事がいっぱい増えてくるので、なるべくインスピレーションを受けないように、一生懸命に努力して囲いをつくっているくらいなのです。実際につぎからつぎへと新しいアイデアが降りてくると、かえって仕事ができなくなるので、降りてこないようにバリヤーを張っています。

（『太陽のメッセージ』より）

●それから次は、二十二ページにありますように正座自体についてはあまり私は注文いたしません。なぜなら私が長持ちしないからであります。結跏趺坐ができないのであります。足が長すぎるのでしょうか、短すぎるのでしょうか、わかりませんができない。

（『瞑想の極意』より）

●それから鼻から入れて鼻から抜くのもあります。口から吸って口から出すことも可能です。それはその人の身体の体質とも関わるのです。鼻の穴が大きい人は鼻でいいと思います。鼻だけでは酸素がまかなえない方は、やはり口を動員せざるをえないと思うのです。

みなさんにお教えするので、昨日の夜ちょっと実験してみたのですが、鼻で入れて鼻で出せるかどうか自分でやってみましたら、二分くらいで呼吸困難におちいってくるということを発見いたしました。私のような体形の方は、鼻だけでやるのはやめられた方がいい。顔が真っ赤になってくると思われます。それで、そういう体形の方は口を使われることが望ましい。やせた方で鼻の穴が大きい方は鼻でやられたらいいと思います。

（『瞑想の極意』より）

●私もおなかが出てから（悪霊の影響を）はね返す率が強くなりまして、幸福の科学をやっていると、どんどん身体が発展してくるんですね。やはり三界は唯心の所現と言うのですが、その通りですね。…（略）…。

だから霊障を受けたり、悪霊の影響を受けて自分が調子が悪いと思う方は、とりあえず体重を増やしてみるというのも手ですよ。体験的に言うと一キロ増えると一匹分ぐらいになりますよ。五キロ増えると五匹分ぐらいははね返せるようになります…（略）…。

とりあえず五キロ増やしてみるというのも手ですよ。五キロぐらい増やしてみると、何か自信が出てきて、おなかが出てくると寛容になったりして、効果は抜群ですよ。ただ、成人病がありますから、ときおり肉体を鍛えておくこともだいじです。

（『瞑想の極意』より）

●ところが、西洋のほうでは、そんな生まれ変わりの池とか鎮守の森とか産土神とかあるわけがないので、そういうところはまた別なところがあります。それぞれの人間の意識に応じたところがあって、私がいろいろ聞いている範囲においては、なかにはけっこう進んでいて、役所があるところもあるのです。

生まれ変わりでも、官僚制を布いて、官僚がいばっているところもあるのです。整理番号札を出して、「何番さん、来てますね。」と呼ばれる。そして、生まれ変わり願書というのがあって、それに書かないといけないわけです…（略）…。

過去の経歴から見て、妥当だと思えばＯＫが出ます。しかし、妥当ではないと待機が出るわけです。幸福の科学みたいに、六カ月待機が出るわけです。それで六カ月待機させられて、その間専門家がいろいろと話すわけです。「こいつは新潟より、魂において田舎っぽいから、やっぱり東京のどまんなかに生まれたほうがいいんじゃないか。昔は、両親がずいぶん田舎の山のなかに生まれて、そのなかで苦労しているから、もう一回山のなかに生まれるよりは、やはり今度は都会的センスを身につけさせたほうがいいから、東京の山の手の一流の家に生まれさせよう。」と、こういう案が出るわけです。

（『人生の発見』より）

第三章　真実の仏陀の教えはこうだ！
――麻原彰晃尊師説法

第一話「実践的八正道と四無量心」

（九一年一月三日　於・富士山総本部）

◉心をさいなむ幻影

人の心というものは、幻影にさいなまれている。この幻影というのは、一体どういうことかというと、自己の目的、自己の利益というものと相反する方向にベクトルの向きを作ってしまうということである。そして、そのベクトルの向きを本当の意味で自分自身のために向けること、それが八つの実践、そして四無量心（しむりょうしん）である。

スタートから、いきなり抽象的な話になってしまった。もっとこれを具体的に表現したいと思う。

まず、人はだれでも幸福にありたいと考える。そして、その幸福という意味合いは、チャクラの示す煩悩（ぼんのう）の満足度で決まる。そして、その煩悩を満足させるための心の働きは、自己の利益と相反する方向へ現象を動かしてしまう。

例えば、おいしいものを食べたいと、たくさん食べたいと考える者がここにいたとしよう。この者は、初めのうちはおいしいものを食べ、そしてたくさん食べるという行為

に走ったと。ところが、この味覚というものは、年齢とともに退化し、そして、そのおいしさを味わうことができなくなる。

ところが、もし、この魂が自分のおいしいと欲するものを布施したとしよう。すると、布施された対象の喜びの感覚がその布施した者の心に伝わり、そして布施した者の味覚は倍増し、人の味わえないようなおいしさを味わうことができるはずである。

例えばこれは、『ガティーカーラ経』というお経、これは『南伝大蔵経』の『中部経典』に入っている内容の中にもあるが、ずっとずっと以前に登場したカッサパ仏を供養したガティーカーラは、そのカッサパ仏に対して供養した功徳によって、二週間、歓喜の状態にあったといわれる。

では、量についてはどうだろうか。これも同じように量をたくさん食べるということは、ひたすら胃袋が下がり、そして下垂し、大量に食べないといられなくなる。つまり、それは、初めの段階では少しで満足した胃袋が、大量に量を放り込まないと耐えられないという状態なのである。

もし、この大量の食糧の一部でも布施をするならば、その人の胃袋は死ぬまで健全な状態であり、ある一定の状態で満足を覚えることができるはずである。皆さんも知って

のとおり、この胃の下垂というのは、例えば副腎を圧迫したり、あるいは下腹部臓器を圧迫することにより、いろいろな病の原因ともなる。

◉自己の利益を離れよ

科学的に見ると、仏教の教えというものは、人を絶対的に幸福にする教えということができる。それは、自己の利益、この自己の利益を離れることにより、本当の意味では、自己に利益が還元されるんだということの教えでもある。

例えば、性欲の例を採ってみよう。本来、男性にしろ、女性にしろ、長い性的快感を味わいたいと願望する。そして、その満足を得るために、いろいろなエロティックな本、あるいはビデオ等で情報を入れる。ところが、心はもう既にそこで頂点に達しているから、実際の交わりでは性的感覚を味わうことができない。

もし、これが逆に真理の実践をし、徳を積み、そして、そういうデータのない状態で、本当に執着する異性と交わり、性的な行為を行なったならば、それは当然、現代の人の感じる何倍、何十倍といったような性的エクスタシーを感じることができるはずである。

つまり、これも、皆さんが求めている楽しみというものと、実際皆さんが行なってい

る実践というものとの間に、大きな隔たりがあることを表わしている。

◉嫌悪――悪魔の使い手

では、嫌悪はどうであろうか。本来人間というものは、人と、特に愛する人たちと交わり、楽しみ、そして語らい、それを喜びと考えるはずである。しかし、嫌悪の情は、自己の心を閉鎖し、そして、いいことにつけ、悪いことにつけ、ブロックすると。そして、この嫌悪の念が強くなると、相手の優しさ、あるいは相手のあったかさというものが伝わらなくなり、すべてが自分を痛め付けてるといったような被害妄想的な心の働きになり、結局自分自身を孤立させ、不幸にしてしまう。

もし、法をしっかりと学び、人の話をよく聞き、受け入れようとするならば、そのようなことはないはずである。そして、絶えず人の良さを学ぶことにより、心は成熟するはずである。つまり、この嫌悪こそ、悪魔の使い手といわざるを得ない。なぜならば、この嫌悪は、わたしたちが本来他の魂から学ばなければならない多くの利益というものを阻害するからである。

ということは、食欲、あるいは性欲、あるいは嫌悪といったもの、これらはすべて、

わたしたちがこの修習をし、実践することにより、何の利益も与えず、逆にマイナスの方向に向かうんだなということが理解できるはずである。

◉愛着の思わぬ欠点

次は、アナハタ・チャクラに対する愛着はどうであろうか。愛着というものは、自己と縁の深い者に対して、その者を独占し、そしてその独占する対象、この独占する対象にいろいろ近付いてくる者に対して、それを排斥したいと願う、つまり嫌悪とも絡んでくるが、そういう感情の働きを持たせる心の働きである。この愛着は、もっともっとその魂と親しくなりたい、もっともっとその魂を知りたい、もっともっとその魂と接したいというような心の働きであるる。そして、それを根本として生起した心の働きが愛着である。

ところが、その愛着は、先程も述べたように、その愛着する対象と他とを区別する、あるいは、その愛着する対象を独占したいと思う心の働きによって、その愛着する対象に対して逆にいろいろな圧力をかける形になる。これはちょうど舟を岸に着けたいと考えていて、竿で舟を押すようなものである。つまり、力を強く入れれば入れるほど、舟

は遠のいてしまう。

本来、一つ一つの魂というものは、自由でなければならない。ということは、その自由を尊重されてこそ、本当の意味での和合というものが成立するはずである。ところが、例えば親子関係において、例えば兄弟関係において、例えば夫婦関係において、例えば友人関係において、この愛着のディフェクトというもの、欠点というものに陥りがちである。よくこれについては気を付けなければならない。

◉権力――その衣を脱ぎ捨てたとき

では、次に、権力に対する志向とはどうであろうかと。わたしたちの権力に対する思いは限りない。なぜならば、その権力というものは、権力によって多くのものを満たしてくれる。しかし、この権力は、わたしたちの着ている服にたとえることができる。つまり、これは、いつまでもその座に就くことができないということなのである。

例えば、生まれ、王子として成長し、王様となり、死んでいくと。しかし、死んだときには、この王様という衣を脱ぎ捨てなければならない。その王様という衣を脱ぎ捨てたとき、果たしてその人が平常心でいられるかどうか。つまり、権力という乗り物を使

わないでその人が幸福でいられるかどうかということ、これが最も大切なことなのである。

そして、権力とは衣であるということを、権力というものは乗り物であるということを理解したならば、その権力は、すべての衆生を利する最高の衣、あるいは最高の乗り物ということになるであろう。

しかし、その権力と自分自身、服と自分自身、あるいは乗り物と自分自身とを同一であると考えるならば、この人はまさに死というものを直前にしたとき、あるいはその権力から追われたとき、その苦しみは計り知れないものになるであろう。

それはちょうど、別の表現で表わすことができる。大変な寒冷地、例えば氷点下三十度とか、四十度といったような、例えば北海道の北端。この真冬を想像していただきたい。ここに、大変暖房の効いた家があると。そして、その中で生活をしていると。この人は、こう考えた。「わたしは、北端で、マイナス三十度、四十度のところで、平気で生活することができる」。しかし、本当にそうであろうか。この人が生活をしているのは、マイナス三十度、四十度という外界と違い、暖房に温められた、二十度、あるいは二十五度といったポカポカの空間で生活しているということになる。

権力とは、この家にたとえられる。そして、本当に幸福を願うなら、この家を取り払った状態、マイナス三十度、マイナス四十度といった中で、暖房を使わず生活できるかどうかということなのである。

そして、そういうことを培っていくこと、これが真理であり、これが仏教なのである。

◉捨の精神——ひたすら今を作り上げよ

では、徳の現象についてはどうであろうか。この徳の現象は、わたしたちを現世において、いろいろと満足させてくれる。そして、現世的な願望というものは、すべてがかなうということになる。しかし、この徳もまた幻影なのである。なぜならば、徳を積まず、徳を使い続けると、必ずその徳は切れ、そして喜びから苦しみに転落するからである。

これはちょうど、冷暖房機にたとえることができる。ある時期、暖房を入れる。しかし、その暖房機が壊れて、次のスイッチが入るとき、それは冷房機となると。しかし、もしこの暖房機を絶えず修理し、チェックし続けるなら、長い間、その暖房の恩恵に預かることができるであろう。これが、功徳の特徴なのである。よって、この功徳の現象

に対して、頓着をすべきではないのである。

そして、四つの無量心の最高の心の状態は、無頓着、捨の精神だといわれている。真理でいう捨の精神とは、こういうバックボーンをもとに説かれた教えなのである。つまり、今味わっている苦楽というものは、過去、あるいは過去生のわたしたちの言葉、行為、心の働きという三つが重なり合って現象化しているにすぎないと。ということは、今味わっている喜び、あるいは苦しみというものは、今、この瞬間とは無縁なのである。つまり、これはあくまでも過去の幻影であり、現在の結果ではないのである。

よって、すべての魂を救済する大乗の仏陀になるためには、この無頓着、今なされている苦しみ、あるいは楽に対して、一切頓着せず、ひたすら今を作り上げていくということが大切なのである。

◉仏教は未来志向

ここで、出てくるのが、二正勤二正断なのである。

つまり、これはどういうことかというと、今、瞬間瞬間を全力で生きる、あるいは未来を全力で生きることこそ、仏教の真義だからなのだ。そうだね。だって、過去の幻影

を今味わってるわけだけど、この幻影は、過去のあくまでも幻影であって、わたしたちの未来に何の恩恵もない、そうじゃないか？　それよりも、今、瞬間瞬間を二正勤二正断の実践により、今なしている善法を増大させる、そして今まだ徳がなくてできないけど、未来において徳が備わったら、絶対にこの徳を積むぞという、徳を増大させるように意識する。そして、今なしている悪業を断ずる。そして、未来において生じるかもしれない悪業を出ないように心がけると。これは、どうですか。未来のわたしたちの楽を決定するものだと思わないか。ということなんだよ。つまり、仏教というものは未来志向なのであると。

◉覚者となるための七つの土台

では、そのためには、一体どういう行ないをなせばいいのかということになってくる。これは、まず、「何が真理で何が真理でないか」というデータをひたすら入れるということから始めなければならない。この、何が真理で何が真理でないかを何度も何度も繰り返し、データを入れなければ、わたしたちは過去世からの幻影によって、過去世からの錯綜（さくそう）によって、ものを正確にとらえることができなくなっている。よって、ひたすら記

憶修習をすべきなのである。

そして、今何の修行をなしたら最もメリットがあるのか、これを次は選択しなければならない。例えば、初心者があまりにも難しい瞑想をなすとか、あるいは修行の進んでる者が、簡単なマントラを唱えて、自分は修行しているんだと錯覚するとかいうことは、その人の修行を挫折させたり、あるいは進まなくさせたりする要因となる。よって、この二番目の何を選択するのか、これは最も大切な仏陀へ至る道の一つということになる。

そして、三番目は、決めた修行に対して勇敢に修行を進める。そして、たゆまず修行を進める。これが必要なのである。これを勤精進（ごんしょうじん）、あるいは勇気をもって精進するといわれている。これが、第三の仏陀の心を支える、仏陀の心を作っていく修行なのである。

そして、第四番目は、「ああ、今日は疲れたな」と言いつつ修行するのではなく、「うれしいなあ、自分は修行してうれしいなあ」「自分は修行できることがうれしいなあ。自分は教学できることがうれしいなあ。徳を積むことがうれしいなあ」という、この修行に対して、ただひたすら喜びを持ち続ける修行、これを実践しなければならないのである。

そして、生活のリズムをしっかりと作り、心身が軽快になるように、修行によって軽

快になるように組み立てる修行。これが、第五のわたしたちの仏陀に至るための土台を培う修行なのである。

そして、この五つを達成し、ある程度固まったならば、次はしっかりと自分の内側を見つめる。そして心を鎮め、心を止め、観察する。そして、どういう煩悩があり、自分はどういう世界へ転生するのか、あるいはどういう、自分自身は思考のパターンを持っているのかをしっかりと理解すると。これが第六番目のわたしたちが仏陀になるための土台となる修行なのである。

ここで、問題になってくるのは、例えば一番目の、何が真理で何が真理でないのかということを理解できてないと、この六番目、この観察の智においても当然ずれが出てくる。

例えば、現代人は、膨大な時間を使って、マンガ、アニメ、あるいはテレビ、映画、雑誌等のデータを入れている。そして、こういうデータは、わたしたちの知らないうちに深い意識に根付き、このデータをもとに判断をするという謬見解（びゅうけんかい）を培うことになる。よって、その前に、ひたすら何が真理で何が真理ではないのかの記憶修習をなさなければ、このサマディというものが、全く無効になってしまうということなのである。

そして、先程も述べた、例えば嫌悪、性欲、食欲、愛着、権力、あるいは現世の願望成就といったようなもの、こういうものに対して一切頓着をしない、頓着しないでただひたすら修行を続けるということ、これが七番目の大乗の仏陀に至る土台なのである。

なぜかというと、先程も述べたとおり、現在という瞬間は幻影である。これは、過去、あるいは過去世のわたしたちのカルマが生起し、現われている状態を表わしている。その現在の幻影にとらわれ、それにより再びまた悪業を積み、あるいはそれにおぼれ、功徳を積まない状態を作ってしまうならば、その人の現在から投影された未来というものは、また不幸ということになる。よって、現在を無視しなければならないわけである。

これが、正生活(しょうせいかつ)、正しい生活なのである。

◉苦を与えれば、苦が返る

では、わたしたちの身(しん)・口(く)・意(い)における、まず身の行ないの統御については、何をなせばいいのであろうかと。

例えば、わたしたちが殺生をする。例えば、相手に苦痛を与える。苦痛を与えると、その苦痛のヴァイブレーションは、シャクティーパットと同じで、自分の内側に内在さ

れる。

ということは、苦の総量は一定なのである。苦の総量が一定だということは、相手を苦しめたそのデータというものは、必ず自分に入ってくるわけである。

すると、例えば小さな虫たちにも、当然苦しみというものはあるから、その苦しみの総量がわたしたちに伝わってくる。もっと徳の高い大きな生き物は、その苦しみの量が多いから、その苦しみのデータというものは、わたしたちのコーザルにしっかりと根付かされると。

逆に、生き物を安らがせるということは、その生き物の喜びというものがわたしたちの心に根付かされるから、これはわたしたちの喜びという形で返ってくる。

この理法を理解するならば、殺生を離れ、すべての魂を安らがせることの偉大さに気付くであろう。

次は、偸盗（ちゅうとう）である。人の心というものは、必ず、その人の所有しているものに対して愛着している。あるいは、執着している。ということは、他の者の所有を盗むということは、その人に、その執着から来る苦しみを与えることになる。よって、偸盗をした段階で、その持ち主の苦しみが伝わってくることになる。そして、これは、逆に自分の執

着しているものを奪われるという形で苦しまなければならないのである。

よって、他に対してものを施し、盗まないということは、これは、だれの利益でもなく、自己の利益なのである。

同じように、邪淫がまさにそれである。これには、正確にいうと二つの意味合いがある。

その第一は、性エネルギーを漏らすことにより、徳の消耗をし、疲弊するということである。

そして第二は、これは仏教的に、一般的にいわれている邪淫だけども、これは、他人の妻、あるいは他人の夫を寝取るということなのである。これは、先程も述べたとおり、他人の妻、あるいは他人の夫というものは、その夫婦関係において必ず愛着し合い、あるいは独占し合おうという心の働きがある。その、独占し合おうという心の働きに対して、強烈なダメージを与えるわけだから、当然その苦しみというものは、その対象者に向かってくる。そして、その苦しみをしょうことにより、未来において苦しまなければならないというカルマを作るのである。

よって、正行為の原則というものは、殺生を離れ魂を慈しむ、偸盗を離れ物を施す、

邪淫を離れ、そして本当に心からの友情を培うということになる。

◉言葉の統御をなせ

では、言葉についてはどうであろうか。まず、妄語がくる。この妄語によって、ものを覆い隠したいと考える心の働きが増大される。この心の働きは、わたしたちのカルマの顕現化を遅くする。つまり、一種の、そこで袋、あるいは箱を作ったような形になる。ということは、その嘘が多ければ多いほどカルマの現象は遅れることになる。カルマの現象が遅れると、カルマの理法が理解できなくなり、悪業を多く積む。そして、それによって、結局その悪業が現象化するときは、取り返しのつかないようなカルマの清算となっている。これが妄語なのである。

よって、真実を語るということは決していいことではない。このいいことではないとは何かというと、何かわたしたちにいいことが返ってくるということではなく、すべてのものの現象が、はっきりありのままに見えるということなのである。

では、綺語（きご）はどうであろうか。この綺語というものは、心の働き即言葉という、つまりコーザル即アストラルという、この流れを変えてしまう。つまり、心にもない言葉を

大量に語ることにより、アストラルに心と関係のない、要らぬものがたくさん生じることになる。ということは、心で思ったことが現象化せず、屈折を生むわけである。ということは、この綺語は、わたしたちがものを達成していく上において最も大きな障害ということになる。

では、悪口はどうであろうか。これは、殺生と同じである。つまり、悪口を放つことにより、相手に苦しみを生起させる。そして、その苦しみのヴァイブレーションは、自分の心に返ってくるのである。

ということは、綺語を話さず、真実だけを語ると。そして、悪口を語らず、人に優しい言葉を語るということは、それだけでわたしたちに大きな恩恵があるのである。

仏典で、悪口により地獄に落ちたという例があるが、これはまさにそれである。つまり、これは殺生と同じ——形態は違うがね——カルマの返り方をするわけである。

では、両舌（中傷）はどうであろうかと。この両舌においては、必ず嫉妬心というものが、心の背景にある。そして先程も述べた、その嫉妬心の背景には、また嫌悪という心の働きがある。ということは、どんどんどんどん自分の世界を小さくしていくということになる。そうだね。嫌悪は壁でしょ。

ということは、この両舌は、人と人とを仲たがいさせ、それと同時に自分の世界を小さくしていき、最終的には自閉症になるということになる。

ところが、人と人とを和合させる、この言葉の実践をなすならば、心が豊かになり、壁が取り払われ、多くのいろんな人と交わることができ、そして、いろいろなことを学び、魂が成長するということになる。

ということは、妄語、綺語、悪口、両舌というこの行為、この言葉の行為は、これはわたしたちを不幸に陥れるものであり、真実を語り、必要のない言葉を語らず、人に優しい言葉を語り、人と人とを和合させる言葉を語るということは、わたしたちの心の病を取り除き、わたしたちの心を広大にしていくということになる。そして、これを正語と言うのである。

◉教えを基に、検討する

では、八正道（はっしょうどう）の原則である、正見解（しょうけんかい）、正思惟（しょうしい）とは何であろうかと。

まず、この正見解とは、仏陀の教え、グルの教え、この教えをただひたすら学ぶということである。ここで、考えてはいけないということである。

なぜならば、先程も述べたとおり、わたしたちがわたしたちと呼んでいる思考は、小さいときから両親によって植え付けられたもの、兄弟によって植え付けられたもの、あるいは社会的環境によって植え付けられたもの、例えばマンガ、雑誌、テレビ、アニメーション、映画等である。そして、これをわたしたちはわたしたちと考えている。

ところが、今から二千五百年前登場した仏陀釈迦牟尼（ぶっだしゃかむに）の教え、あるいはそれより以前にあったインド・ヨーガの真実の教え、あるいは二千五百年から現在に至るまでの多くの聖者方が修行して得た結果の教えといったものは、これは普遍的な教えなのである。それは、なぜかというと、「無常」、だれが見ても絶対にそうだとわかる基本的原理を背景として教えているからである。

よって、まず、この正見解というものは、自分の考えを捨て、ひたすら学ぶことから努力すると。そして、例えば、『マハーヤーナ』（オウム真理教の信徒機関誌）だったら、五回ぐらい必ず読み、そして熟読すると。これを熟読して、初めて正見解のベースができたということになる。

次はそれに基づき、自分自身の身の行ない、口の行ない、あるいは心の働きについてチェックを入れると。これが、正思惟なのである。

つまり、正見解、正思惟というものは、仏典をもとに、あるいはグルの教えをもとに、自分自身を検討していくプロセスなのである。ということは、先程の正語、あるいは正行為、正生活といったようなもの、これが仏典の基本的な教えであり、そして、その背景というもの、バックボーンというものも、皆さんは理解できたわけだから、これから正見解に立つならば、それを実践しなければならないということが理解できるはずである。

◉そして、サマディへ

そして、その次の正記憶修習（しょうきおくしゅじゅう）。この正記憶修習というのは、一度、二度、三度、四度、五度ではなく、例えば自分がなさなければならない瞑想を、十万回、あるいは百万回といったレベルで、何度も何度も記憶すると。この、なぜ何度も何度も記憶するかというと、これが一定の回数になると、わたしたちの表層意識から潜在意識に入り、そして潜在意識から超潜在意識へとデータが流れていくからである。

そして、この正記憶修習をなして、はじめてわたしたちが深い意識へ到達したとき、その正記憶修習をなしたものが、乗り物となり、いいですか、乗り物となり、わたした

ちをいろいろな神秘の世界へと案内するわけである。

ということは、その前に、正記憶修習のなされないような禅の瞑想というものは、わたしたちに利益を与えないということになる。あるいは、単に勤行だけにいそしんで、つまり読経だけをしている場合は、これはその後の寂止、正観の正サマディというものがないから、これも正確に観察できないということになる。つまり、詞章、あるいはマントラの修行というものがあって、初めてその次の寂止、正観のサマディに入ることができるわけである。

そして、このマントラ修行、詞章の修行だけではなく、日々の生活において、心、言葉、行為の統御をする。特に、言葉と行為の統御をすることが大切なのである。

これが、八つの聖なる実践、八正道と呼ばれるもののすべてである。

◉四無量心——広大で深遠な心を

では、次に四無量心、これはなぜ実践しなければならないかということになる。

例えば、「ホー、湖面に映る虚像のような様々な幻影に引きずられ、輪廻の大海を浮沈する生き物たち。彼らすべてが絶対自由、絶対幸福なるマハーヤーナにて安住すること

ができるよう、四無量心込めて大乗の発願をいたします」（「大乗の発願」。オウム真理教で唱えられているマントラの一つ）と。このマントラを十万回唱えると。すると、何かの現象があるとき、このマントラが浮いてくると。そして、例えば、自分の妻、子供、あるいは夫、あるいは父母、あるいは友人といったものを見たとき、なんて哀れなんだろうという思いが生じてくると。まず、これが心の生起、これが慈悲の悲なのである。

そして、その哀れみを、強く強く持つ、強く強く持つだけではなく、この人を本当に幸せにするためには、どうしたらいいんだろうかと考えなければならない。すると、おのずと結果は一つということになる。それは、真理を実践させるしかないなと。真理を実践していただくしかないなと。この人は、真理を実践してこそ、初めて今の苦しみから脱却することができるんだと。こう考える思い、これが悲なのである。

では、慈愛とは何であろうか。この慈愛とは、例えば愛着する対象、あるいは好感を持つ対象に対して、その好感を持つ対象が、もっともっと幸福になってほしいと、本当の意味で幸福になってほしいと思う心の働きである。

ということは、これも一つしかない。それは、絶対的自由・幸福・歓喜を相手に与えること、無常を超越した歓喜を相手に与えることなのである。

確かに、無常から常に至るときに、相当多くの苦しみを対象に与えることになるかもしれない。しかし、それは、ちょうど病を治すとき手術が必要なように、あるいは注射が必要なように——多くのわたしたちの友というものは病んでいる。よって、その病を治すとき、そこに苦しみが生じたとしても、それは逆に喜びとして、つまり、その人の心の成熟の喜びとして、見守るべきなのである。

そして、この慈愛、そして悲の実践、これはわたしたちの心を大きくしてくれる。そして、視野を拡大してくれることになる。

ところが、この慈愛、悲しみといったようなもの、悲といったようなものは、どちらかというと、対象が自分よりもレベルの下の者に向けられる心の働きなのである。自分より優れた者、あるいは自分と同等の者に対しては、どのようにしたらいいか。

それは、称賛の瞑想、そして称賛の実践こそ、わたしたちの心を広大にしてくれるのである。つまり、もし、対象を称賛することができるなら、自分より優れている者を称賛することができるなら、心は自然とその人の良さを学ぼうとする。そうだね。ところが、対象に対して闘争本能を持ったり、嫉妬心を持ったりすると、その人の欠点を一生懸命見つけようとし、そして、それと同時に心はどんどんどんどん屈折してくる。そう

だね。

よって、第三番目の実践、この称賛というのは、自分と同等、あるいは自分よりも優れた者に対して行なうべき、真理の実践者の実践過程なのである。

そして、第四のパターン、これは、先程も述べた、この現実、この現象、今というものに対して頓着しないということなのである。この今というものは、だれも、どうすることもできないのである。つまり、それはどういうことかというと、この今というものは、過去世から、あるいは今生の過去において培ったわたしたちの善業と悪業との集積が今なのである。

◉六つの極限との関係は

そして、今から二千五百年前、原始仏教において、出家が称賛されたのはそこにある。つまり、出家というものは今の苦しみから逃れることができる。そして、ひたすら善法を増大させることができる。善業を増大させることができる。初めのうちは、逃れていてもカルマの返りにより、少しずつ少しずつ苦しみが現象化する。

しかし、それがある段階になると、善業しか積んでないから、あるいは善法しか実践

してないから、その苦しみがなくなったとき、その魂の五蘊、つまり肉体、感覚、イメージ、意志、意識（現在は新しい訳語、「形状-容姿・感覚・表象・意志の遂行・識別」を使っている）というものは、善の集積、功徳の集積になるのである。そして、その段階でサマディに入り、そして高い世界をすべて認識し、この人間界がいかに低い世界であるかを認識し、この人間界に対する愛着を捨て、ニルヴァーナ、あるいはマハー・ニルヴァーナへと入っていくのである。

これが、実践的八正道、そして四無量心のすべてである。

ということは、この八正道、あるいは四無量心というものは、六つの極限と何ら変わらないことになる。そうだね。

これを六つの極限に当てはめるならばどうなるかというと、まず、三つの布施、財施・法施・安心施という三つの布施によって功徳を積む。そうだね。次に、持戒を守ることによって、言葉、心、行為の統御をする。そうだね。そして、三番目の忍辱、ね、耐え忍ぶ修行によって、無頓着の心を培っていく。そうだね。四番目の精進の実践によって、今の善業よりもっともっと大きな善業を形成し、そして悪業を止滅する。そうだね。そして五番目の瞑想のステージ、サマディのステージによって、その培ってきたわたした

ちの五蘊をじっくり観察し、そしてわたしたちの悪業の部分、あるいは善業の部分をチェックし、そして悪業の部分はまたひたすら落とすと。そうだね。そして、最後、智慧、六神通に到達すると。そうだね。

ということは、八正道、あるいは六つの極限、これは全く同じなのである。これが、わたしの悟り得た八正道であり、わたしの悟り得た六つの極限であり、わたしの悟り得た四無量心である。

第二話「迷妄をはらう――真の六波羅蜜」

（九一年五月二十五日　於・東京赤羽会館）

注……説法の前に、導師「五戒の詩」（作詞作曲麻原彰晃）を歌われる。

◉自己の苦しみは自己の因

「五戒の詩」

1　戒め守って高い世界へ　わたしは進む道をとる
はるかな過去から過ちを　犯し続けて今気付く
自己の苦しみは　自己の因

2　魂守って生きること　それは天へと至る道
殺生せずに生きるなら　身体の苦痛は消え失せる

自己の苦しみは　自己の因

3
人に施し生きること　それは豊かな人生を
偸盗（ちゅうとう）せずに生きるなら　貧苦の生活越えられる
自己の苦しみは　自己の因

4
見返り求めず真愛を　振りまくならば幸せに
邪淫（じゃいん）をせずに生きるなら　楽しい交友待っている
自己の苦しみは　自己の因

5
真実語って生きること　それは願望かなう道
妄語を離れて生きるなら　正しい選択待っている
自己の苦しみは　自己の因

6
正しい生活営むならば　正しい選択身に宿る

飲酒を離れて生きるなら　過ち犯さず幸せに
自己の苦しみは　自己の因

◉不還へと至る法

この五つの戒めは、皆さんのよく知っている六つの極限（六波羅蜜）の、第二番目に当たります。もともとこの六つの極限、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧というプロセスは、北伝仏教の典型的修行体系であり、この修行体系は、在家の皆さんを、欲界を飛び越し、形状界へと至らせ、そして、不還の道へと至る、そのための法です。

ですから、皆さんがもし、単に欲望天界や憤怒天界へ至りたいと考えるならば、この六つの極限のすべてを実践する必要はありません。しかし、もし在家であって、例えば父母を扶養しながら、あるいはどうしても出家して修行できないという条件の場合、この六つの極限をお勧めします。

◉「六つの極限」のすべて

この六つの極限の構成は、まず布施により貪りを放棄すると。次は戒律により、先程

述べたとおり、外的悪いデータを吸収しないと。そして、絶えず心が集中できる状態をつくり上げていくと。

そして三番目の忍辱により、これは在家ならではのことですが、例えば嫌な上司、あるいはオウム真理教の教えに反対してる夫の方や妻の方と、あるいは親戚と。こういう人たちに悪口や非難をされることにより、カルマを落としてもらうと。

そして四番目。よりいっそう自分自身の器を広げ、広大な、深遠な心を形成するために、二正勤（にしょうごん）二正断（にしょうだん）の実践に入る。つまり、今なしている善法を、もっともっと増大させたいと願うと。あるいは今まだ達成することのできない善法に対して、その善法が生じるように願うと。あるいは、今まだ断ずることができない悪業に対して、それが止滅しますようにと、捨断できますようにと、願うと。そして、今断ずることのできる悪業は、どんどん断じていくと。これにより、皆さんの五蘊（ごうん）――形状・容姿・感覚・表象・意志の遂行・識別――は、悪いデータがなくなり、どんどんいいデータになっていくと。

そして、瞑想に入ることにより、より深く自分自身の内側を分析し、完全にこの人間界を捨断すると。それにより、上から光が降りてき、そして智慧が現われると。そしてその智慧をもとに、自分の生き方を決定していくと。これが六つの極限のすべてです。

◉百億年の果報

皆さんがこの六つの極限、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧というこの六つをね、しっかりと身に付けて、在家成就、あるいは出家し、解脱し、完全な自分自身を確立し、完全な神聖天への道を確立する。それをわたしは、願ってやみません。

皆さんが今生、努力する年数は、例えば、今ゼロ歳の子がいくら頑張ったって、せいぜいが百年。しかし、その子供たちの得る果報は、例えば神聖天に転生する場合、一カルパという長きにわたり転生することになります。これはオウム真理教の計算では、最低百億年であるという計算が出ています。ですから、百年を費やし、百億年の平安、そして自由を得るのか、あるいはその百年を苦しみと喜びを経験しながらそれにとらわれ、そして来世三悪趣へ落ちるのかは、皆さん一人一人がしっかりと迷妄を払い、そして真理の実践を行なうかどうかで決まってきます。

◉永遠の幸福をテーマとして

今日、この六つの極限の中で、皆さんが最もなさなければならないこと、それは第三番目の忍辱であるということをわたしは言いたい。出家の場合、例えば周りの人たちが

口のカルマ、あるいは行為のカルマを積まないから、なかなかカルマ落としをしてくれないと。しかし、在家だと、多くの悪趣へ転生する人がいるわけだから、その人たちが皆さんのカルマを確実に落としてくれます。

ですからそのとき、皆さんたちはね、大いに喜んで、「わたしはカルマを落としてもらったんだ」と、「あの人はその縁によって真理へ結び付きますように」というゆったりとした、広大な心で、周りと接してごらんなさい。そのとき皆さんはこう考えるはずだ。「わたしはオウム真理教にいてよかった」って。そして、こういう逆の法は、オウム真理教にしか存在しないんだということに気付くはずです。

ここでわたしが言った逆の法とは、一般の宗教というものは、喜びを求めるための宗教なんだね。つまり、修行して、その生、楽になりたい。あるいは、修行して、今をよくなりたい。しかし、真理は、永遠の幸福をテーマとしています。もちろん、永遠のテーマが解決できるわけだから、瞬間瞬間の喜びというのは、どんどん生起してきて当然であると。いいですね。

では最後に皆さんと一緒にね、この六つの極限をもう一度言葉として確認しましょう。まず第一は、布施。布施の徹底だね。第二は、持戒の徹底だね。第三は、忍辱の徹底だ

ね。第四は、精進の徹底だね。第五は、禅定の徹底だね。第六は、智慧の徹底だね。そうです。そして、この六つの徹底、六つの極限を、しっかりと実践していただきたいと思います。

初め、わたしは大川隆法氏の教義上の誤りを全力を挙げて指摘しようと努めた。ところが、その間違いのあまりの多さにあ然としてしまい、結局その一部を取り上げるにとどまった。したがって、本書でわたしが取り上げなかったものには問題がなかったということではないのである。

ところで、わたしは大川氏の著書『真理の発見』の中に、興味深い記述を見つけた。それは、次の箇所である。

「私などは、しょっちゅうあの世へ行っていますが、なかなかあまりいいところへは行けなくて悪いところばかり連れ回されています。地獄なんて行きたくもないのに、ずいぶん行かされました。この前も地獄の畜生道というところへ行ってきましたが、あまりいいところではありませんね。テクテク歩いていてフッと見ると、横に子牛みたいなのが出てきたので、これはすごいなと思って、よく見たら犬でした。なんと全長四メートルも五メートルもあって、牛どころではありません。そして、犬かと思ったらじつは元は人間なのです。こういうのを見るとゾッとしますね。」

これは、まさに現在の大川氏の内側にどのような要素が蓄積されているのかを表わしている。つまり、間違いなく来世は地獄へ転生するという証明である。それは、くしくも大川氏自身が、

「もし、あやまった宗教家が、『救世主の愛』を説こうとすると、来世で待っているのは、九次元世界ではなく、四次元地獄界最深部の無間地獄です。なぜならば、神の声をまちがって伝えるという行為は、実在界においては、殺人、強盗以上の凶悪な犯罪行為だからです。」（『太陽の法』より）

といったその言葉どおりのことが現象化するということなのである。私は今回、幸福の科学を実践している人たちが、いったい何を求めて幸福の科学にいるのか、大変疑問を持ったものである。

実はオウム真理教のバッシングが始まる、今から約三年前、わたしが神々と対話をしているとき、神々がこうおっしゃった。

「必ず、真理をねじ曲げる者が現われる。よって、お前はあまり仏法の教えを一般に広めてはならない。」

一般に広めてはならないとはどういうことかというと、要するに一般の書店に多くの法を並べてはならないということである。

そして、わたしはその意味合いが大川隆法氏の登場によって、よく理解することができた。これだけ釈迦の名前を語り、これだけ仏法をねじ曲げた人も珍しいだろう。しかし、大川隆法氏は立場上、もうオウム真理教のわたしの教えを取り、そしてまねることはできないであろう。

よって、わたしはこれから仏法の真髄というものをどんどん日本に、日本の皆さんに出していきたいと考えている。そして、少なくともわたしが死ぬまでは、大川隆法氏の口を使って真理の法を語るということはあり得ないであろう。

大川氏とその教えを実践する人たちが、一日も早く真理に目覚めることを願うばかりである。

参考文献『スシーマ』

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はラージャガハ（国王の家）の竹林にあるリス飼養所にとどまっておられた。

一

二　そのとき、世尊は尊敬の念をもって扱われ、礼拝され、栄誉を与えられ、賛美され、敬意を払われ、衣服・施し物・座臥所・病人のための必需品である薬を得られた。

三　向煩悩滅尽多学男出家教団も、尊敬の念をもって扱われ、礼拝され、栄誉を与えられ、賛美され、敬意を払われ、衣服・施し物・座臥所・病人のための必需品である薬を得た。

四　しかし、他の宗派の信奉者である托鉢修行者たちは、尊敬の念をもって扱われず、礼拝されず、栄誉を与えられず、賛美されず、敬意を払われず、衣服・施し物・座臥所・病人のための必需品である薬を得なかったのである。

二

五　そのとき、托鉢修行者スシーマ（正しい分け前）は、托鉢修行者たちの大集団と一緒に、ラージャガハに暮らしていた。

六　そこで、托鉢修行者スシーマの集団は、托鉢修行者スシーマにこう言った。

「来なさい、友スシーマよ。あなたは出家修行者ゴータマの面前で神聖行を実行しなさい。あなたは法則を習得し、わたしたちに伝授してください。わたしたちはその法則を習得して、信徒に説きましょう。

　このようにして、わたしたちもまた、尊敬の念をもって扱われ、礼拝され、栄誉を与えられ、賛美され、敬意を払われ、衣服・施し物・座臥所・病人のための必需品である薬を得ることでしょう。」

七　「わかりました、友よ。」

と、托鉢修行者スシーマは、自分自身の集団に約束して、聖者アーナンダの所に行った。行くと、聖者アーナンダとお互いに親しいあいさつを交わし、友情のこもった丁寧な話を交わして、そばに座った。

三

八　そばに座った托鉢修行者スシーマは、聖者アーナンダにこう言った。
「友アーナンダよ、わたしはこの法則と律において、神聖行を実行することを望んでいます。」
九　そこで、聖者アーナンダは托鉢修行者スシーマを案内して、世尊がいらっしゃる所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。
一〇　そばに座った聖者アーナンダは、世尊にこう申し上げた。
「尊師よ、この托鉢修行者スシーマは、このように言ったのです。
『友アーナンダよ、わたしはこの法則と律において、神聖行を実行することを望んでいます』と。」
一一「アーナンダよ、それでは、スシーマを出家させなさい。」
一二　そこで、托鉢修行者スシーマは、世尊の面前で教団に入る許可を得、出家者としての義務・責任を伝授されることを得たのである。
一三　そのとき、尊師の面前で、多くの向煩悩滅尽多学男たちが認識を明らかにした。
「わたしたちは、『生は破壊され、神聖行を果たし、なすべきことをなし、この世に存在

することにおいて求めることはない』と認識し理解しています」と。

四

一四　そして、聖者スシーマは聞いたのである。

「尊師の面前で、多くの向煩悩滅尽多学男たちは認識を明らかにしたそうである。

『わたしたちは、「生は破壊され、神聖行を果たし、なすべきことをなし、この世に存在することにおいて求めることはない」と認識し理解しています』と。」

一五　そこで、聖者スシーマは、その向煩悩滅尽多学男たちの所に行った。行くと、その向煩悩滅尽多学男たちとお互いに親しいあいさつを交わし、友情のこもった丁寧な言葉を交わして、そばに座った。

一六　そばに座った聖者スシーマは、その向煩悩滅尽多学男たちにこう言ったのである。

「聖者方は世尊の面前で、

『わたしたちは、「生は破壊され、神聖行を果たし、なすべきことをなし、この世に存在することにおいて求めることはない」と認識し理解しています。』

と認識を明らかにしたそうですが、本当ですか。」

「そのとおりです、友よ。」

一七「また、あなた方聖者は、このように気付き、このように見て、様々な性質の如意を経験するのですか。

すなわち、一つがいろいろな形となり、いろいろな形が一つとなり、明らかにテレポーテーションをなし、塀を超え、城壁を超え、山を超え、くっついていないで行くのは例として空間の中のようであり、地に浮き上がったりもぐったりするのは例として水中のようであり、水上を沈むことなく行くのは例として地上のようであり、空間の中を蓮華座で散歩するのは例として翼ある鳥のようであり、このように大いなる如意とこのように大いなる威神力がある、あの月と太陽とを手で触れて磨き上げ、神聖天界にまで、身をもって欲望を満足させることに従事する、と。」

「そうではありません、友よ。」

一八「また、あなた方聖者は、このように気付き、このように見て、清浄であって人間を超越した天耳界において、天や人間、あるいは遠くや面前の双方の声を聞くのでしょうか。」

「そうではありません、友よ。」

一九「また、あなた方聖者は、このように気付き、このように見て、他の生命体や他の

魂の心によって心を把握して認識し理解するのでしょうか。すなわち、
愛著がある心を愛著がある心と認識し理解する。
愛著を離れた心を愛著を離れた心と認識し理解する。
邪悪心がある心を邪悪心がある心と認識し理解する。
邪悪心を離れた心を邪悪心を離れた心と認識し理解する。
迷妄がある心を迷妄がある心と認識し理解する。
迷妄を離れた心を迷妄を離れた心と認識し理解する。
閉じ込められた心を閉じ込められた心と認識し理解する。
散らばった心を散らばった心と認識し理解する。
大いに広がった心を大いに広がった心と認識し理解する。
大いに広がっていない心を大いに広がっていない心と認識し理解する。
より優れたものを持っている心をより優れたものを持っている心と認識し理解する。
無上の心を無上の心と認識し理解する。
サマディに入った心をサマディに入った心と認識し理解する。
サマディに入っていない心をサマディに入っていない心と認識し理解する。

離解脱した心を離解脱した心と認識し理解する。
離解脱していない心を離解脱していない心と認識し理解する、と。」

「そうではありません、友よ。」

二〇「また、あなた方聖者は、このように気付き、このように見て、様々な前世の生き様を思い出すのでしょうか。

すなわち、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元期と再生期において、

『わたしはあそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような楽苦を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、そこに転生した。

そこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、ここに転生した。』

と、このように状態と説明とがある、様々な前世の生き様を思い出す、と。」

「そうではありません、友よ。」

二一「また、あなた方聖者は、このように気付き、このように見て、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体を見るのでしょうか。

すなわち、生命体が要素の蓄積に従って達し、死んだり転生したり、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解する、と。

『尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において悪行を具足し、言葉において悪行を具足し、意識において悪行を具足し、聖人を非難し、誤謬見解を抱き、誤謬見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、離別であり、悲痛に向かうことであり、破滅である地獄に転生した。

尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において善行を具足し、言葉において善行を具足し、意識において善行を具足し、聖人を非難することなく、正見解を抱き、正見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、幸福に向かうことである天の世界に転生した。』

と、このように、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体を見て、生命体がその要素の蓄積に従って達し、死んだり転生したり、卑しかったり高貴であったり、器

量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解する、と。」

「そうではありません、友よ。」

二二「また、あなた方聖者は、このように気付き、このように見て、安穏であり離解脱していて、形状・容姿において混沌とした状態から超越していて、身によって接触してとどまるのでしょうか。」

「そうではありません、友よ。」

二三「今ここで、聖者方には、この回答とこれらの法則が生起しないことがあるのですか。」

二四「これはないのです、友よ。」

二五「どうしてですか。」

「わたしたちは智慧の離解脱をしたからです、友スシーマよ。」

二六「わたしは、この聖者方が要約して話した意義を詳しく解釈できません。この聖者方が要約して話した意義を、わたしが詳しく解釈できるように、聖者方はどうかわたしにお説きください。」

二七「友スシーマよ、あなたが解釈しようと、あなたが解釈しまいと、やはり、わたしたちは智慧の離解脱をしたのです。」

五

二八　そして、聖者スシーマは座から立って、世尊がいらっしゃる所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。

二九　そばに座った聖者スシーマは、向煩悩滅尽多学男たちと一緒に対話し、そのすべてを世尊にお告げした。

三〇「スシーマよ、前に法則の集中継続の精通があり、後から煩悩破壊の精通があるのだ。」

三一「尊師よ、わたしは、この世尊が要約してお話しになった意義を詳しく解釈できません。尊師よ、この世尊が要約してお話しになった意義を、わたしが詳しく解釈できるように、世尊はどうかわたしにお説きください。」

三二「スシーマよ、あなたが解釈しようと、あなたが解釈しまいと、やはり、法則の集中継続の精通が前にあり、後から煩悩破壊の精通があるのだ。スシーマよ、これについてどう思うか。形状-容姿は常だろうか、あるいは無常だろうか。」

「無常です、尊師よ。」

三三「では、無常であるものは、苦しみだろうか、あるいは楽だろうか。」

「苦しみです、尊師よ。」

「では、無常で、苦しみで、悪化の法則であるものを、『これはわたしのものである。これはわたしである。これはわたしの真我である』と認めることは、妥当であろうか。」

「そうではありません、尊師よ。」

三四「感覚は常だろうか、あるいは無常だろうか。」

「無常です、尊師よ。」

「では、無常であるものは、苦しみだろうか、あるいは楽だろうか。」

「苦しみです、尊師よ。」

「では、無常で、苦しみで、悪化の法則であるものを、『これはわたしのものである。これはわたしである。これはわたしの真我である』と認めることは、妥当であろうか。」

「そうではありません、尊師よ。」

三五「表象は常だろうか、あるいは無常だろうか。」

「無常です、尊師よ。」

「では、無常であるものは、苦しみだろうか、あるいは楽だろうか。」
「苦しみです、尊師よ。」
「では、無常で、苦しみで、悪化の法則であるものを、『これはわたしのものである。これはわたしである。これはわたしの真我である』と認めることは、妥当であろうか。」
「そうではありません、尊師よ。」
三六「経験の構成は常だろうか、あるいは無常だろうか。」
「無常です、尊師よ。」
「では、無常であるものは、苦しみだろうか、あるいは楽だろうか。」
「苦しみです、尊師よ。」
「では、無常で、苦しみで、悪化の法則であるものを、『これはわたしのものである。これはわたしである。これはわたしの真我である』と認めることは、妥当であろうか。」
「そうではありません、尊師よ。」
三七「識別は常だろうか、あるいは無常だろうか。」
「無常です、尊師よ。」
「では、無常であるものは、苦しみだろうか、あるいは楽だろうか。」

「苦しみです、尊師よ。」

「では、無常で、苦しみで、悪化の法則であるものを、『これはわたしのものである。これはわたしである。これはわたしの真我である』と認めることは、妥当であろうか。」

「そうではありません、尊師よ。」

三八「スシーマよ、それならば、過去・未来・現在の、心の中や外側の、総体的な微細な、卑しく高貴な、どんな形状・容姿でも、遠くや面前のすべての形状・容姿は、『これはわたしのものではない。これはわたしではない。これはわたしの真我ではない』と、このように、これを如実に完全な智慧によって見ることができる。

三九　過去・未来・現在の、心の中や外側の、総体的な微細な、卑しく高貴な、どんな感覚でも、遠くや面前のすべての感覚は、『これはわたしのものではない。これはわたしではない。これはわたしの真我ではない』と、このように、これを如実に完全な智慧によって見ることができる。

四〇　過去・未来・現在の、心の中や外側の、総体的な微細な、卑しく高貴な、どんな表象でも、遠くや面前のすべての表象は、『これはわたしのものではない。これはわたしではない。これはわたしの真我ではない』と、このように、これを如実に完全な智慧に

よって見ることができる。

四一　過去・未来・現在の、心の中や外側の、総体的な微細な、卑しく高貴な、どんな経験の構成でも、遠くや面前のすべての経験の構成は、『これはわたしのものではない。これはわたしではない。これはわたしの真我ではない』と、このように、これを如実に完全な智慧によって見ることができる。

四二　過去・未来・現在の、心の中や外側の、総体的な微細な、卑しく高貴な、どんな識別でも、遠くや面前のすべての識別は、『これはわたしのものではない。これはわたしではない。これはわたしの真我ではない』と、このように、これを如実に完全な智慧によって見ることができる。

四三　スシーマよ、このように見て、有学の聖なる多学の弟子は、形状・容姿においても現世否定し、感覚においても現世否定し、表象においても現世否定し、経験の構成においても現世否定し、識別においても現世否定する。現世否定して離愛著し、離愛著から離解脱する。離解脱において離解脱し、こうして精通が生じ、『生は破壊され、神聖行を果たし、なすべきことをなし、この世に存在することにおいて求めることはない』と理解し認識する。

スシーマよ、出生を条件として老死があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

四四「スシーマよ、生存を条件として出生があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

四五「スシーマよ、とらわれを条件として生存があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

四六「スシーマよ、渇愛を条件としてとらわれがあると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

四七「スシーマよ、感覚を条件として渇愛があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

「スシーマよ、接触を条件として感覚があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

「スシーマよ、六つの感覚要素と対象を条件として接触があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

「スシーマよ、心の要素-形状-容姿を条件として六つの感覚要素と対象があると、あなた

は見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

「スシーマよ、識別を条件として心の要素-形状-容姿があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

「スシーマよ、経験の構成を条件として識別があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

「スシーマよ、非神秘力を条件として経験の構成があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

四八「スシーマよ、出生の滅尽から老死の滅尽があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

四九「スシーマよ、生存の滅尽から出生の滅尽があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

五〇「スシーマよ、とらわれの滅尽から生存の滅尽があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」

「スシーマよ、渇愛の滅尽からとらわれの滅尽があると、あなたは見るか。」

「そのように見ます、尊師よ。」
「スシーマよ、接触の滅尽から感覚の滅尽があると、あなたは見るか。」
「そのように見ます、尊師よ。」
「スシーマよ、六つの感覚要素と対象の滅尽から接触の滅尽あると、あなたは見るか。」
「そのように見ます、尊師よ。」
「スシーマよ、心の要素-形状-容姿の滅尽から六つの感覚要素と対象の滅尽があると、あなたは見るか。」
「そのように見ます、尊師よ。」
「スシーマよ、識別の滅尽から心の要素-形状-容姿の滅尽があると、あなたは見るか。」
「そのように見ます、尊師よ。」
「スシーマよ、経験の構成の滅尽から識別の滅尽あると、あなたは見るか。」
「そのように見ます、尊師よ。」
「スシーマよ、非神秘力の滅尽から経験の構成の滅尽があると、あなたは見るか。」
「そのように見ます、尊師よ。」
五一「スシーマよ、また、あなたはこのように気付き、このように見て、様々な性質の

如意を経験するのであろうか。

すなわち、一つがいろいろな形となり、いろいろな形が一つとなり、明らかにテレポーテーションをなし、塀を超え、城壁を超え、山を超え、くっついていないで行くのは例として空間の中のようであり、地に浮き上がったりもぐったりするのは例として水中のようであり、水上を沈むことなく行くのは例として地上のようであり、空間の中を蓮華座で散歩するのは例として翼ある鳥のようであり、このように大いなる如意とこのように大いなる威神力がある、あの月と太陽とを手で触れて磨き上げ、神聖天界にまで、身をもって欲望を満足させることに従事する、と。」

「そうではありません、尊師よ。」

五二「スシーマよ、また、あなたはこのように気付き、このように見て、清浄であって人間を超越した天耳界において、天や人間、あるいは遠くや面前の双方の声を聞くのであろうか。」

「そうではありません、尊師よ。」

五三「スシーマよ、また、あなたはこのように気付き、このように見て、他の生命体や他の魂の心によって心を把握して認識し理解するのであろうか。すなわち、

愛著がある心を愛著がある心と認識し理解する。
愛著を離れた心を愛著を離れた心と認識し理解する。
邪悪心がある心を邪悪心がある心と認識し理解する。
邪悪心を離れた心を邪悪心を離れた心と認識し理解する。
迷妄がある心を迷妄がある心と認識し理解する。
迷妄を離れた心を迷妄を離れた心と認識し理解する。
閉じ込められた心を閉じ込められた心と認識し理解する。
散らばった心を散らばった心と認識し理解する。
大いに広がった心を大いに広がった心と認識し理解する。
大いに広がっていない心を大いに広がっていない心と認識し理解する。
より優れたものを持っている心をより優れたものを持っている心と認識し理解する。
無上の心を無上の心と認識し理解する。
サマディに入った心をサマディに入った心と認識し理解する。
サマディに入っていない心をサマディに入っていない心と認識し理解する。
離解脱した心を離解脱した心と認識し理解する。

離解脱していない心を離解脱していない心と認識し理解する、と。」

「そうではありません、尊師よ。」

五四「スシーマよ、また、あなたはこのように気付き、このように見て、様々な前世の生き様を思い出すのであろうか。

すなわち、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元期と再生期において、『わたしはあそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような楽苦を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、そこに転生した。

そこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、ここに転生した。』

と、このように状態と説明とがある、様々な前世の生き様を思い出す、と。」

「そうではありません、尊師よ。」

五五「スシーマよ、また、あなたはこのように気付き、このように見て、清浄であって

人間を超越した天眼によって、生命体を見るのであろうか。

すなわち、生命体が要素の蓄積に従って達し、死んだり転生したり、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解する、と。

『尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において悪行を具足し、言葉において悪行を具足し、意識において悪行を具足し、聖人を非難し、邪悪見解を抱き、邪悪見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、離別であり、悲痛に向かうことであり、破滅である地獄に転生した。

尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において善行を具足し、言葉において善行を具足し、意識において善行を具足し、聖人を非難することなく、正見解を抱き、正見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、幸福に向かうことである天の世界に転生した。』

と、このように、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体を見て、生命体がその要素の蓄積に従って達し、死んだり転生したり、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったり

するのを認識し理解する、と。」

「そうではありません、尊師よ。」

五六「スシーマよ、また、あなたはこのように気付き、このように見て、安穏であり離解脱していて、形状・容姿において混沌とした状態から超越していて、身によって接触してとどまるのであろうか。」

「そうではありません、尊師よ。」

五七「スシーマよ、今ここで、この回答とこれらの法則が生起しないことがある。スシーマよ、これはなされていないのだ。」

六

五八　そのとき、聖者スシーマは世尊の頭で足にひざまずいて、世尊にこう申し上げた。「尊師よ、愚者のように、宗教的に罪深い者のように、不善者のように、違反がわたしを圧倒しました。このわたしは、このようによく言明された法則と律において、法則の泥棒である出家者でありました。尊師よ、それゆえに、世尊はこのわたしの違反を違反として、行く末、来世においてお受けください。」

五九「スシーマよ、確かに、愚者のように、宗教的に罪深い者のように、不善者のよう

に、違反があなたを圧倒した。あなたは、このようによく言明された法則と律において、法則の泥棒である出家者であった。

六〇　スシーマよ、たとえるならば、無法者で悪事を働く者を捕らえて、国王に会わせたとしよう。

『王よ、この者はあなたにとって無法者で悪事を働く者です。この者にあなたのお望みの処罰を命じてください』と。

国王はこの者にこのように断言する。

『友よ、行きなさい。その男をしっかりしたロープで手を後ろにして強く縛り、かみそりで頭の毛を短く刈り込み、激しい小太鼓によって、車道から車道へ、四つ角から四つ角へと連行し、南門から出て、市の南で彼の頭をたたき割りなさい』と。

そこで、その男をしっかりしたロープで手を後ろにして強く縛り、かみそりで頭の毛を短く刈り込み、激しい小太鼓によって、車道から車道へ、四つ角から四つ角へと連行し、南門から出て、市の南で彼の頭をたたき割る。

六一　スシーマよ、これについてどう思うか。その男は、これによって苦しみや激痛を経験するであろうか。」

「そのとおりです、尊師よ。」

六二「スシーマよ、その男はこれによって苦しみや激痛を経験するのだ。それゆえに、このようによく言明された法則と律において、法則の泥棒である出家は、より苦しむ結果となり、より苛酷である結果となり、またさらに破滅に至らしめるのである。

六三　スシーマよ、そして、あなたは違反を違反として実感し、法則のとおりに償ったので、わたしはあなたからそれを受けよう。スシーマよ、聖なる律において、違反を違反として実感し、法則のとおりに償うならば、この繁栄がある。そして、行く末は自制を身につけることになるのである。」

（『発端相応』七〇「スシーマ」）

真実の仏陀の教えはこうだ！――
幸福の科学の会員よ、聞きなさい！

一九九一年十月二十七日　初版発行

定　価　九八〇円
著　者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二―一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© Shoko Asahara 1991
ISBN4 - 900497 - 86 - X　C0014　P980E

至福の未来をあなたの手に

オウム真理教 AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか？

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

真実の仏陀の
教えはこうだ！

資料請求券

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

Enjoy Happiness

えんじょい・はぴねす

月刊『えんじょい・はぴねす』創刊

――主な内容――

◆Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて――えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

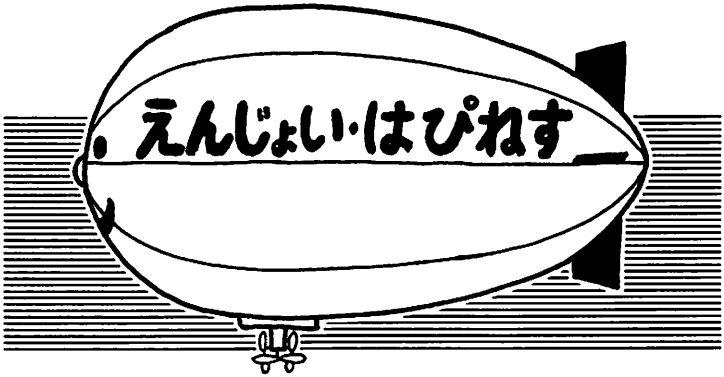
◆Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「宗教には興味があるけど、でも、ちょっと……」
そんなあなたに贈る最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できる権利を持ついわば特別会員です。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？



特典の一部を紹介すると……

◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
◉国外及び海外の本支部道場をいつでも利用可。
◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
◉成就者との対面および電話による悩み相談。

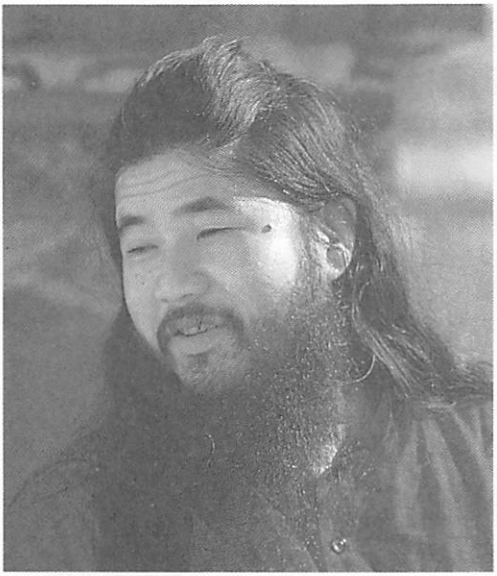
〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊「えんじょい・はぴねす」の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教道場までお問い合わせください。

麻原彰晃の世界シリーズ　麻原彰晃 著

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。



絶賛発売中!!

PART-1

幸福に至る四つの実践

B6判　定価2500円

仏教の基本ともいえる「四預流支」。多彩な側面から縦横無尽に説いた画期的な説法群は、魂の解放を願う人にはもちろんのこと、幸福な人生を求めるすべての人に本当の生き方を指し示す。

PART-5
カルマの法則（仮題）

B6判　定価980円

二千六百年前釈迦牟尼が説いたあの〝カルマの法則〟の教えが麻原尊師によって現代に甦る。すべての人はこの法則に支配されていることを、豊富な実例が証明。この真実を前にして、わたしたちが幸福になる術は？

近日発刊予定

PART-2

尊師、麻原彰晃が斬る！

B6判　定価980円

願望成就の秘訣、UFO＆宇宙人、医学、幼児 教育、音楽、食養、輪廻転生etc……。麻原彰晃尊師の魅力たっぷりの説法に、歌手、鹿島とも子さんとの対談も加わって、ますます充実。

PART-4

宗教にだまされるな！

B6判　定価980円

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい道を説き示す麻原彰晃尊師。本当の幸福と心のやすらぎを得たいあなたに。

PART-3

真実！六道輪廻

B6判　定価980円

永遠の真実〝六道輪廻〟。すなわち、わたしたちはこのサムサーラ（苦界）をさまよい、苦しみ続けているのだ。果たして、ここから抜け出すことはできるのか？臨死体験・大霊界・チャネリングなど、間違いだらけの死生観に終止符を打つ書。

●ご注文は書店にてお願いします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版

本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325

営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL03(5370)1598

マハーヤーナ・スートラ
MAHAYANASUTRA

麻原彰晃 著

解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!

解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 (本 社) 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325
(営業部) 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598

超能力 秘密の開発法

人が修行によって"人間"を
超えようとするとき、
必ず人知を超えた"力"が身につく。
超能力のつかない修行などニセモノだ！
日本でただ一人の最終解脱者、
麻原彰晃が贈る究極の秘儀伝授。

B6判／320ページ
定価980円（本体951円）

お近くの書店にてお求めください。なお、直接弊社にお申し込みの場合は下記までお問い合わせください。

オウム出版
本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL 03（3439）6043　振替2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03（5370）1598

絶対幸福の鍵を解く

生死を超える

現実生活の苦悩から修行を志し、ついに解脱するに至った麻原彰晃尊師の貴重な体験をもとに、釈迦牟尼の「縁起の法」が、実はクンダリニー・ヨーガのプロセスそのものであったことを説き明かした名著「生死を超える」。

改訂版

麻原彰晃

八十六年十二月発売以来、宗教、精神世界に興味を持つ読者に絶大な支持を受け、解脱を目指す修行者にとって、手放すことのできない〝バイブル〟となっております。新たに八人の体験談をまじえて贈る全面改訂版。

◎誰にも書けなかった知られざる世界が今ここに！
◎真実を求めるあなた、人生の悩み、苦しみを乗り越えたいあなたに贈るヨーガ、仏教の真髄！
◎修行者二十一人の豊富な体験談も満載！

麻原彰晃著／B6判／定価1854円(本体1800円)

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)

●オウム出版 ●〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03(3439)6043/郵便振替：東京2-109325

仏陀の限りない叡智がここに甦る！

原始仏典講義 一

麻原彰晃

どんなに待ち望んだことだろう、この日を！
そして真理の復活を！
けがれきった現代にもたらされた
この灯明は、

私達に安らぎの世界を示すだろう
どんな学者も修行者も解き明かせなかった
仏陀釈迦牟尼の真理の法を、
あの麻原彰晃が鋭く解説！

最終解脱者麻原尊師が解き明かす仏陀釈迦牟尼の真実

【第 一 巻】

◎特　徴◎

- 『マハーヤーナ』未収録の『梵網経』第三誦品を詳述！
- 現代語訳をさらにわかりやすく全面改訂
- 仏陀釈迦牟尼の教義の根幹をなす二つの経典を完全版で一挙掲載！

原始仏典講義・第一巻
◆神通、宇宙観、そして瞑想プロセス
雑阿含経・五蘊相応、梵網経、
神足相応、沙門果経

以下続刊!!

A5判・312ページ・定価2500円(本体2427円)ご注文は書店にてお願いいたします。
直接弊社にお申しこみの場合は下記まで、(送料300円)
オウム出版　〒154東京都世田谷区上馬2-8-17
TEL.03(3419)6043　郵便振替　東京2-109325

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『真実の仏陀の教えはこうだ！』読者係」までお送りください。

〒154　東京都世田谷区世田谷2－8－17
オウム出版『真実の仏陀の教えはこうだ！』読者係」

◆各本支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市荒場441-8
布施精舎　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany

ISBN4-900497-86-X C0014 P980E 定価980円(本体951円)